栗林遺跡

第Ⅸ次
発掘調査報告書

1992年3月

中野市教育委員会

環濠内出土

序

栗林遺跡は、善光地寺平の弥生時代中期から後期にかけての「栗林式土器」と呼ばれる標式土器が出土し、その学史的意味から、昭和35年に県の史跡に指定されています。

このたび、この県指定史跡の範囲に近接する西側で、県営畑地帯総合土地改良事業中野西部地区農道工事が施工されることになり、工事着手前に緊急発掘調査を実施し記録保存を計ったものであります。

調査の結果、弥生時代と平安期の住居址計4軒と、当市では初めての環濠が検出され、その中から多量の土器が出土しました。

貴重といわれながらも資料が少なかった栗林遺跡ですが、今回の調査で当時の生活状態を究明し、土器編年をみるうえでも、大変大きな収穫を得た調査となりました。

本調査は冬季にかかり、御苦労の多い作業となりましたが、調査団の先生方はじめ、協力くださった作業員、地元栗林区の皆様方に心から感謝と御礼を申し上げます。

平成４年３月

中野市教育委員会

教育長　嶋　田　春　三

例　　言

1.　本書は、県営畑地帯総合土地改良整備事業の一環である、道路拡幅および改良工事にともない、北信地方事務所長と中野市長との契約に基づいて中野市教育委員会の編成した調査団によっ行なわれた、栗林遺跡（県史跡外）の緊急発掘調査報告書である。

2.　作図は、調査区平面図については、平板実測により縮尺1／100、遺構図等については、遣り方測量により縮尺1／20の実測図を1／2～5に縮図して掲載した。

3.　本書に関する写真撮影は、現地・遺物共に檀原長則、徳竹雅之が分担した。

4.　資料整理には、調査団の協力によって行なわれ、実測は、檀原、田中由美子徳竹が分担し、トレースは、山崎のり子、池田きよ子、斎藤淑子が分担した。

5.　報告書の内容執筆は、調査員が分担し文責は、執筆者にある。

6.　調査の実測図・写真・遺物等は、中野市歴史民俗資料館に保管してある。

7.　調査にあたり、地元栗林区をはじめ北信地方事務所土地改良課ならびに西部土地改良区の皆さま、長野県埋蔵文化センター、中島英子氏等多くの方々にご協力を賜わりました。

目　次

序
例言
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過 ---------- 1
第1節　発掘調査に至る経過 ---------- 1
第2節　調査日誌 ---------- 1
第3節　調査団の編成 ---------- 3
第Ⅱ章　調査地周辺の環境 ---------- 4
第1節　遺跡の立地と歴史的環境 ---------- 4
第2節　層序 ---------- 4
第3節　研究史概説 ---------- 7
第Ⅲ章　調査の成果 ---------- 11
第1節　遺構 ---------- 11
1、1号住居址 ---------- 11
2、2号住居址 ---------- 19
3、3号住居址 ---------- 20
4、4号住居址 ---------- 24
5、環濠址 ---------- 31
6、土壙（坑）と柱穴・溝 ---------- 45
第2節　遺物 ---------- 69
1、土器 ---------- 59
2、石器 ---------- 77
第Ⅳ章　まとめ ---------- 81

挿図目次

1 栗林遺跡位置図 ---------- 5
2 栗林遺跡調査全体図 ---------- 12
3 1号住実測図 ---------- 13
4 1号住柱穴実測図(1) ---------- 14
5 〃 (2)土壙・火床実測図-- 15
6 1号住4層付近遺物検出図 ---------- 16
7 〃 5層上付近遺物検出図 ---------- 17
8 2号住実測図 ---------- 20
9 〃 柱穴実測図 ---------- 21
10 3号住遺構実測図 ---------- 22
11 〃 柱穴実測図 ---------- 22
12 〃 遺物検出図 ---------- 23
13 4号住焼土検出図 ---------- 25
14 〃 炭化物検出図 ---------- 26
15 〃 遺構実測図 ---------- 27
16 〃 柱穴(1)炉址実測図 ---------- 28
17 〃 柱穴実測図(2) ---------- 29
18 環濠遺物検出図 (1面) ---------- 32
19 〃 (2面) ---------- 32
20 〃 (3面) ---------- 35
21 〃 (4面) ---------- 35
22 〃 (5面) ---------- 37
23 〃 (6面) ---------- 41
24 環濠・土壙実測図 ---------- 44
25 SK2・3・4遺構実測図 ---------- 46
26 柱穴遺構実測図(1) ---------- 47
27 〃 (2) ---------- 48
28 〃 (3) ---------- 49
29 〃 (4) ---------- 50
30 柱穴実測図(1) ---------- 51
31 〃 (2) ---------- 52
32 〃 (3) ---------- 53
33 〃 (4) ---------- 54
34 〃 (5) ---------- 55
35 〃 (6) ---------- 56
36 〃 (7) ---------- 57
37 土器実測図(1) ---------- 60
38 〃 (2) ---------- 62
39 〃 (3) ---------- 64
40 〃 (4) ---------- 66
41 〃 (5) ---------- 68
42 〃 (6) ---------- 70
43 土器拓影図(1) ---------- 71
44 〃 (2) ---------- 72
45 土師式土器実測図(1) ---------- 73
46 〃 (2) ---------- 74
47 石鏃実測図 ---------- 78
48 石器実測図(1) ---------- 78
49 〃 (2) ---------- 79
50 周辺の遺跡 ---------- 80

表目次

1 発掘調査史一覧表 ---------- 10
2 石器観察表 ---------- 77

写真目次

1 1号住南の東断面 ---------- 6
2 西から見た1号住 ---------- 11
3 石剣の出土 ---------- 13
4 1号住西の甕出土 ---------- 13
5 焼籾の出土 ---------- 18
6 南から見た1号住む西4層 ---------- 18
7 焼け米 ---------- 18
8 南から見たAB3~4 ---------- 18
9 南から見た2号住 ---------- 19
10 西から見た2号住 ---------- 19
11 南から見た環濠と2号住 ---------- 20
12 北から見た3号住 ---------- 20
13 3号住の土器出土状況 ---------- 23
14 西から見た3号住柱穴 ---------- 24
15 南から見た4号住の焼土・炭 ---------- 26
16 南から見た4号住の炭 ---------- 27
17 北から見た4号住 ---------- 29
18 西から見た4号住の東南の甕 ---------- 30

19 4号住南方の壺 ---------- 30
20 同 ---------- 30
21 4号住東の土壙 ---------- 30
22 南から見た環濠址 ---------- 31
23 南から見た環濠南の1面 ---------- 33
24 同所の甕の出土 ---------- 33
25 西から見た環濠の1面 ---------- 33
26 同所の赤彩土器 ---------- 33
27 西から見た環濠北の部分 ---------- 34
28 南から見た環濠南の部分 ---------- 34
29 同部分 ---------- 34
30 南から見た環濠の南 ---------- 36
31 同部分 ---------- 36
32 南から見た環濠中央断面 ---------- 36
33 南から見た環濠北の3面 ---------- 38
34 同 出土の甕 ---------- 38
35 同 部分 ---------- 38
36 同 石包丁の出土 ---------- 38
37 同 滑石製垂玉の出土 ---------- 38
38 北から見た環濠南4面 ---------- 39
39 同 部分 ---------- 39
40 同所小形壺の出土 ---------- 39
41 同 部分 ---------- 39
42 西から見た環濠北の4面 ---------- 40
43 同所 甑の出土 ---------- 40
44 同 甕の出土 ---------- 40
45 同 部分 ---------- 40
46 西から見た環濠北の4面 ---------- 42
47 同所 耳付の壺出土 ---------- 42
48 北から見た環濠北の6面 ---------- 42
49 同所 出土の小形壺 ---------- 42
50 環濠南底の赤彩椀形土器 ---------- 43
51 東から見た環濠南の5面 ---------- 43
52 東から見た環濠南の6面 ---------- 43
53 SK2とSK3 ---------- 45
54 南から見たSK2 ---------- 45
55 西から見たSK3 ---------- 45
56 AB15からAB20を見る ---------- 50
57 西から見たAB2・3付近 ---------- 50
58 柱穴96 ---------- 50
59 南から見たAB15～11の溝 ---------- 57
60 南からA19付近の溝 ---------- 57
61 西から見たAB3の溝 ---------- 57
62 濠出土土器（以下土器略） ---------- 61
63 同 6 ---------- 61
64 同 7 ---------- 61
65 1号住出土 1 ---------- 61
66 濠出土 3 ---------- 61
67 同 2 ---------- 61
68 同 4 ---------- 61
69 1号住出土 12 ---------- 63
70 A2出土 ---------- 63
71 濠出土 11 ---------- 63
72 同 17 ---------- 63
73 濠出土 14・30・34・B4・33 ---------- 63
74 同 18 ---------- 63
75 同 19 ---------- 63
76 同 13 ---------- 65
77 同 16 ---------- 65
78 同 20 ---------- 65
79 1号住出土 36 ---------- 65
80 濠出土 40 ---------- 65
81 1号住西出土 26 ---------- 65
82 濠出土 25 ---------- 65
83 同 44 ---------- 65
84 1号住出土 ---------- 65
85 A4出土 ---------- 67
86 濠出土 9 ---------- 67
87 同 42 ---------- 67
88 同 8 ---------- 67
89 同 10 ---------- 67
90 同 ---------- 67
91 同 ---------- 67
92 同 41 ---------- 67
93 同 27 ---------- 67
94 同 28 ---------- 67
95 同 38 ---------- 67
96 B13出土 24 ---------- 67
97 B1出土 15 ---------- 69
98 2号住出土 ---------- 69
99 濠出土 32 ---------- 69
100 同甑 29 ---------- 69
101 同 31 ---------- 69
102 A14SK4出土 ---------- 69
103 A14出土 43 ---------- 69
104 濠出土 38 ---------- 69
105 1号住出土 36 ---------- 69
106 同 ---------- 69
107 濠出土 37 ---------- 69

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至る経過

昭和54年から実施された、県営畑地帯総合土地改良整備事業は、当市における農業経営の安定のため重要な役割をはたし、中野西部地区においても広範囲にわたり事業が進められて来ている。

今回、その関連事業として道路拡幅および改良工事が栗林遺跡の範囲内において実施されることとなりました。

平成3年7月18日に県教委文化課指導主事、事業主体である北信地方事務所土地改良課担当者、地元学識者、市教委担当者の同席のもと、現地協議を実施した。

その結果、発掘調査を実施して記録保存をはかることとなった。

平成3年10月1日付で委託契約を締結し、同時に調査団の編成を行うとともに、必要な手続きを完了した。

また、関係地主ほか関係者に発掘作業への協力を要請した。

第2節　調査日誌

平成3年（1991）

12月13日～16日	バックフォーにより表土除去。
12月16日	掘り下げ開始。
12月17日	調査区の設定。
	ベンチマークの設置。
	A－1～3、B－1～3精査。栗林式土器を中心に出土遺物検出。
12月19日	A－4掘り下げ開始。
	A－1～3、B－1～3出土遺物実測および写真撮影のため清掃。
12月20日	〃　、　〃　写真撮影、実測。
	A－5～8、B－6～9掘り下げ開始。
	A・B－5溝状遺構の検出、掘り下げ。
12月21日	B－4掘り下げ開始。
	B－1・2実測。
	A－1・2再度掘り下げ。焼土確認。

12月23日	A－1・2掘り下げ完了、柱穴・木炭検出。
	B－1・2遺物取り上げ。再度掘り下げ。
	A－3、B－3・4実測。
	A－4・5清掃。
12月24日	A－4実測。
	B－1掘り下げ完了。
	B－3・4実測、土器取り上げ。
12月25日	A－1～3土層断面実測。
	A・B－1・2セクションベルト除去。
12月26日	A・B－0拡張。
	〃　－1・2床面精査。
	〃　－11～20溝状遺構プラン確認。
	A－4実測。
12月27日	A・B－5・6住居跡プラン確認。
平成4年（1992）	
1月 6日	1号住居跡プラン掘り下げ。
	A・B－8掘り下げ。
1月 7日	除雪。
1月 9日	精査。
1月10日	1号住居跡掘り下げ完了。
1月11日	〃　写真撮影、実測。
1月12日	防雪のため農業用ビニールハウス作り。
1月13～16日	精査
1月17日	A－15～19清掃、写真撮影。
1月18日～	環濠掘り下げ。
1月22日～	1号住居跡プラン確認、掘り下げ。
1月23日～	4号住居跡プラン確認、掘り下げ。
1月27日	〃　焼土、炭化木清掃、写真撮影、実測。
1月29日	4号住居跡柱穴実測。
1月31日	環濠南側部分実測、再度掘り下げ。
2月 4日	〃 北側部分実測。　〃
2月 6日～	環濠清掃、写真撮影、実測。
2月10日	〃 出土遺物取り上げ。

2月12日　　現地調査終了。

平成4年

2月 1日　　中野市民プールにて、整理作業開始。

3月26日　　全作業を完了し、調査を終了する。

第3節　調査団の編成

調査責任者	嶋田　春三	中野市教育委員会教育長
調査団長	金井　汲次	日本考古学協会員、中野市文化財審議委員会会長
調査主任	檀原　長則	〃　　、中野市歴史民俗資料館専門委員
調査員	田中由美子	奈良大学
事務局	小野沢　捷	社会教育課課長
	池田　剛	同　歴史民族資料館管理係長
	徳竹　雅之	同　学芸員

参加者　湯本栄一、樋口義政、檀原みち江、古田　茂、樋口政勝、池田正子、池田きよ子、金井幸子、宮本公次、秋山恒巳、小林資成、石井邦明、小野沢京二、小野沢智子、町田　勝、町田文子、丸山せつ子、増田悦子、石川市子、石川喜久子町田裕子、飯島文子、石川　昌、涌田茂輔、増田トモエ、増田　昌、町田久美子、町田ふじ、石川福治、有賀忠男、浅沼　晃、清水維雄、町田幸重、町田とも江、樋口アイコ、檀原重康、湯本広枝、頓所つる江、石川与喜江、有賀豊子山崎のり子、斎藤淑子（順不同）

第II章　調査地周辺の環境

第1節　遺跡の立地と歴史的環境

栗林遺跡の位置する、長丘丘陵は、長丘・高丘地区をほぼ南北に縦走し、その上部を覆う粘土質土によって特徴づけられている。海抜高度は、330m～380mにわたり、洪積世地層を侵食して形成された面で、立ヶ花地籍付近で観察される断層から、地殻変動が近い時代にまで継続していることがうかがえる。

栗林遺跡は、長野県中野市栗林地籍に所在し、標高330m～360m前後の千曲川旧床の河岸段丘上に帯上に分布している。また、遺跡南側のやや低地となる部分は、かつて湿地帯あるいは沼地状であったと推測され、年間降雨量1000㎜程度と少量ではあるが、水田地利用として稲作には、適した地域であったと思われる。

長丘丘陵上には、古くは旧石器時代から現代に至る各時代を通しての人間の営みの痕跡を伺い知ることのできる遺跡が数多く存在している。

今回調査の対象となった栗林遺跡の周辺には、旧石器時代から近世までの大複合集落遺跡として知られる安源寺遺跡を始め、多量の縄文式土器と完形の土偶を出土させた大俣姥ヶ沢遺跡、市内では調査例の少ない旧石器時代の遺跡として知られている、浜津ヶ池遺跡等の貴重な遺跡が、点在している地域です。(図1・図50)

第2節　層　序

本発掘調査地の層序は、第Ⅰ層表土、第Ⅱ層白茶色土、第Ⅲ層青灰黒色土、第Ⅳ層黒褐色土、第Ⅴ層茶色土、第Ⅵ層黄茶色土、第Ⅶ層黄色土が、標準となっている。

今回の調査で遺構、遺物が検出されたのは、第Ⅲ層に平安時代の包含層を、第Ⅴ層から第Ⅵ層にかけて弥生時代（栗林期）の包含層を確認した。

また、何層かにわたって千曲川の氾濫により数度となく被害をこうむいている堆積層も同様に検出された。

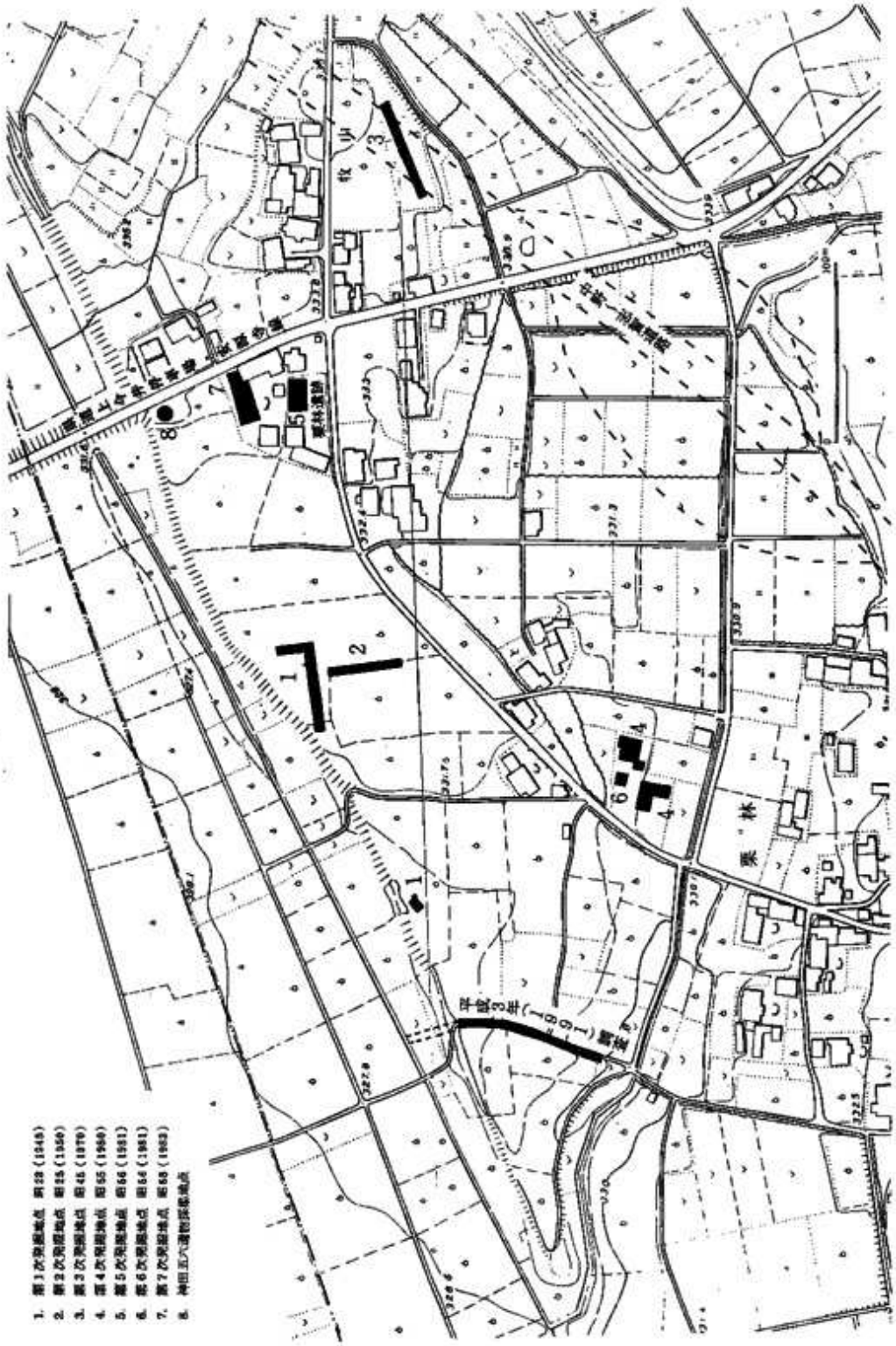
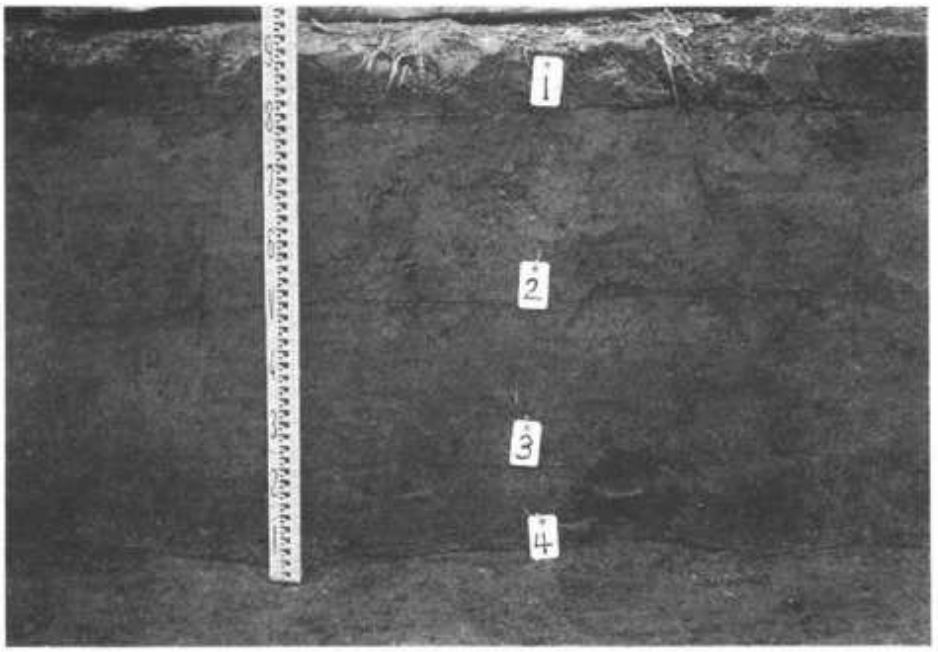

1. 第1次発掘地点 昭23(1948)
2. 第2次発掘地点 昭25(1950)
3. 第3次発掘地点 昭45(1970)
4. 第4次発掘地点 昭55(1980)
5. 第5次発掘地点 昭56(1981)
6. 第6次発掘地点 昭56(1981)
7. 第7次発掘地点 昭58(1983)
8. 神田五六遺跡発掘地点
栗林
牧川

図1　栗林遺跡位置図



↑1　1号住南の東断面

Ⅰ　表　土

Ⅱ　白茶色土

Ⅲ　青灰黒色土

Ⅳ　黒褐色土

Ⅴ　茶色土　　（写真4層以下）

Ⅵ　黄色土（地山土）　（　〃　）

第3節　研究史概説

栗林遺跡は「栗林式土器」の標識遺跡として早くから知られ、学史的にも著名である。大正11年（1922）年の『下高井郡誌』には、当地方の考古資料が初めて掲載され、栗林からは石斧や石鏃の出土が記録されている。

栗林遺跡が学会から注目されたのは、昭和6年（1931)年、神田五六氏が、瓦原料粘土採取場で、特異な土器を発見されたことに始まる。この土器は、磨消縄文に華麗な模様のある土器で、神田氏はその後も土器の採集・紹介に努められた。

八幡一郎・森本六爾・藤森栄一氏らも、この土器に注目され、現地を訪れて様々な論考を発表された。昭和11（1936）年、藤森氏は遠賀川系弥生式土器の影響下にある信濃古式弥生式土器ととらえ、栗林式土器として型式設定された。昭和14（1939）年、小林行雄氏は、栗林式土器を中部高地第一様式と位置づけられたのである。しかし、このような戦前の論考は、表面採集によって得られた資料によるもので、発掘調査の機会は戦後まで待たなければならなかった。

栗林遺跡に初めて学術的な発掘調査がおこなわれたのは、戦後まもない昭和23（1948）年秋のことである。この調査は戦後の県下における考古学研究の先駆となった。当時、奈良国立博物館の小野勝年氏、京都大学考古学教室の坪井清足・横山浩一氏が担当された。調査地は遺跡の中心部から、やや西側で住居址2、集石状遺構を検出し、多量の土器、玉製品が出土した。坪井氏は、この調査の成果から栗林式土器を一類、二類に分類された。

第2次調査は、昭和25（1950)年に私設道路の敷設に先立ち、再び小野氏の指導により高丘小、中学校の教職員、児童、生徒によって実施された。小竪穴4基を検出し、このうちの1基からは、栗林式土器がセットで検出されている。

昭和35（1960）年には、県下の重要遺跡として県史跡に指定され、その保存がはかられることとなった。昭和40（1935)年には、遺跡の東端が開田工事にかかり、第3次調査がおこなわれた。この調査では、住居址・小竪穴各1基が検出されたが、土器片の量は僅かであった。昭和54（1979）年には、かんがい施設が設けられることとなり、そこで遺跡を保護するため、栗林・牧山両集落の広範にわたり分布調査が実施されている。その後も住宅の新改築にともない、昭和55（1980）年から翌年にかけて第4・5・6次、58（1983）年には第7次調査がおこなわれた。

さて、栗林式土器をめぐる編年研究は、昭和30年代から活発となった。昭和30（1955）年に藤森氏、永峰光一氏によって、栗林式土器は弥生時代中期中葉以降に位置づけられた。藤森氏は第1次調査の資料により、永峰氏は神田氏報告の2類土器をもって論じられたので、栗林式土器の型式概念は2説に分かれていた。

昭和38（1963)年、桐原健氏は第2次調査の出土資料を中心に、壷の文様の集約化・簡略化

傾向に着目され、栗林式土器を中期終末期の百瀬式（松本平）に先行させた。また、昭和43（1968）年には、岡谷市海戸遺跡第一次調査の成果から、従来百瀬式土器とされていたものを天王垣外式、海戸式に分離させ、百瀬式土器もⅠ・Ⅱ式に細分された。さらに同年のシンポジウム「弥生文化の東漸とその発展」では、これら一連の論考に加え、中信の編年観に栗林式土器を対応させ、栗林式をⅠ・Ⅱ・Ⅲ式に細分されたのである。桐原氏による栗林Ⅰ式は、縄文を地文とするヘラ描文が頸～胴部にわたる壺。栗林Ⅱ式は、頸部に文様が集中し、胴部に文様がみられない壺。栗林Ⅲ式は、翼状口縁をもつ壺とされた。そして栗林Ⅱ式を天王垣外式・百瀬Ⅰ式に、栗林Ⅲ式を海戸・百瀬Ⅱ式と併行させ、栗林Ⅰ式をこれらに先行するものという編年案を作成されたのである。

昭和46（1971）年、笹沢浩氏は新たな資料によって、桐原氏編年に再検討を加え、新たな分類の基準・編年案を発表された。笹沢氏は、栗林Ⅰ式に桐原氏の「栗林式土器の再検討」の中の第2類（ヘラによる大型沈線と地文となる縄文で頸部～胴部最大部に加飾）と第三類(太型沈線と縄文の地に櫛歯状工具による平行線文・半截竹管工具による半月形刺突文、突帯が加わる）をあてられた。栗林Ⅱ式には、縄文を地文とするヘラ描文が頸～胴部に施されるが胴部上位か、下位のいずれかの文様を欠く細頸壺、翼状口縁をもつ壺とされた。さらに、文様が頸部のみに集中する細頸壺、翼状口縁をもつ壺、内湾する口縁部をもつ壺を百瀬式、百瀬併行式とし、栗林Ⅱ期に継続させたのである。昭和51（1976）年、笹沢氏は長野市平柴平遺跡の一括資料を用い、栗林Ⅰ式に平柴平遺跡ＳＫＹ05、栗林Ⅱ式に平柴平遺跡ＳＢＹ04、百瀬式併行土器に旭幼稚園遺跡の出土資料をあてられた。壺の文様の集約化・簡略化傾向から、千曲川水系の中期後半の弥生土器の変遷を明らかにされた。昭和52（1977）年、笹沢氏は県内の弥生土器を天竜川流域・千曲川流域の二大別に編年大綱を発表された。この中で、中期後半の土器を、北信、東信・松本平をほぼ、同一の土器分布圏としてまとめ、栗林Ⅰ→栗林Ⅱ→百瀬という大きな流れのあることを示された。

その後10年ほど、笹沢氏編年は定着した感があったが、県内各地で大規模な発掘が相次ぎ、得られた資料によって、笹沢氏編年に対して疑問が出され始めた。昭和61（1986）年、山下誠一氏は飯田市恒川遺跡の調査から、下伊那の中期後半の過程を北原Ⅰ式→北原Ⅱ式→恒川式ととらえた。また櫛描文をもつ甕を比較し、北原Ⅰ式＝天王垣外式＝＋＝栗林Ⅰ、北原Ⅱ式＝海戸＝百瀬＝栗林Ⅱと併行させ、千曲川水系に百瀬式定立に疑問を示されたのである。同年の三県シンポジウム「東日本における中期後半の弥生土器」において、設楽博巳・千野浩・小山岳夫氏からも同じような疑問の声があげられた。また、小山氏は昭和60（1985）年から翌年にかけて、90棟もの住居址が確認された佐久市北西ノ久保の出土資料を北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ式に分けられた。そして、北西ノ久保Ⅰ・Ⅱ式は大方、栗林Ⅱ式と併行されるとし、さらに栗林Ⅱ式の時間的な流れは峻別できるものではなく、古相・中相・新相として漸次的な様相変化として把

えるべきだとされた。

このように、千曲川水系の弥生中期後半の土器編年の混乱・停滞は一括資料に恵まれなかったことによる。7次にわたって実施された栗林遺跡の調査も前半がトレンチ方式、後半が住宅の増改築に伴う小規模な調査で、良好な一括資料には恵まれなかった。しかし、笹沢氏編年の栗林Ⅰ式〜栗林Ⅱ式（古）（新）の流れは、ほぼ確立され現在に至っている。　（酒井　健二）

文　献

(1) 神田五六「信濃栗林の弥生式土器」『考古学』6−10　昭10（1935）

(2) 神田五六「北信栗林の弥生式土器」『考古学』7−7　昭和11（1936）

(3) 藤森栄一「信濃の弥生式土器と弥生式石器」『考古学』7−7　昭11（1936）

(4) 森本六爾・小林行雄「弥生式土器集成図録」　昭14（1939）

(5) 小野勝年『長野県下高井郡高丘村栗林遺跡調査報告書』　昭23（1948）

(6) 坪井清足「高丘村弥生式遺跡調査」『下高井』　昭28（1953）

(7) 高丘小・中学校『第2次栗林遺跡発掘』　昭25（1950）

(8) 林　茂樹・金井汲次・桐原　健「長野県中野市栗林遺跡第3次発掘調査概報」『信濃』Ⅲ18−4　昭41（1966）

(9) 中野市教育委員会　『栗林遺跡確認緊急調査報告』　昭55（1980）

(10) 中野市教育委員会　「栗林遺跡第4次発掘調査」『高井』56号　昭和56（1981）

(11) 中野市教育委員会　「栗林遺跡第5・6次発掘調査」『高井』64号　昭和58（1983）

(12) 藤森栄一　『日本考古学講座』4（中部高地・北陸）　昭和30（1955）

(13) 永峰光一　「信濃の中期弥生式土器ー栗林式土器」『信濃考古綜覧』　昭31（1956）

(14) 桐原　健　「栗林式土器の再検討」『考古学雑誌』49−3　昭38（1963）

(15) 岡谷市教育委員会　『海戸遺跡第1次発掘調査』　昭42（1967）

(16) 岡谷市教育委員会　『海戸遺跡第2次発掘調査』　昭43（1968）

(17) 長野県考古学会　「シンポジウム弥生文化の東漸とその発展」『長野県考古学会誌』5　昭43（1968）

(18) 笹沢　浩　「善光寺平における弥生時代中期後半の土器」『信濃』Ⅲ23−12　昭46（1971）

(19) 飯田市教育委員会　『恒川遺跡群』　昭61（1986）

(20) 千曲川水系古代文化研究所他　第7回三県シンポジウム『東日本における中期後半の弥生土器』　昭61（1986）

(21) 佐久市教育委員会　『北西の久保』　昭62（1987）

表1　発掘調査史一覧表

次	年	担当者・指導者	遺構・遺物	文献
1	昭和23年 (1948)	小野　勝年 坪井　清足 横山　浩一	住居址2、小竪穴 敷石状遺構、矩形石積遺構、 栗林式土器、土師器、紡錘車 磨製石斧、石包丁、打製石鏃、凹石、石皿、 管玉、勾玉、丸玉	『下高井』昭和28年 「長野県下高井郡高丘村栗林遺蹟調査略報告」 昭和23年（1948）
2	昭和25年 (1950)	小林　曦暉 小野　勝年 神田　五六	竪穴、敷石址、ピット 栗林式土器、弥生式土器（前期・中期） 須恵器、注口土器 打製石器、磨製石斧、甑、石包丁、石鏃、凹石	『第2次栗林遺跡発掘』 昭和25年（1950）
3	昭和45年 (1970)	林　茂樹 金井　汲次 桐原　健	住居址1、ピット、溝状遺構 栗林式土器、土師器 釘状鉄器	「長野県、中野市栗林遺跡第3次調査概報」 『信濃』Ⅲ 18−4 昭和41年（1966）
	昭和54年 (1979)	金井　汲次	栗林遺跡確認緊急調査	栗林遺跡確認緊急調査報告書　昭和55年（1980）
4	昭和55年 (1980)	金井　汲次	ピット、溝状遺構 栗林式土器、土師器、須恵器、灰釉 鞴滓 鉄片、鉄滓 石斧、石包丁、石槌、砥石、かなとこ石、火打石、碧玉、管玉、勾玉、丸玉	「栗林遺跡第4次発掘調査」 『高井』56号 昭和56年（1981）
5	昭和56年 (1981)	檀原　長則 池田　実男 関　孝一 田川　幸生 郷道　哲章	井戸状遺構 栗林Ⅰ式土器、栗林Ⅱ式土器、箱清水式土器 百瀬式併行土器 凹石、石鏃、砥石、石錘、石斧	「栗林遺跡第5・6次発掘調査」 『高井』64号 昭和58年（1983）
6	昭和56年 (1981)	檀原　長則 池田　実男	ピット 栗林Ⅰ式土器、栗林Ⅱ式土器、箱清水式土器 須恵器、灰釉、青磁 軽石、砥石	「栗林遺跡5・6次発掘調査」 『高井』64号 昭和58年（1983）
7	昭和58年 (1983)	金井　汲次	土壙墓 栗林Ⅱ式土器 管玉	
8	昭和63年 (1987)	金井　汲次	集石 栗林Ⅰ・Ⅱ式土器・箱清水式土器	「栗林Ⅷ・浜津ヶ池」

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　遺　構

1．1号住居址

1号住居址は今回調査した道路用地内のもっとも北に在って、旧千曲川の川岸に位置し住居址の北端は崖に面している。住居址のプランは円形を呈し、直径5mを測る。このプランの検出は、細かい砂が敷かれている範囲を確認して決定した。

中央に凹みがみられるが、火に焼けた跡は無く、そのほかに火床が3ヶ所確認され、焼土3の所はSK（土坑）1のところに落ち込んでいた。

柱穴はP1・P2・P4・P6・P8・P9・P10・P16・P17・P20が該当すると思われる。

この住居址の南側に排水溝があり、西方に傾斜していた。この西には写真39（図26）のコの字かさね文の甕があり、この住居址の当該時期を示していた。

→2
西から
見た1
号住

この土器の示す年代は栗林Ⅰ式期の新しい段階と考えられる。

またこの住居址の南側には柱穴が見られ、さらに南側には焼土、不整形の小土坑・柱穴などがみられ、B3からは鉄剣形石剣（写真3）や、西によって浅い土坑内から籾の焼けたものが検出された。これは籾のまま炭化したもので、短粒種とみられる円い米である。(写真7)

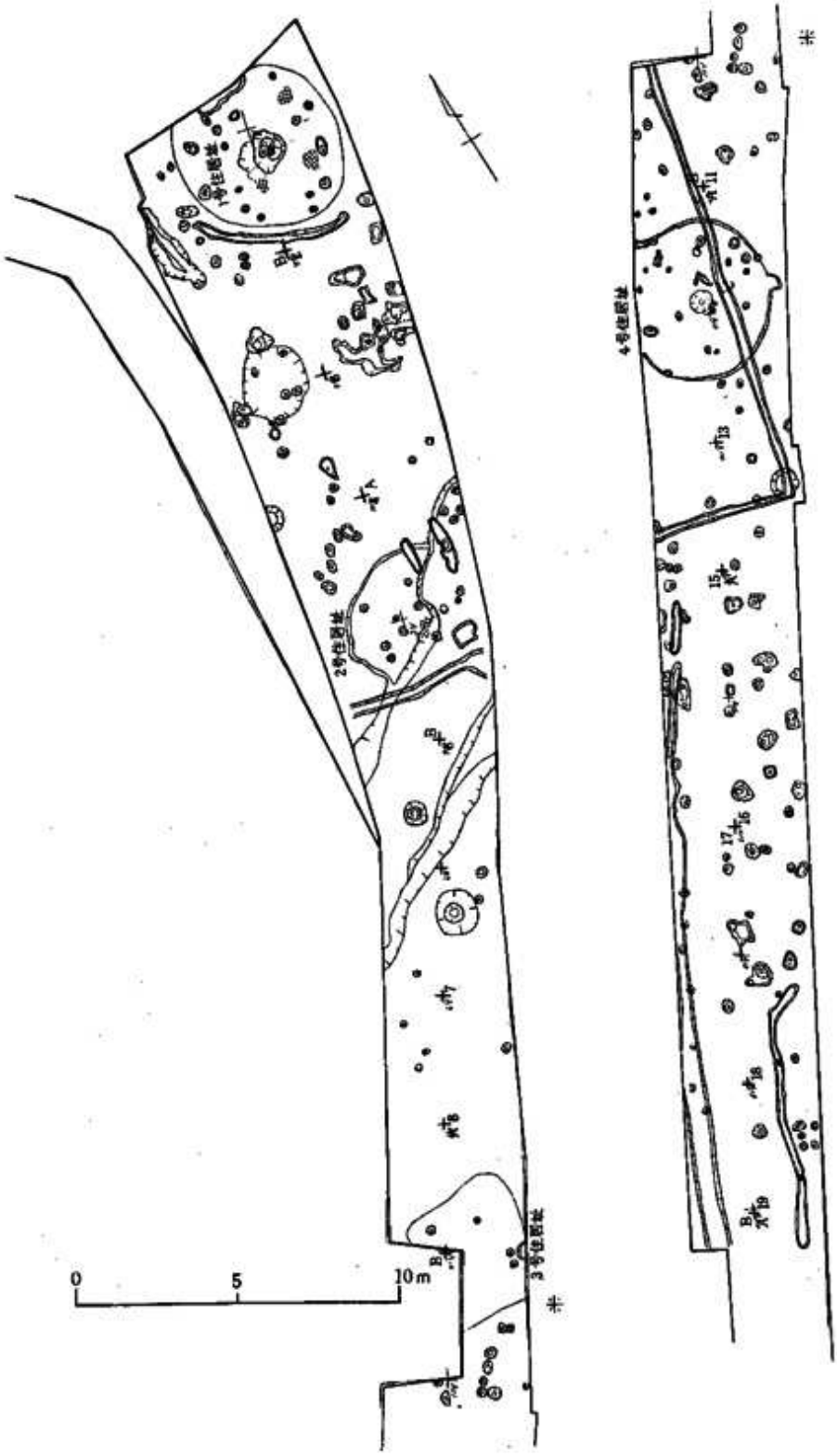


図2　栗林遺跡調査全体図

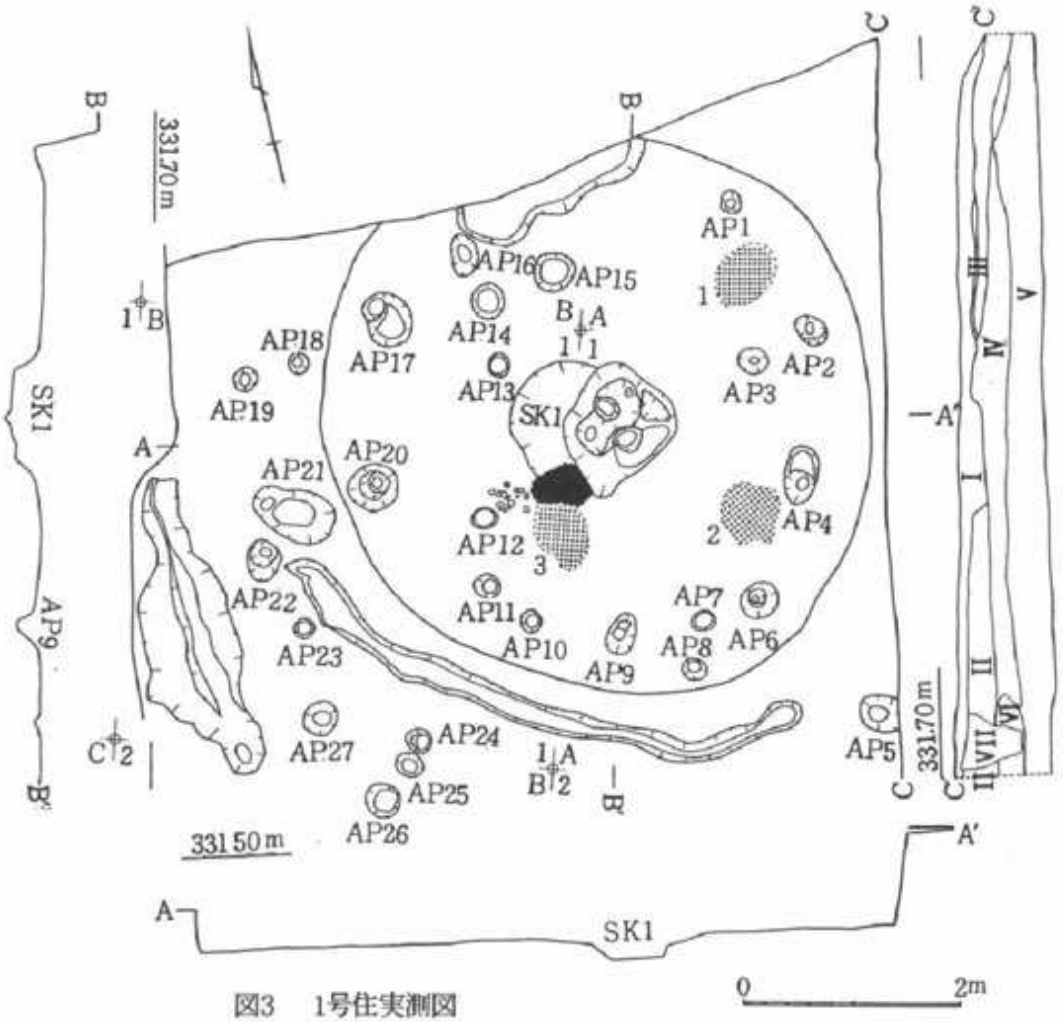
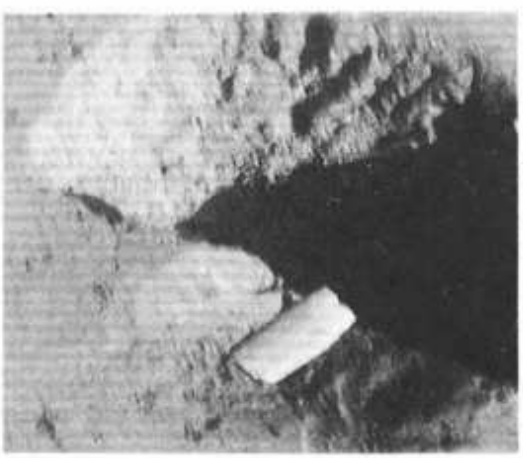


図3　1号住実測図



↑3　石剣の出土

↑4　1号住西の甕出土（5層上）

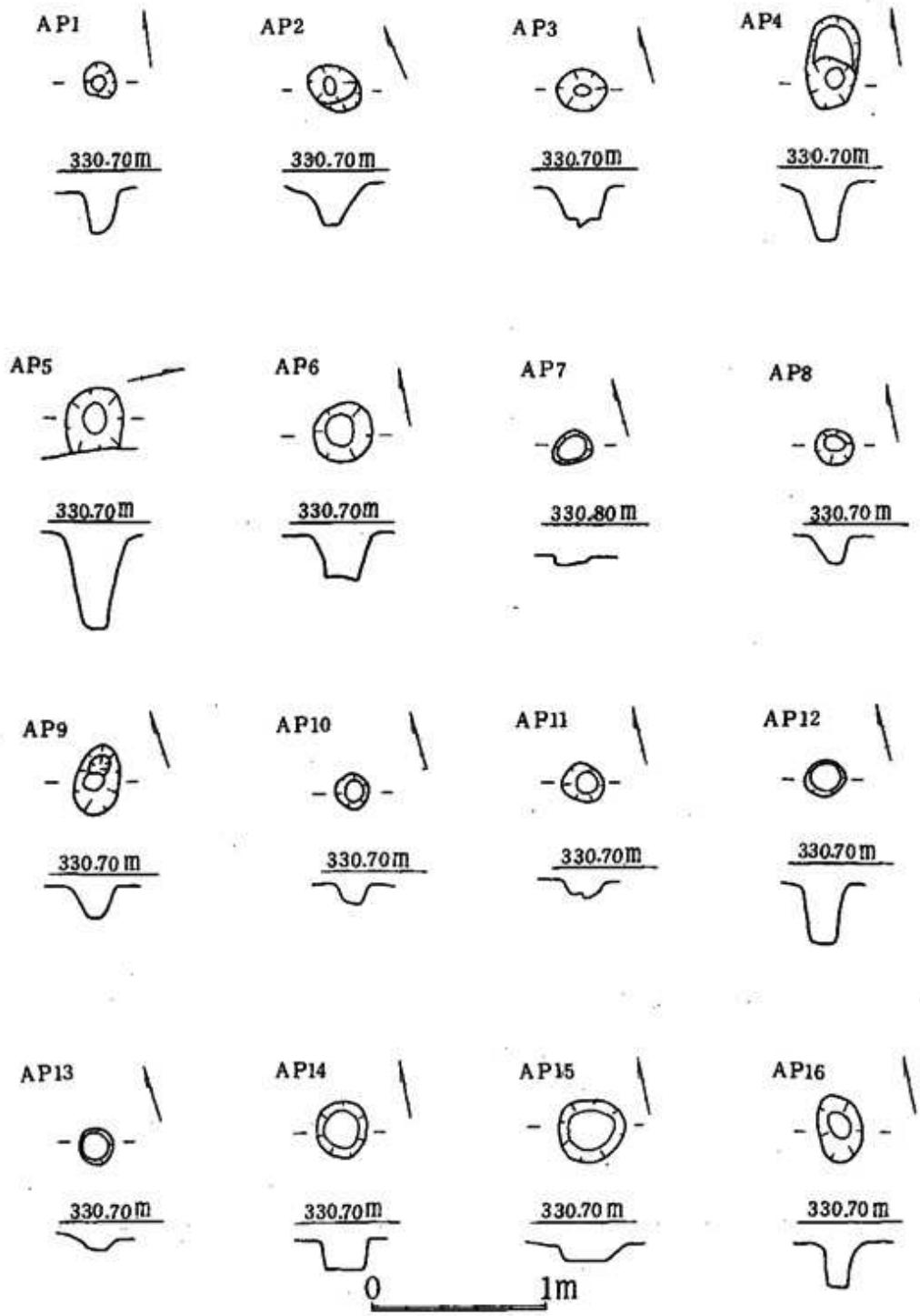


図4　1号住柱穴実測図(1)

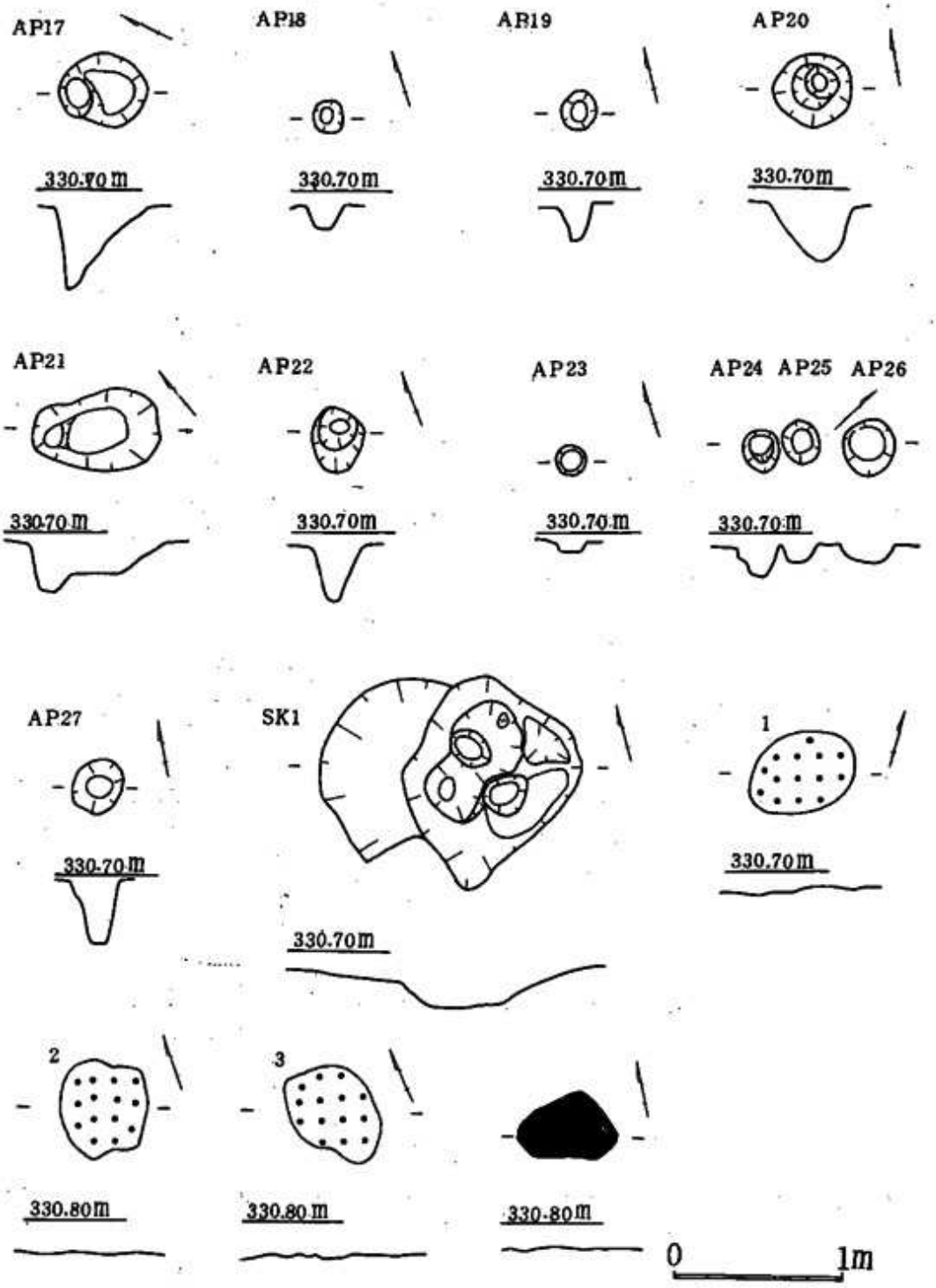


図5　1号柱穴(2)・土坑・火床　実測図

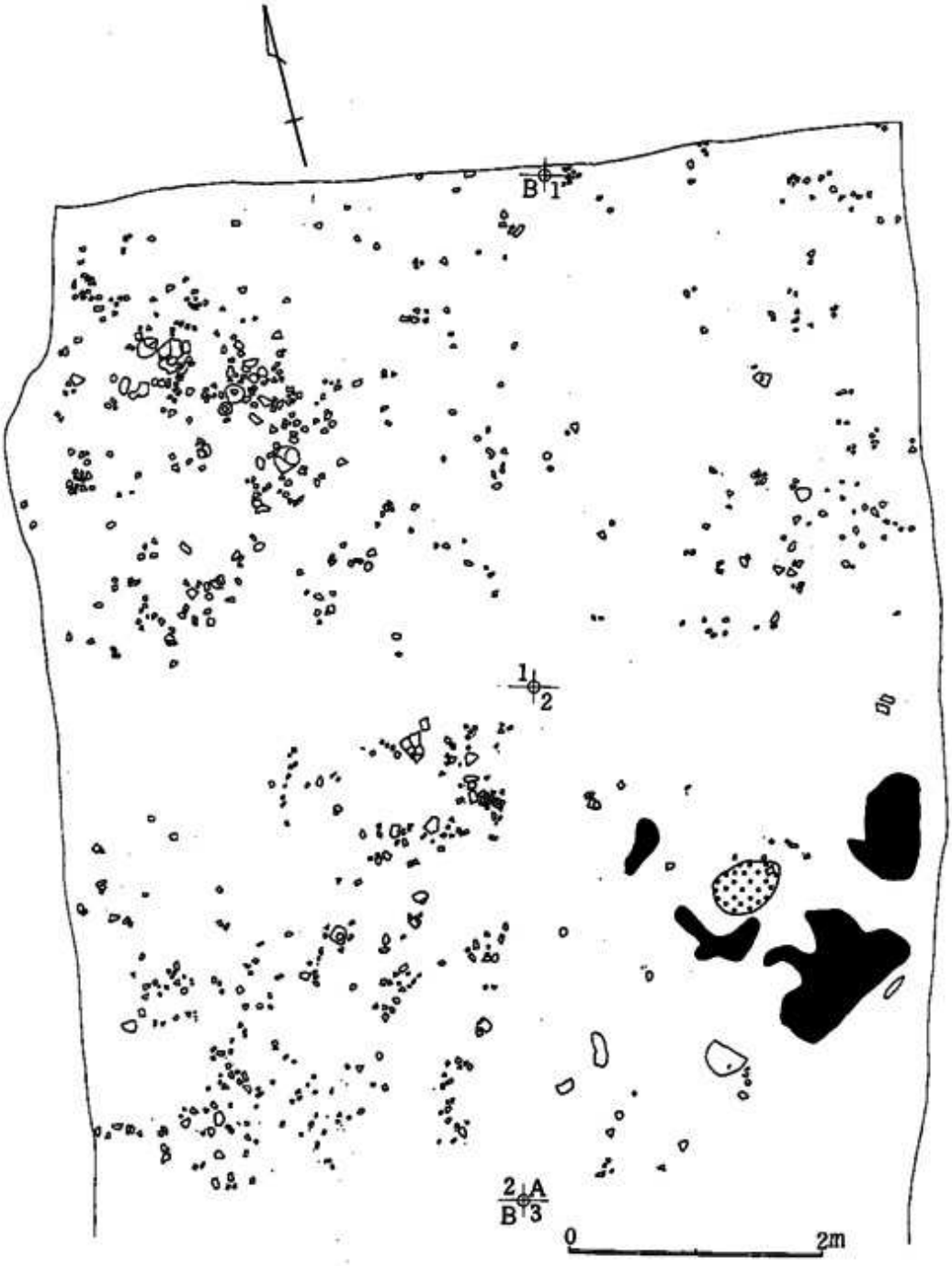
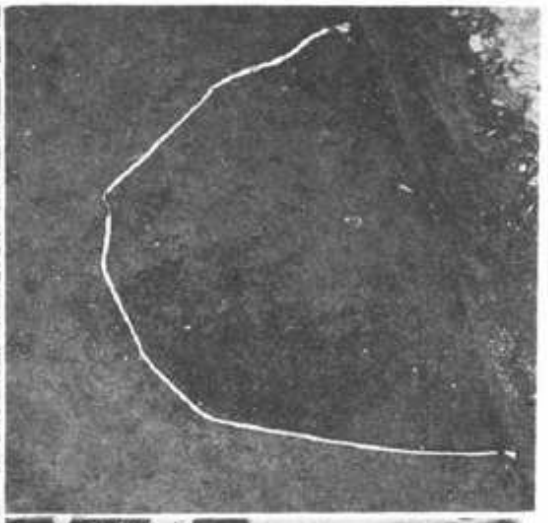


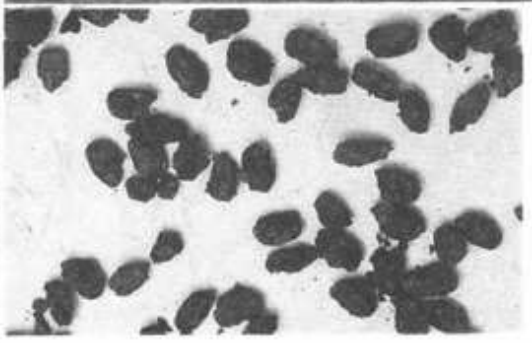
図6　1号住4層付近遺物検出図

図7　1号住5層上付近遺物検出図

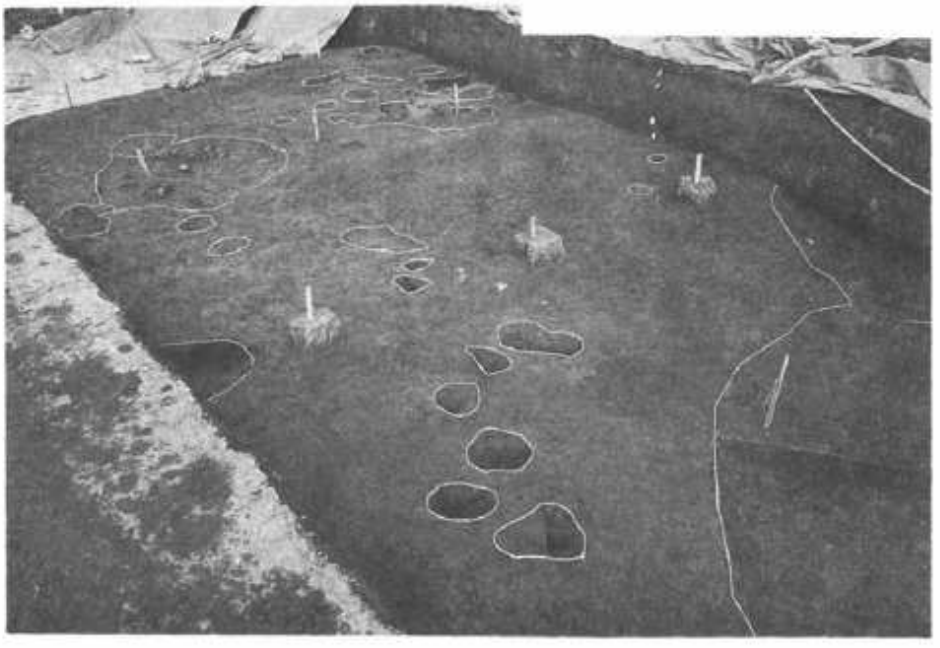
↓6　南から見た1号住西4層

↓5　焼籾の出土





↑7
焼け米



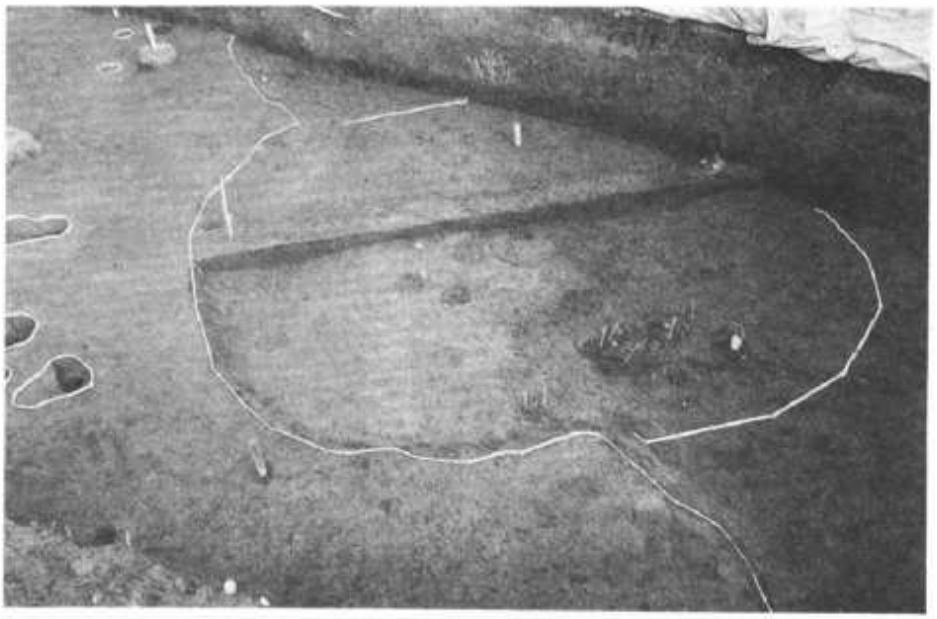
↑8　南から見たＡＢ3〜4（手前右2号住、左上シート下1号住）

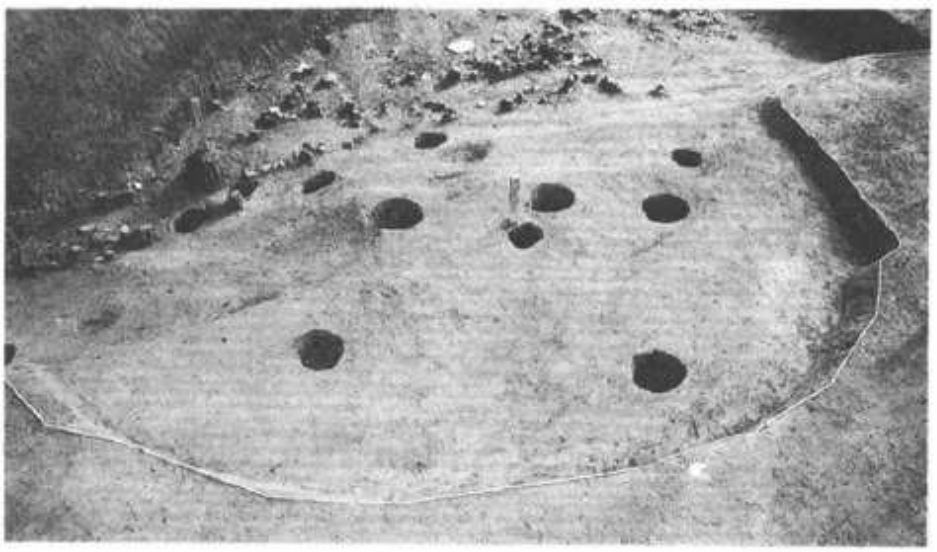
2．2号住居址

2号住居址はＡＢ4～5の位置にあって、半分は環濠の上面の部分は、やや沈下していたが、ここには細かい炭片が広がっていた。従ってここは生活面で、この住居址はこの濠が埋まった後に造られたもので、濠の中央の柱穴は検出できなかったが、検出した柱穴の状況から推すと1号住とは小屋組みが違うようである。

ここからの土器片は多数にのぼるが、提示する良好な資料がなかったが、栗林2式の箱崎の土器が多かった。ここからは凹石と敲打石が出土している。

→9
南から
見た
2号住





↑10　西から見た2号住

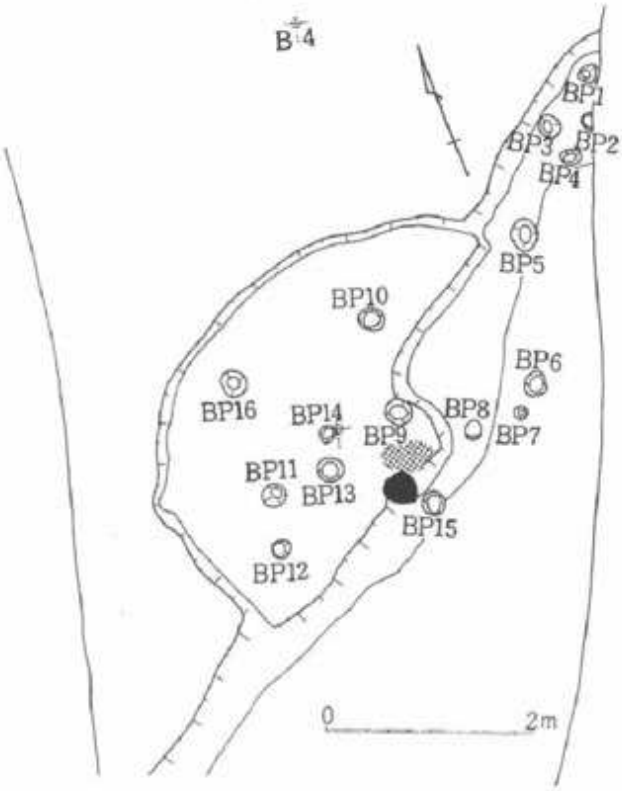


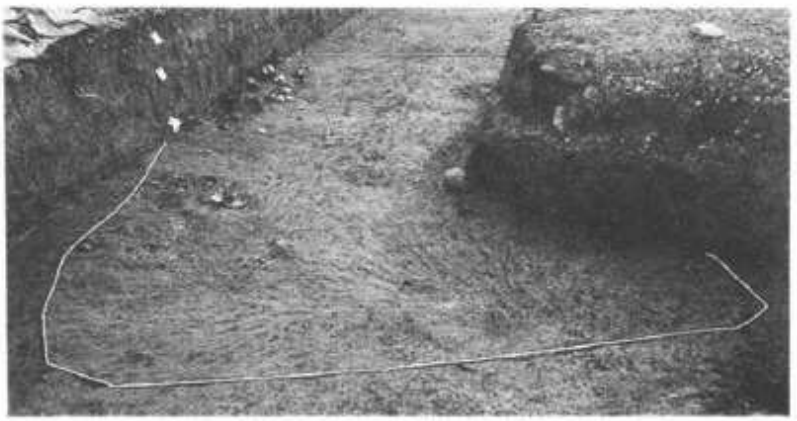
図8　2号住実測図

↑11　南から見た環濠と2号住

3．3号住居址

3号住はＡB9～10にあって、西側の一部は畑地潅漑の施設があって発掘できなかった。床面は黄色土までの漸移層にあって僅かに確認されたのみである。

東側に焼土、土器が多くあった。プランは一辺3.5～4mの方形であって、この住居址のつくられた年代は図44、47～49の坏の形状により、平安時代第Ⅱ期と推定される。(出土土器は、図44・45・47～49・53・60・74～77)



↑12　北から見た3号住

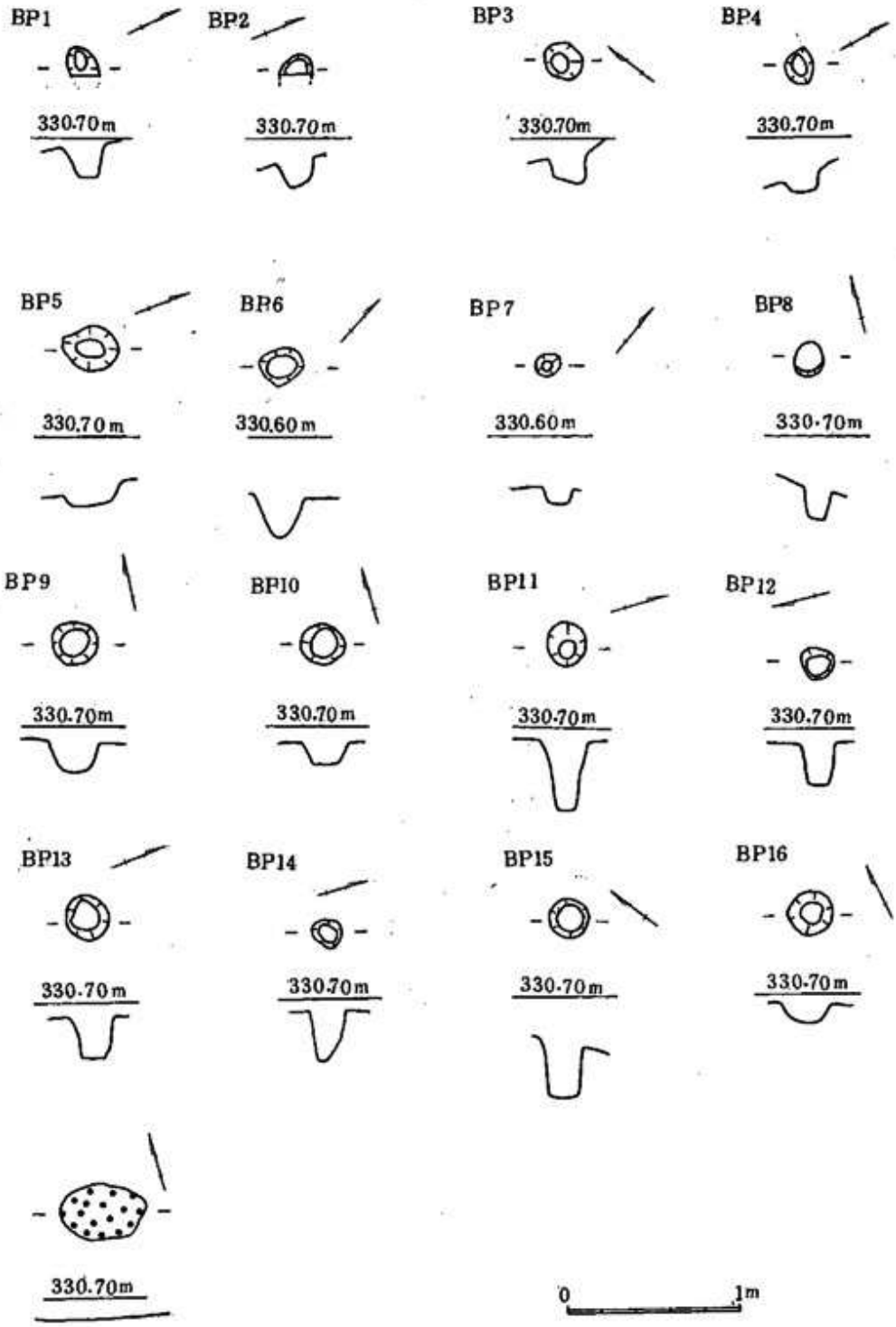

BP1
330.70m
BP2
330.70m
BP3
330.70m
BP4
330.70m
BP5
330.70m
BP6
330.60m
BP7
330.60m
BP8
330.70m
BP9
330.70m
BP10
330.70m
BP11
330.70m
BP12
330.70m
BP13
330.70m
BP14
330.70m
BP15
330.70m
BP16
330.70m
330.70m
0
1m

図9　2号住柱穴実測図

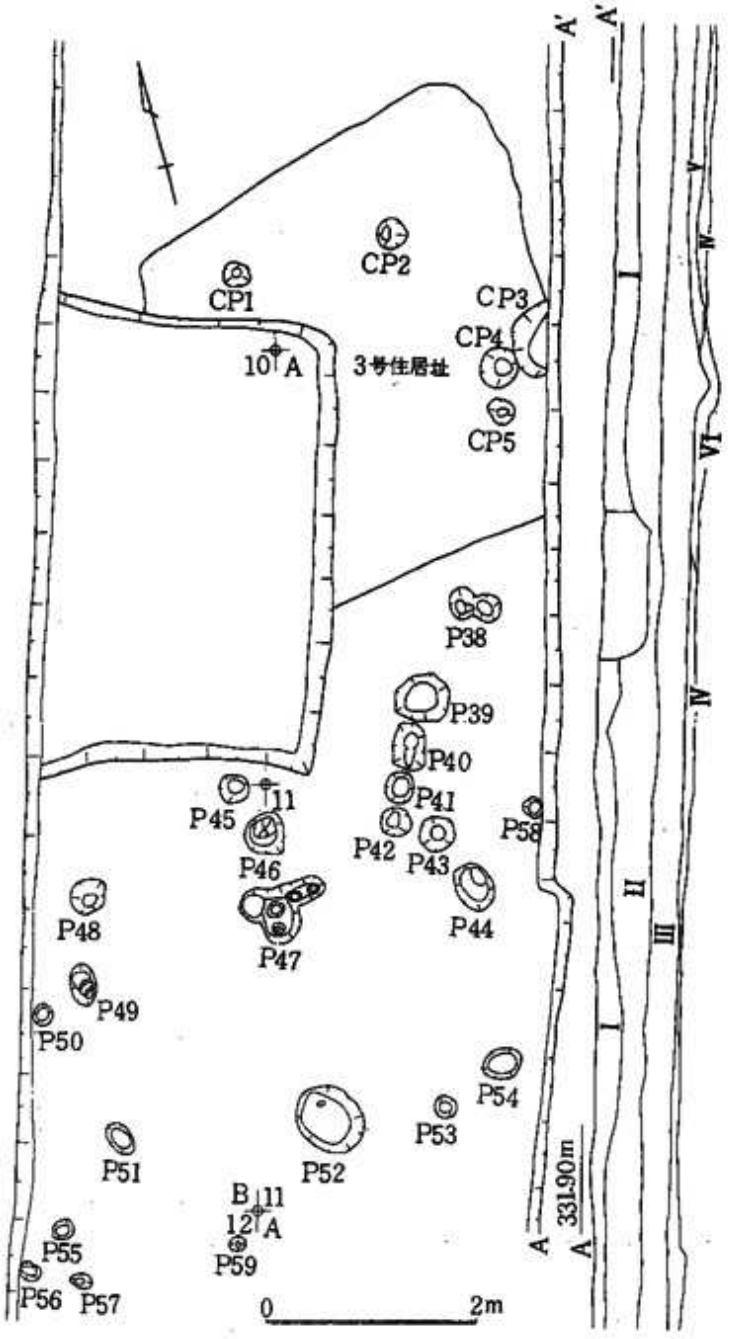


図10　3号住遺構実測図

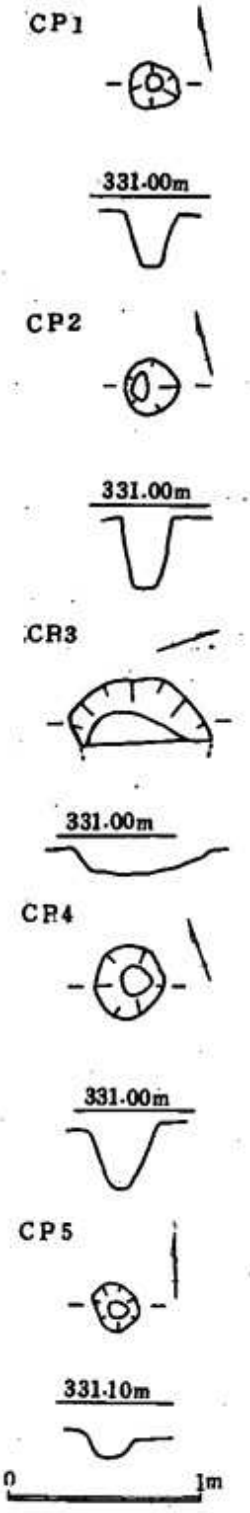


図11　3号住柱穴実測図

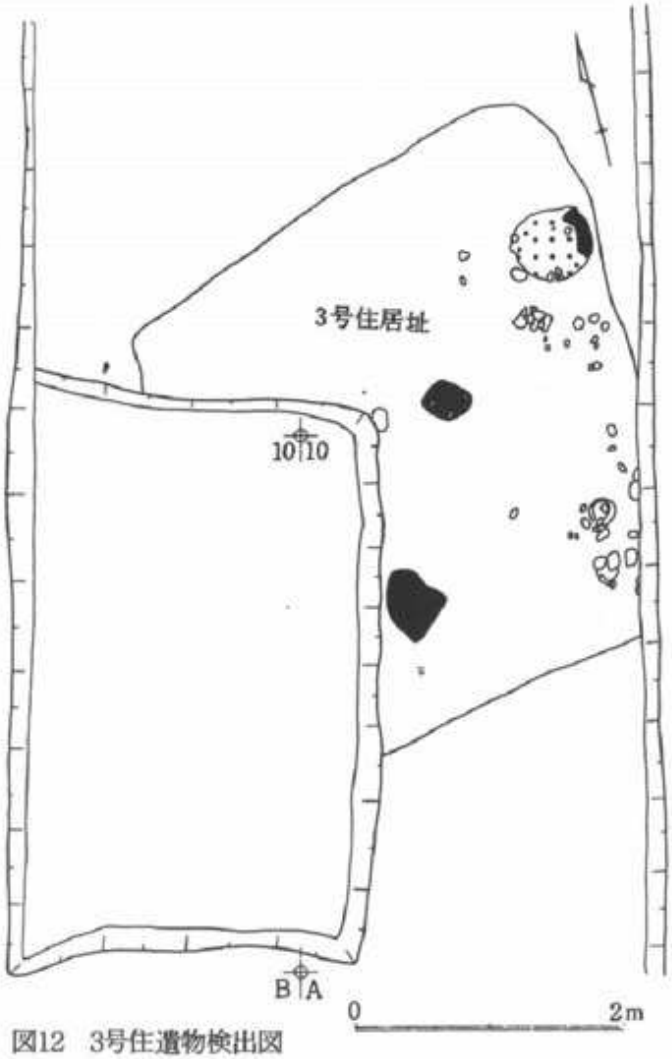


図12　3号住遺物検出図

↑13　3号住の土器出土状況

↑14　西から見た3号住柱穴

床面東の焼け土（火床)は2ヶ所あって、椀・坏・甕と須恵器片があった。また、床面には薄く黄色の砂があったが、1号住の場合と違って、水害によってもたらされた可能性が大きい。

この3号住の東の埋没地層断面は1耕作土（暗黄色土）17cm、2黄色土25cm、3暗黄色土33cmで土器があり、床面まではあと10cmを計る。

主柱穴は1ヶ所未掘のため確認できていないが、主柱は4本で、この時代（この地方）に普遍的にみられる小規模の住居址で、律令体制の強化によって収奪が行われた結果とみるか、家の構成人員の在り方による結果か、周囲に見られる掘立柱の建物との関連がどうなるか、過去の栗林遺跡の発掘のたびに見られる柱穴群と、どうかかわってくるのか、小面積の発掘では、結論は今後に残されている。

4．4号住居址

4号住はＡＢ12～13に所在し、西側僅かを除いて完掘できた。表土から遺構確認までの深さは90cmである。まず焼け土が確認されるとともに、木材の焼けた炭化物が多く確認された。

この樹種は栗の木が多く見られ、中心に向かって放射状になっていた。また倒壊方向は南から北へ向かっており、北側の炭が細かった。

また、焼け土が上を覆っていたのは、屋根に乗せてあったものと考えられる。住居址のプラ

ンは円形で、直径4.5mで入口は東と考えている。この住居址の中央西より南北方向に、畑地灌漑用のパイプが埋設され破壊されていた。床面の東南に甕（図41－45）がつぶれていたが、その他は土器片ばかりであった。

この甕の所属時期は、栗林2式に該当すると思われ、この住居址の東の土壙の土器（図39－24）や、南側の土器（図41－39）と同一の時期と推定される。

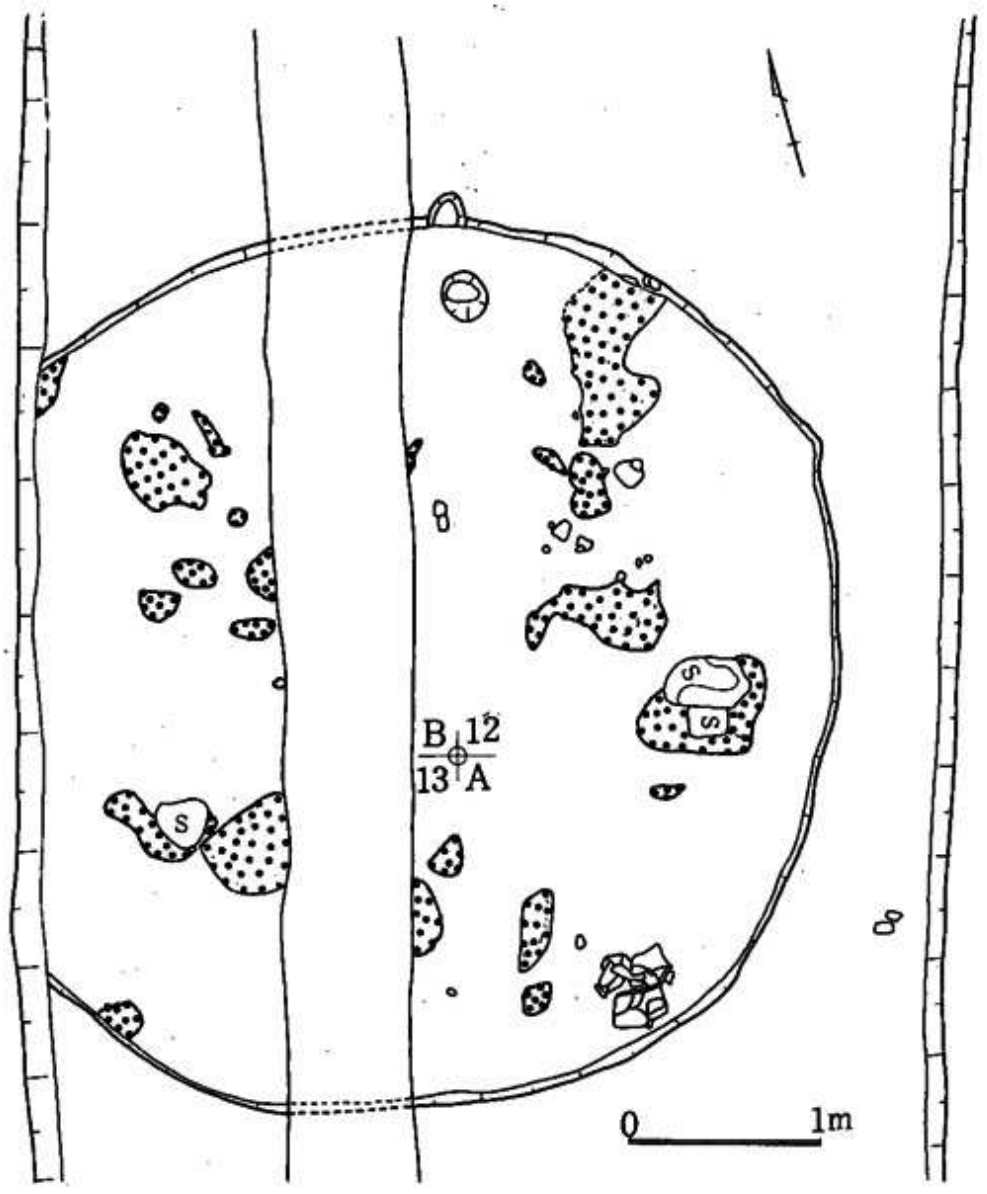


図13　4号住　焼土検出図

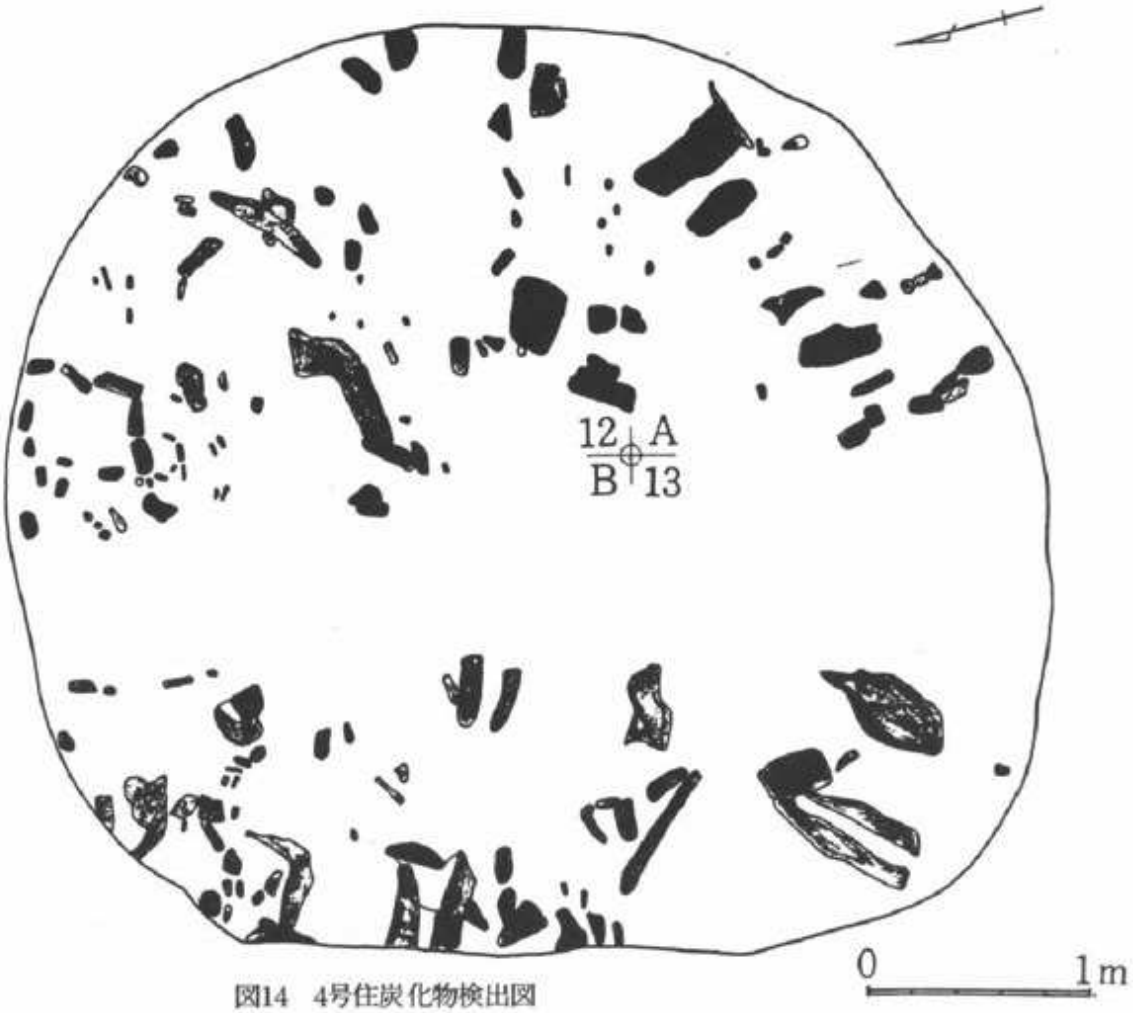


図14　4号住炭化物検出図

→ 15
南から見た
4号住の焼
土・炭

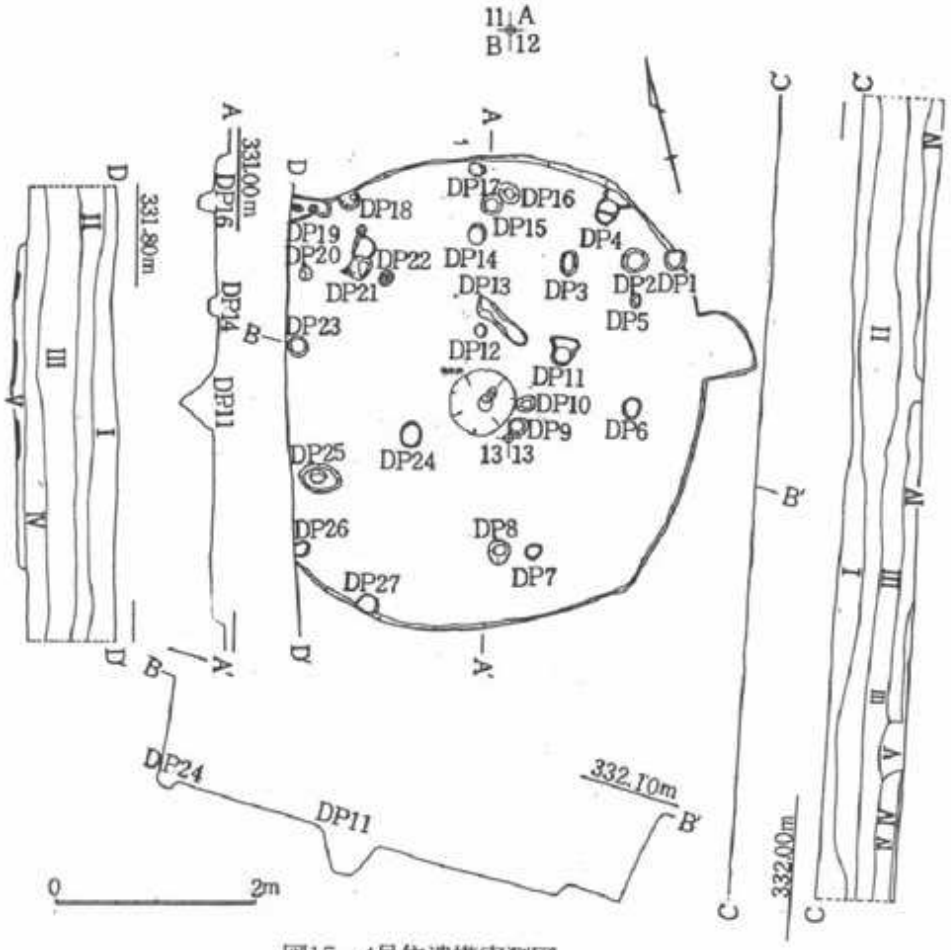


図15　4号住遺構実測図

→ 16
南から見た4
号住の炭

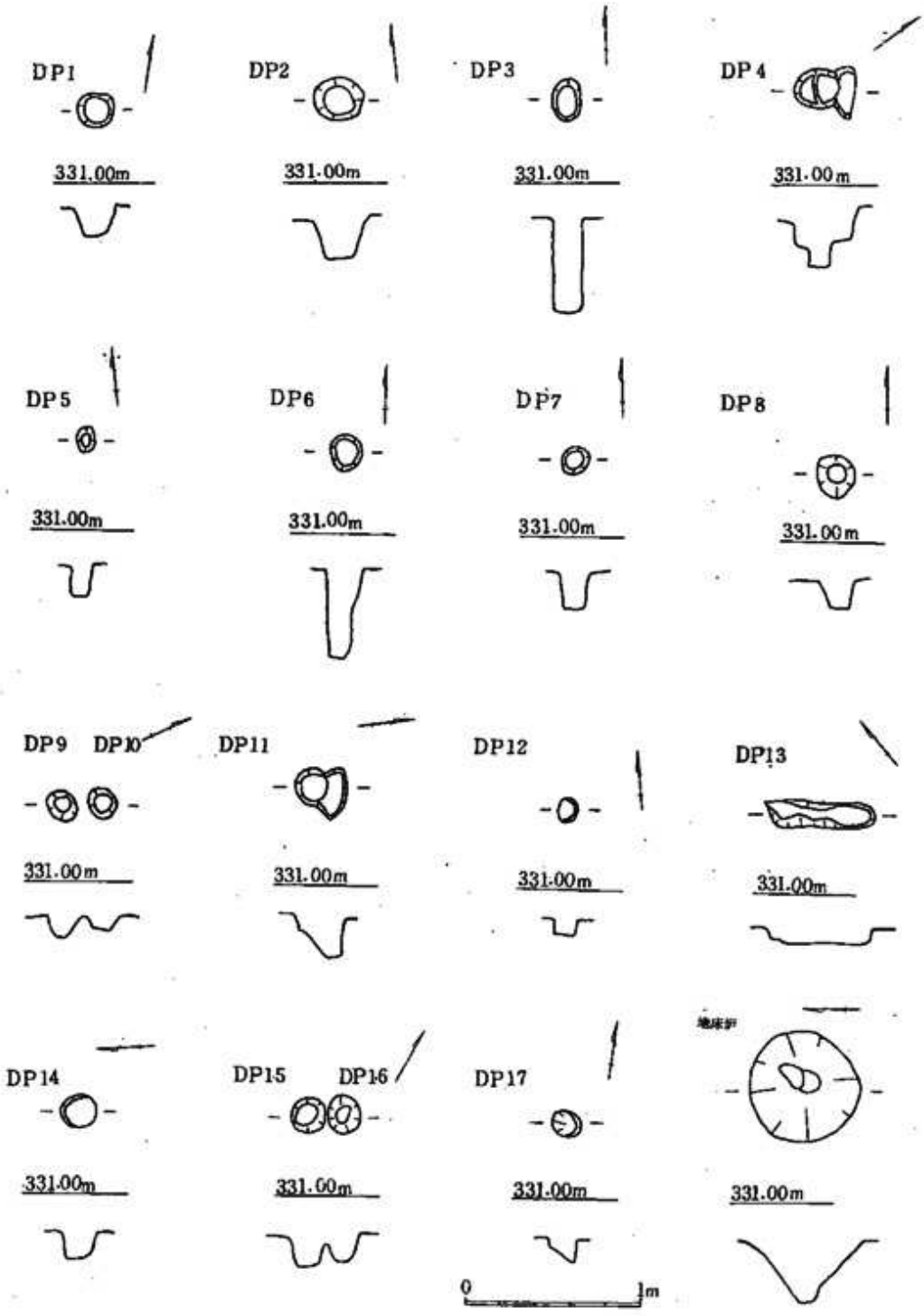


図16　4号住柱穴(1)　炉址実測図

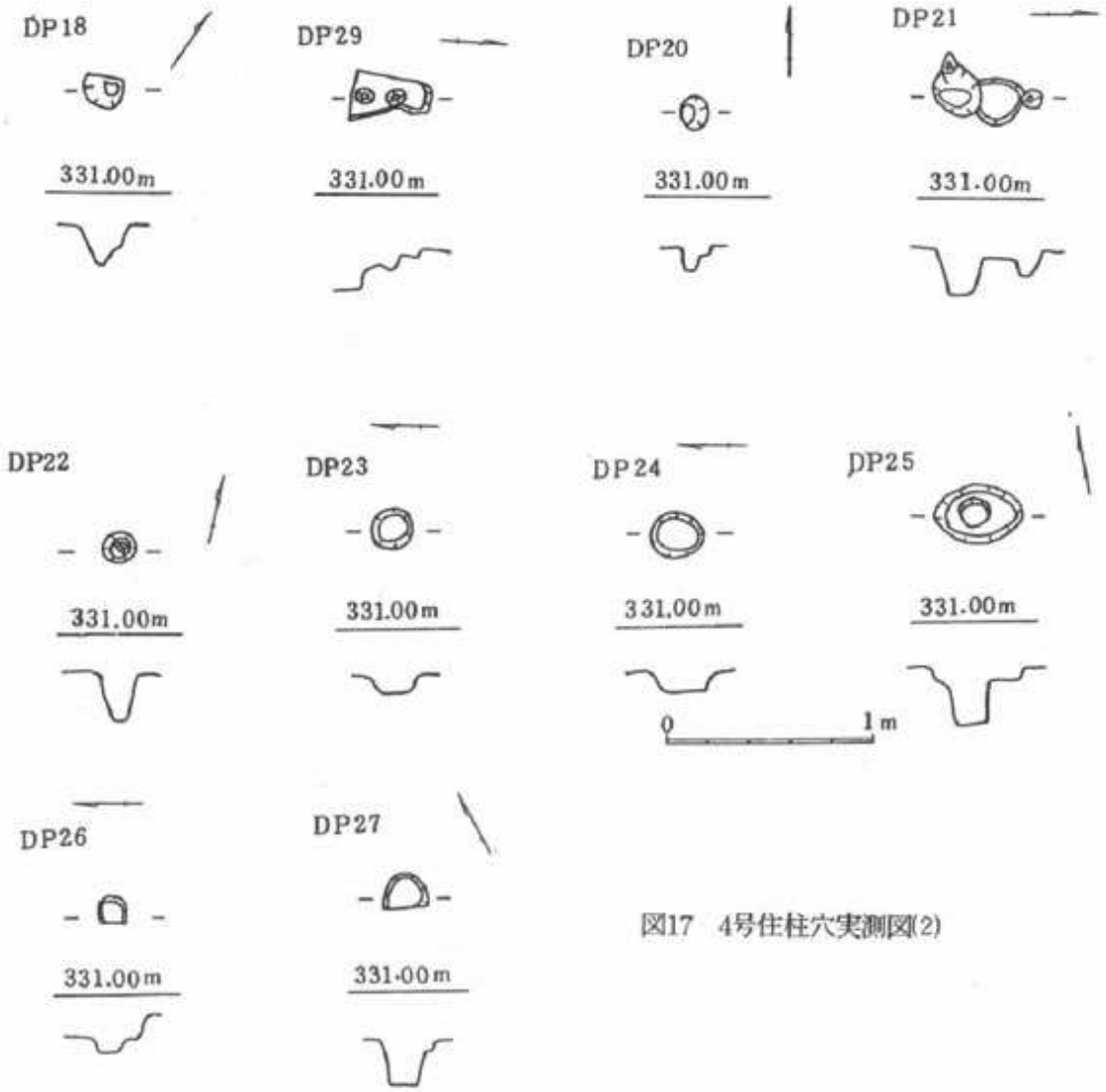


図17　4号住柱穴実測図(2)

→ 17
北から見た
4号住

→ 18　西から見た4号住の東南の甕

↓ 20　同

→ 19　4号住南方の甕

← 21
4号住東の土壙
(壺口頸部と甕
下半部)

5．環濠址

環濠址は自然堤防上の最高所に在って、延長A4～B8まで15mに亙って確認され、幅は4mである。この方向は北東～南西で、旧千曲川の自然堤防を横断する形となっている。

したがって南方に僅かに傾斜しており、この南にある南方の草間・安源寺方面から流れる川に、連絡しているとみられる。

環濠の確認面までの深さは90cmで、それより底までの深さは1.1mであるが、原形は黒土層の厚さの分30cm位深かったと見られる。

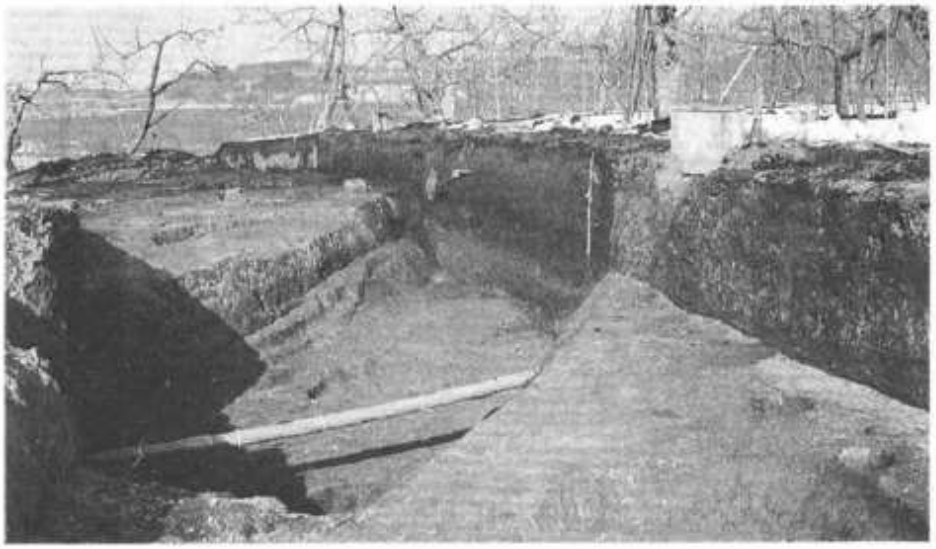
この中に土器を始め、遺物が沢山埋没しており、最終的に6回（6面）に亙って土器を取り上げた。

底には鉄分と砂が沈着し、堅くしまっており、流木の小さな破片などがみられ、洪水によって埋まった部分もあったと推定される。

検出された土器のうち、底辺から出土したものは、(図37－7)の関東北部に類例のみられるもの、全面に赤色塗彩された鉢形土器や、コの字かさね文の古相と思われる小形壺形土器（図37－6)など注目されるが、栗林Ⅰ式の範囲を大きく逸脱するような、古い様相の土器はみられず、Ⅰ式の段階から赤色塗彩された土器が、伴出することが確認され、壺などは赤く塗られていたことが確認された。

これらは長野市松節遺跡の12号木棺墓に見られた土器に、後続する要素が強いものである。

このようにこの環濠の土器で見る限り、弥生中期後半に栗林遺跡が成立した時点から、この溝（環濠）が巡らされていたと推定される。



↑22　南から見た環濠址

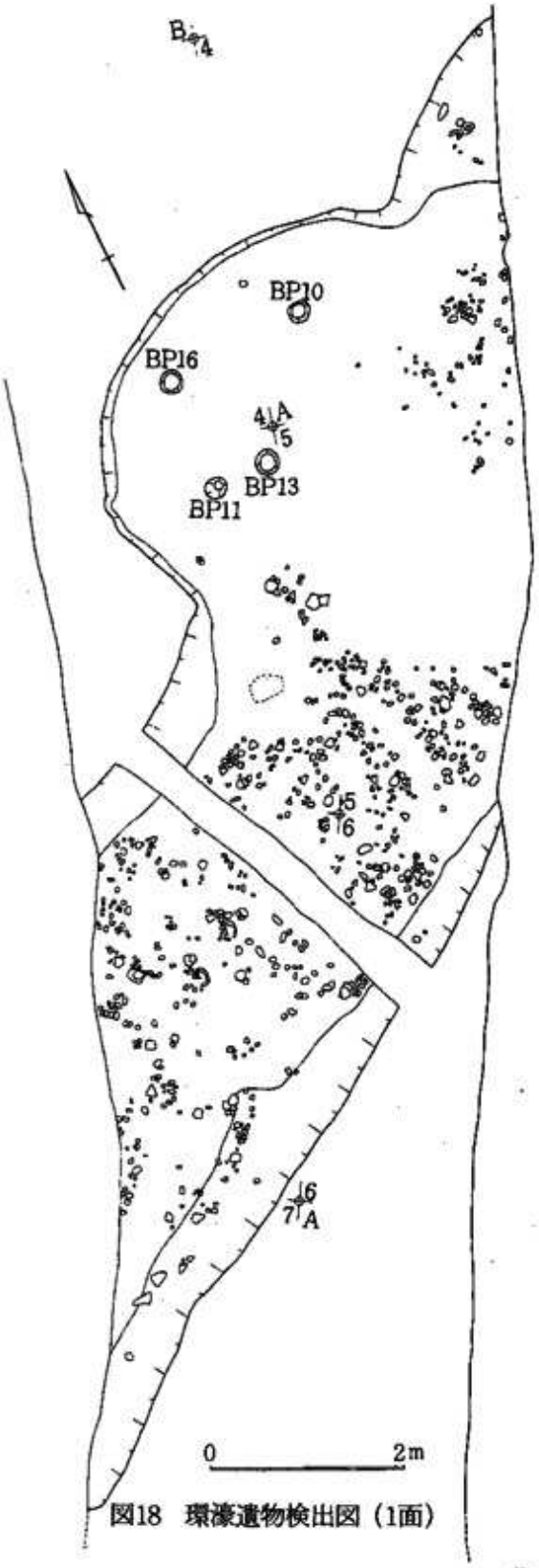


図18　環濠遺物検出図（1面）

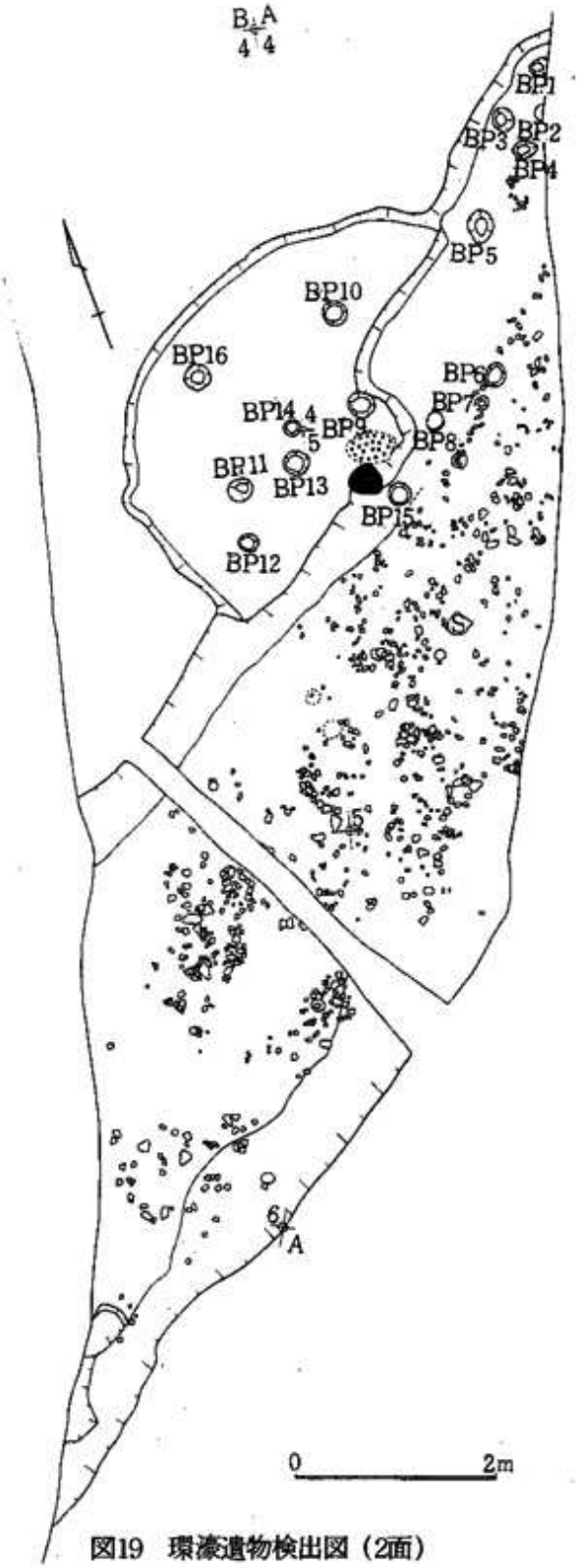
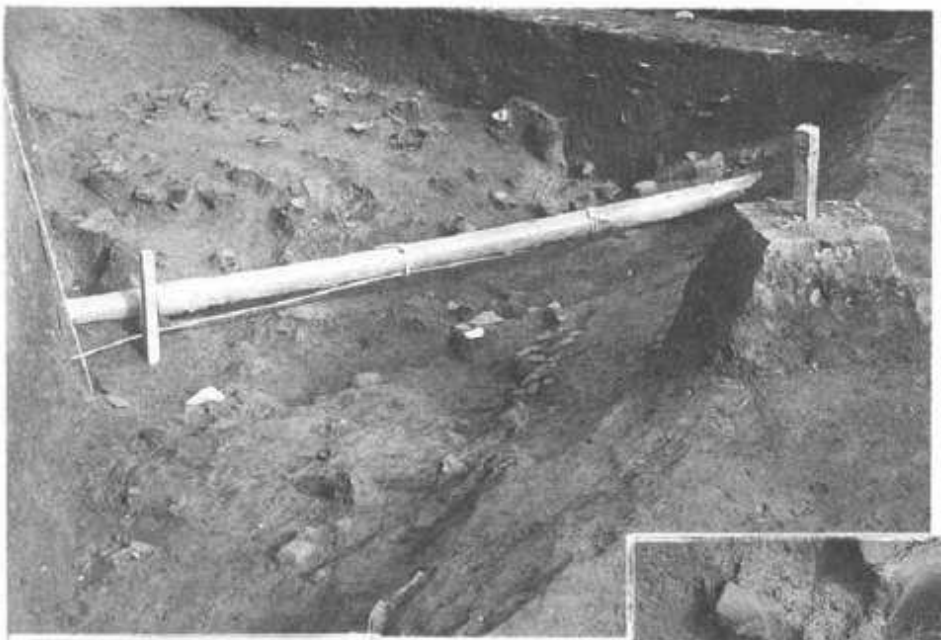


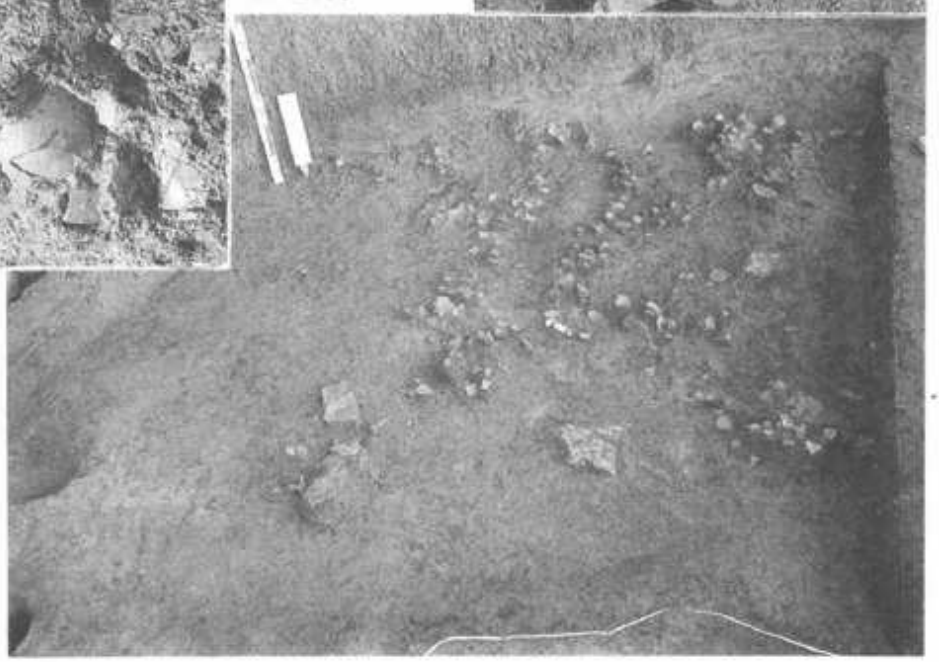
図19　環濠遺物検出図（2面）



← 23　南から見た環濠南の1面

→ 24　同所の甕の出土

↓25　西から見た環濠の1面（北部分）

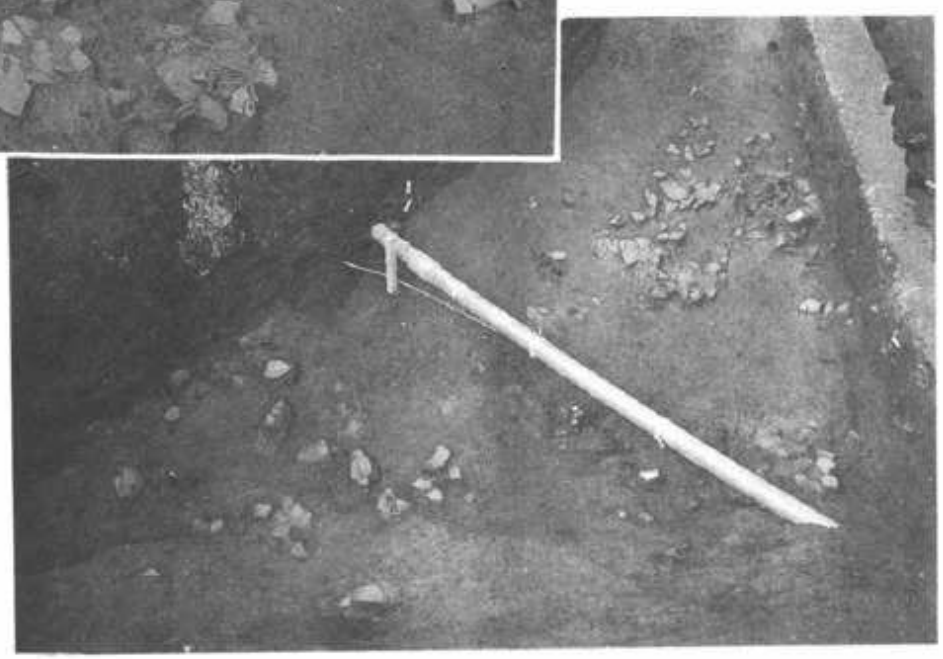


↑ 26　同所の赤彩土器

↑27　西から見た環濠北の部分（2面）

↓28　南から見た環濠南の部分（2面）

← 29　同　部分



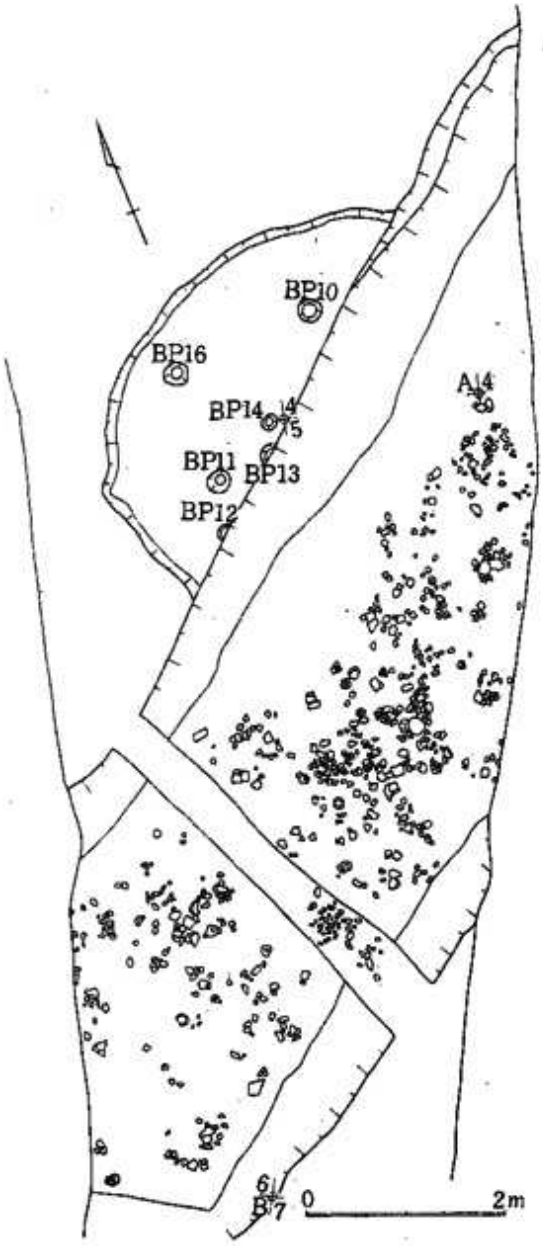


図20　環濠遺物検出図（3面）

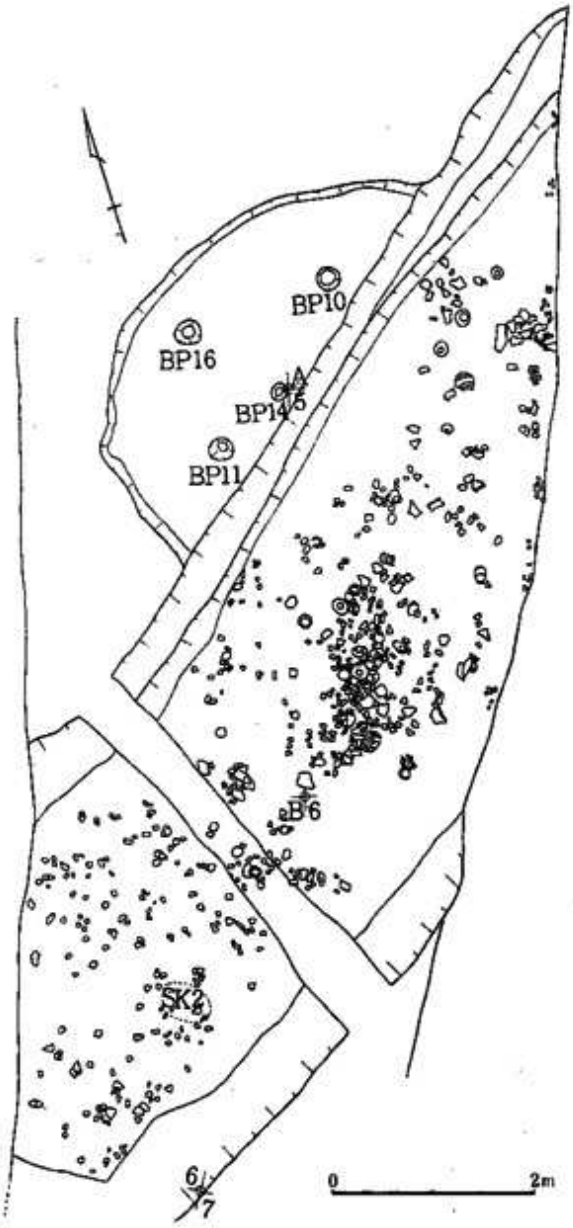
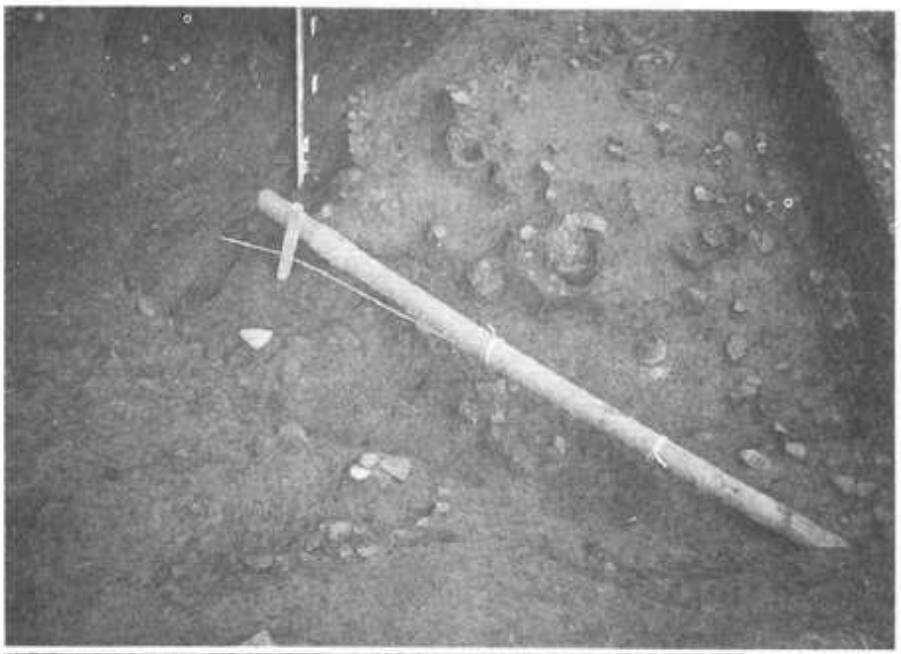


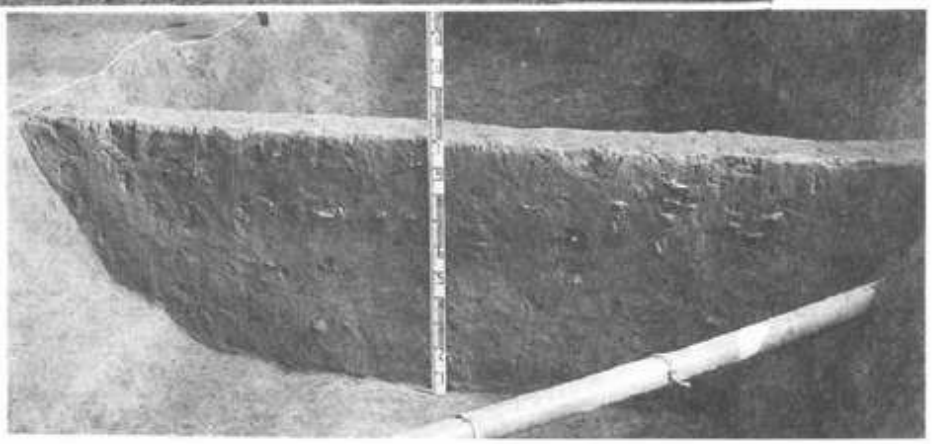
図21　環濠遺物検出図（4面）

→ 30　南から見た環濠の南（3面）

↓31　同部分



→ 32　南から見た環濠中央断面



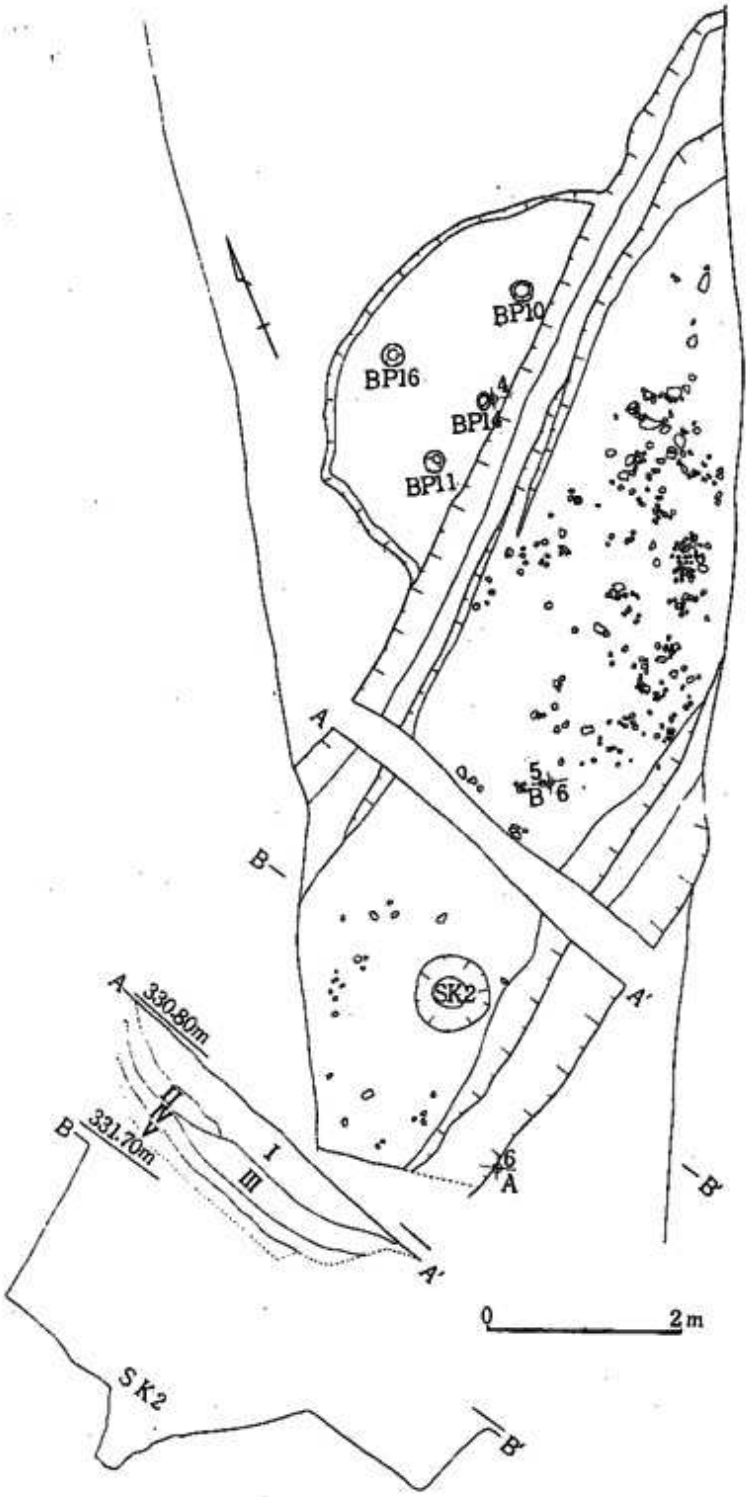
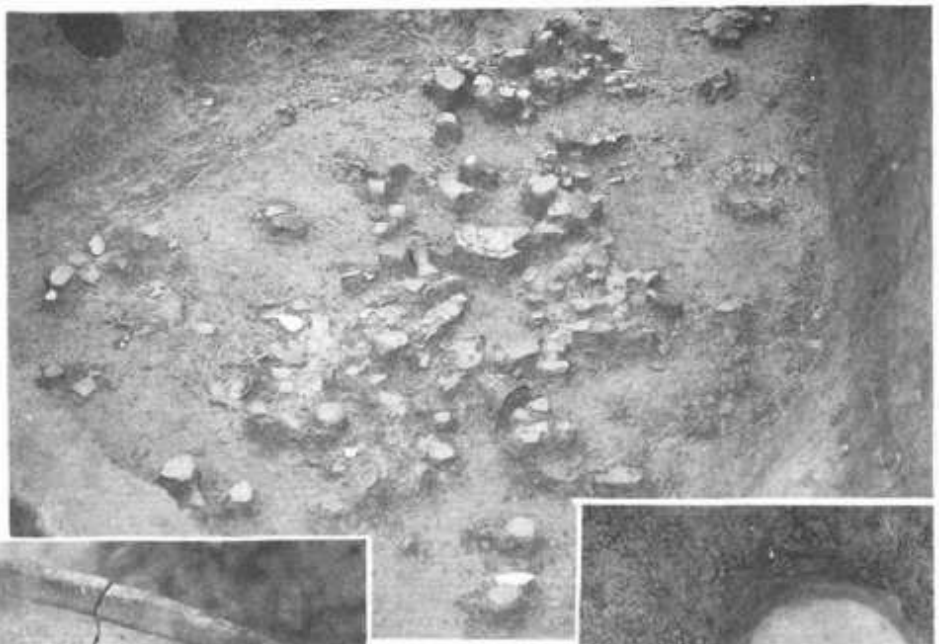


図22　環濠遺物検出図（5面）

→ 33
南から見た
環濠北の3面

↓31　同
出土の甕



↓35　同部分

→ 36　同石包
丁の出土

↑37　同滑石
製垂玉の出
土

→ 38　北から見た環濠南4面

↓39　同部分
(パイプは畑地灌漑用の送水管)

→ 40　同所小形壷の出土

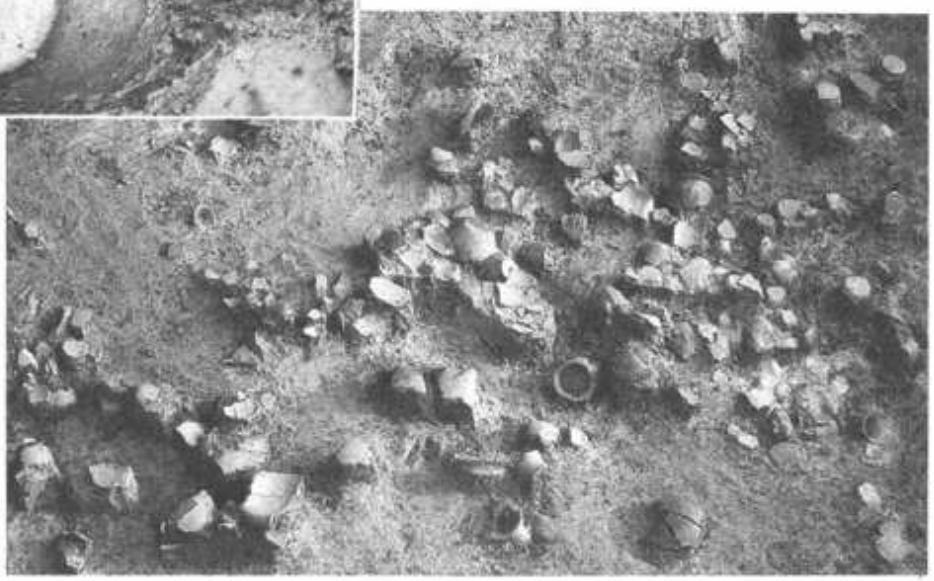
↓41　同部分

→ 42　西から見た環濠北の4面

↓43　同所甑の出土

→ 44　同甕の出土

→ 45　同部分



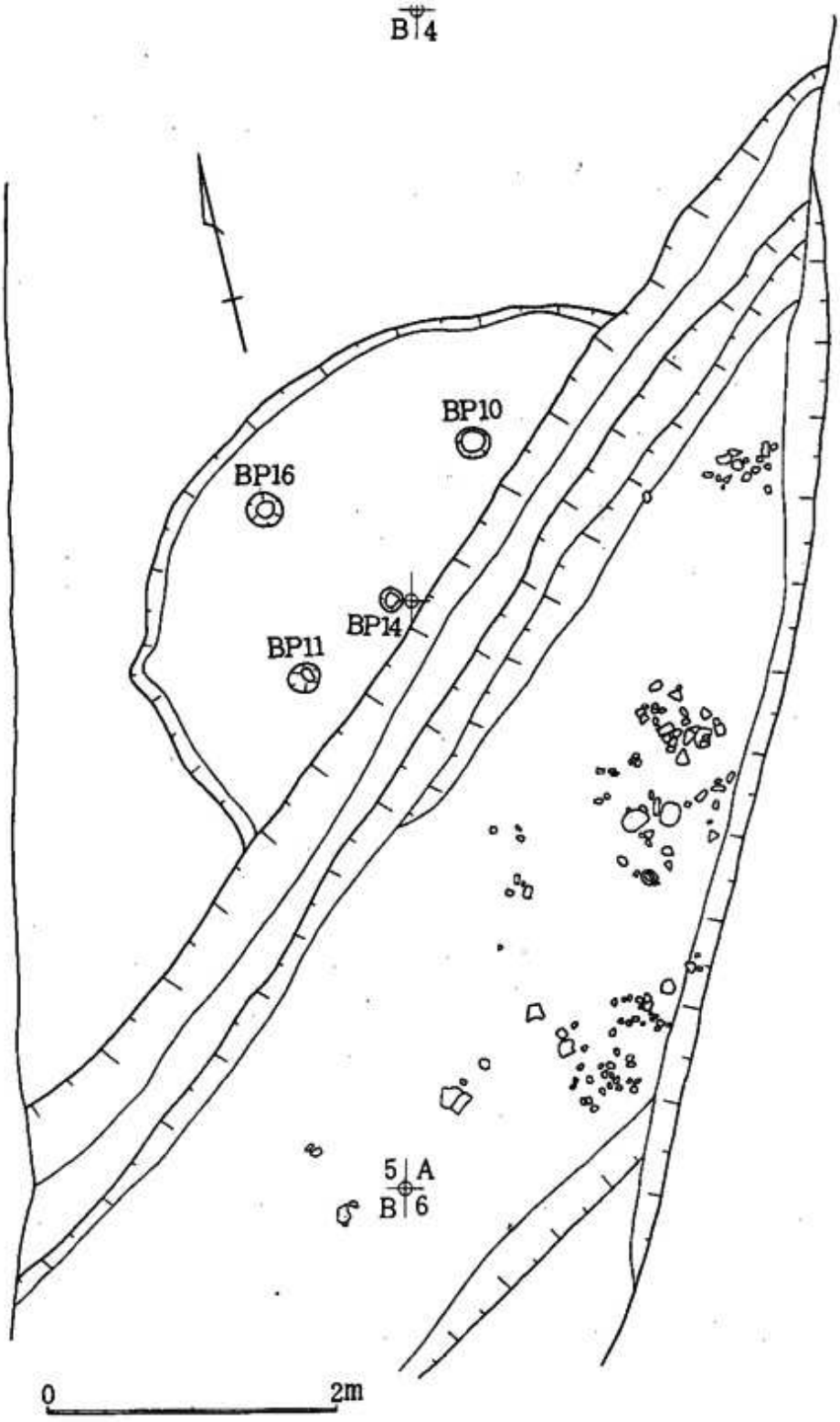
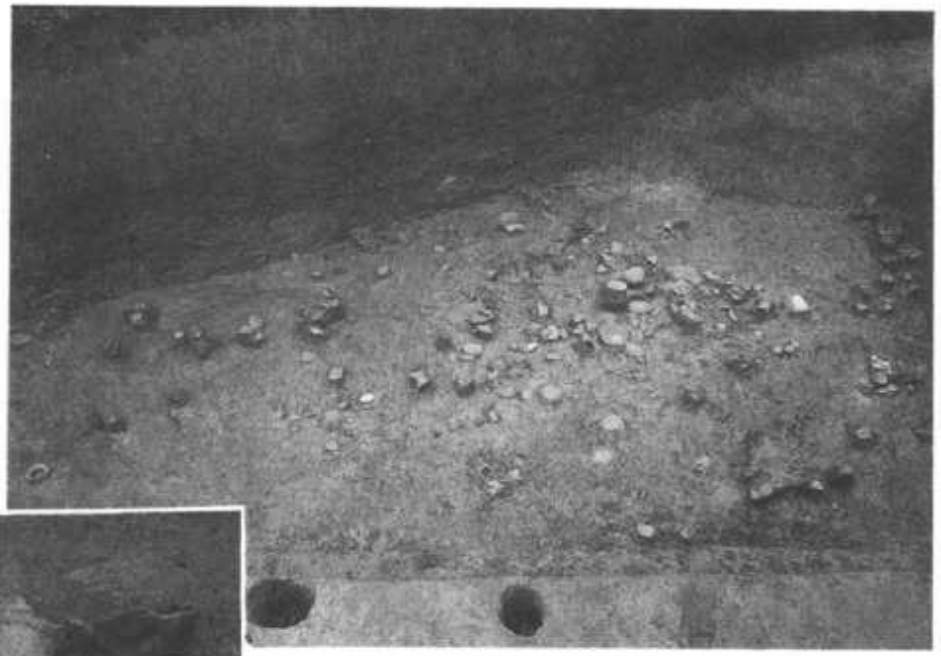


図23　環濠遺物検出図　6面

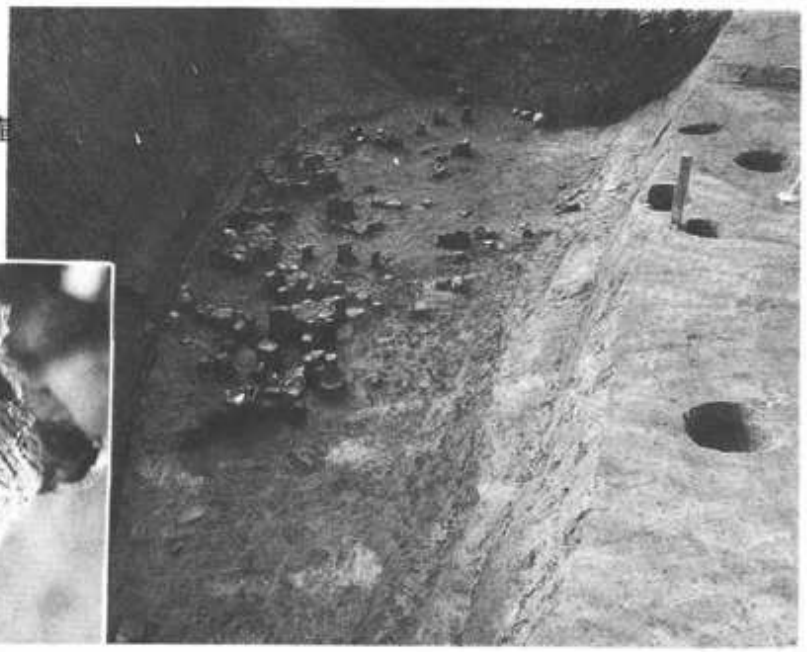


↑46　西から見た環濠北の5面

←47　同所　耳付の壺出土

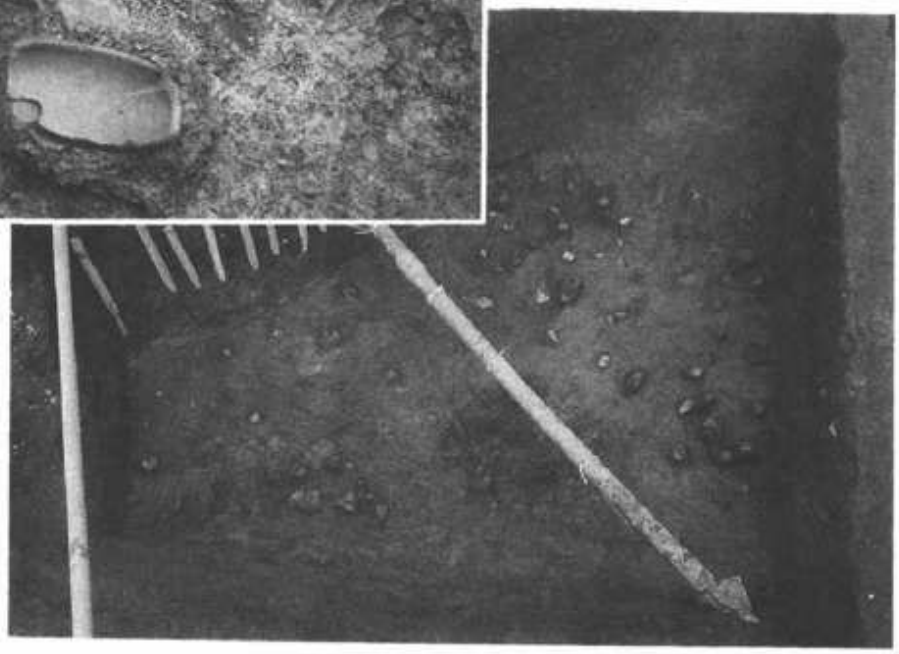
→48　北から見た
環濠北の6面

↓49　同所出土の小形壺

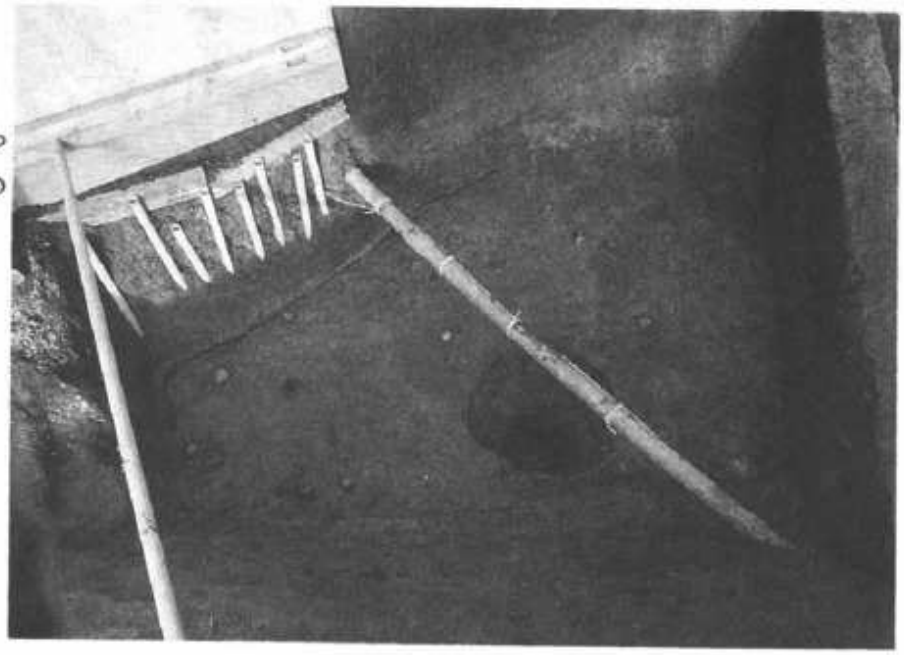


← 50　環濠南底の赤彩椀形土器

↓51　東から見た環濠南の5面
（中央黒い部分土坑）



→ 52　東から
見た環濠南の
6面



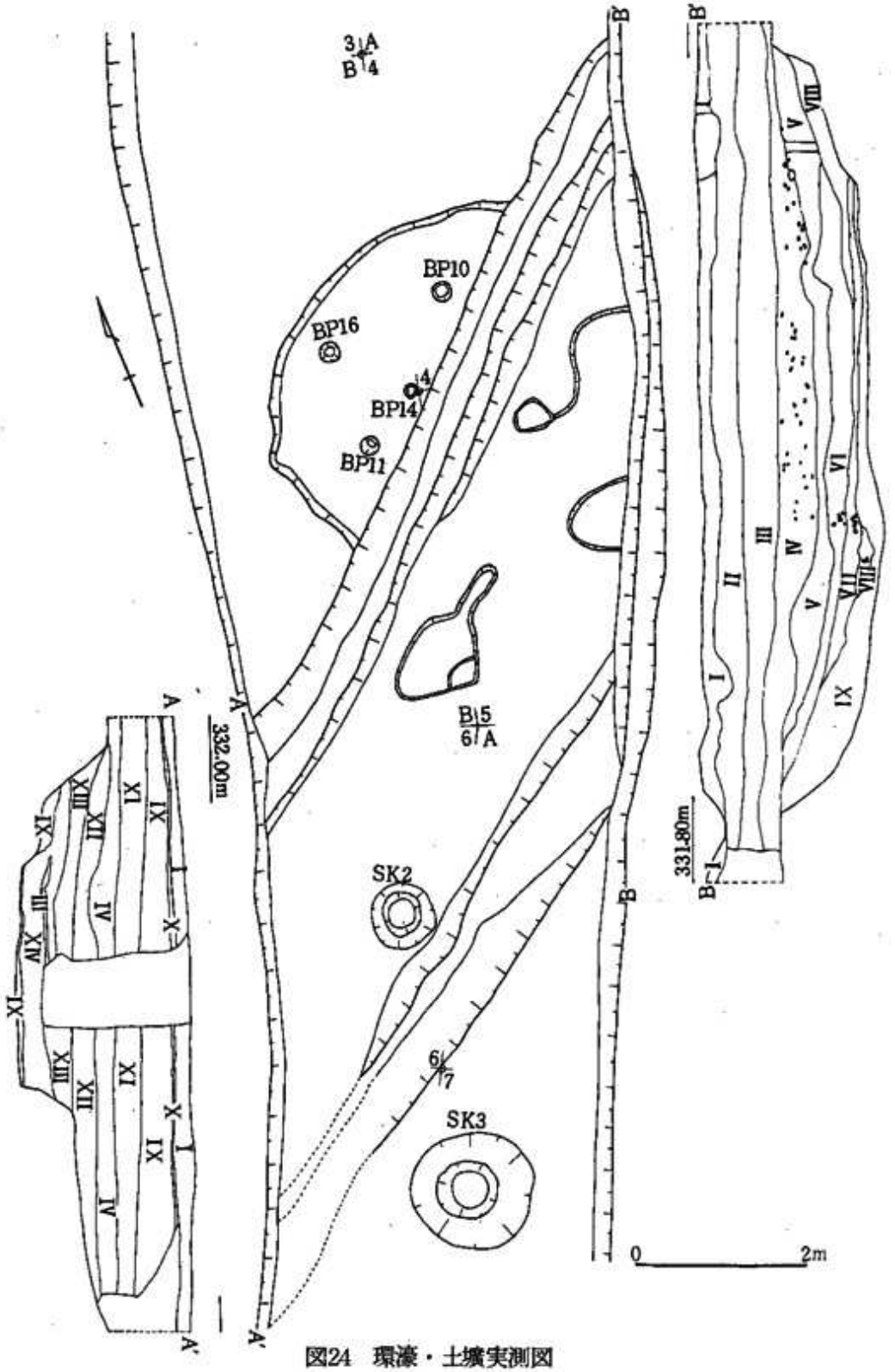


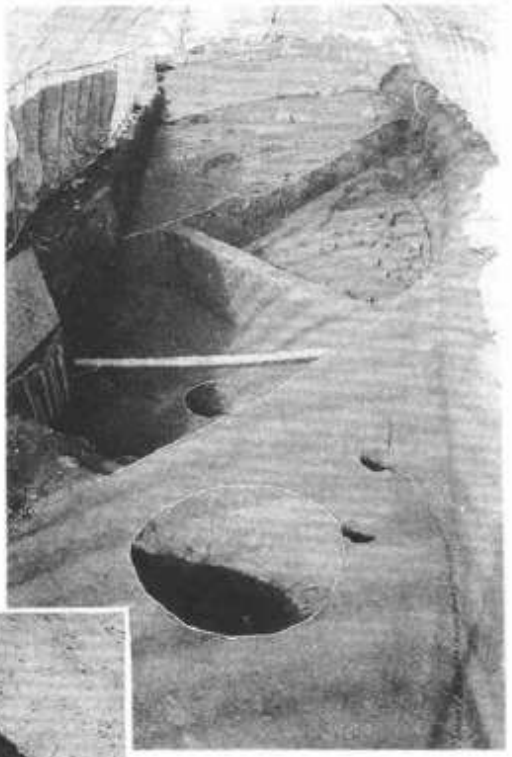
図24　環濠・土壙実測図

6．土壙（坑）と柱穴・溝

(1) SK2　環濠の中のB7にあって、濠を掘り下げ中にここだけ腐植の含んだ黒土があり、濠底まで達しない内に確認できた。実測図及び写真は、濠の完掘後のものである。

したがってこの土壙は、濠の埋没が終わらないうちに作られたものである。

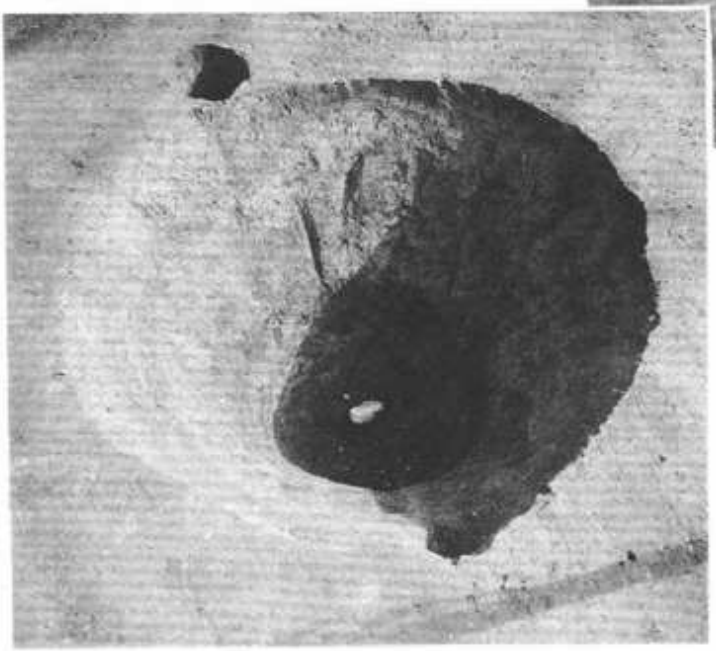
平面はほぼ円形に近く70×80cmで、断面U字形で深さは67cm（確認から1m）である。



→ 53　SK2（濠の中）とSK3（手前）

↑54　南から見たSK2

↓55　西から見たSK3



この中には前に記した黒土のほか、土器片などがあったが、特にこの土壙の性格を知る手掛かりはなかった。

(2) ＳＫ3　ＳＫ2の南、Ａ7にあって濠の縁に位置する。黄色土層まで掘り下げて確認されたもので、ほぼ円形で直径190cmで、深さ75cmを計り、深さ35cmのところで、稜をなしている。底はほぼ円形で直径40cmあり、ほぼ平らであった。

これもＳＫ3とおなじような埋没状態を示していたが、底に河原石があった。また、周囲に柱穴が2基連続している。

(3) ＳＫ4　4号住居址の東南のＡ14に位置し、直径1m、短径80cm、深さ確認面から5cmである。この中に栗林2式の壺上半部と甕下半部があった。甕の文様は櫛描波状文があり、壺は口唇部に縄文があり、頸部に3条の沈線がみられるだけである。（図41－39・46）

これらの両者を組み合わせた墓址遺構かと推定されるが確証はない。

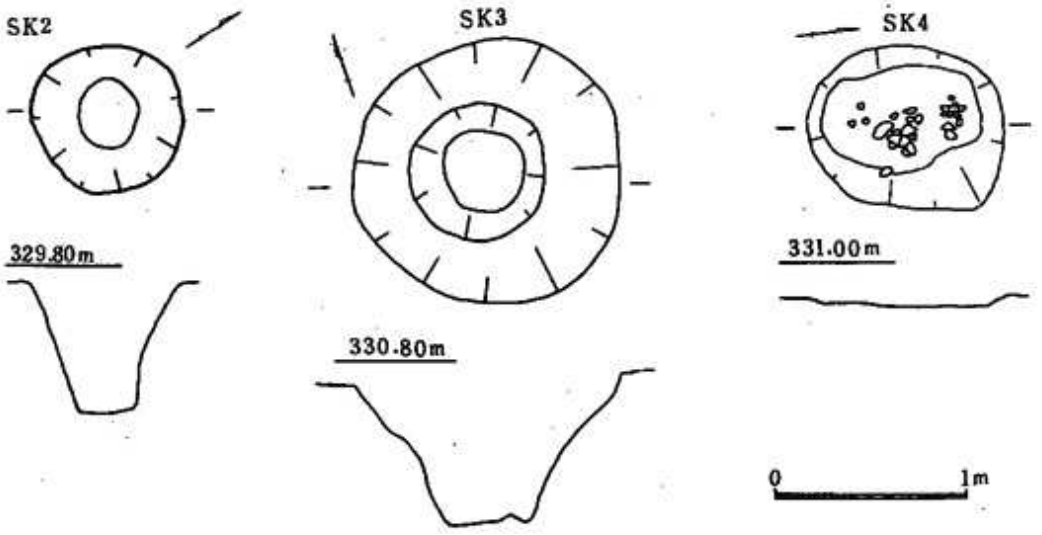


図25　ＳＫ2・3・4遺構実測図

(4) 柱穴　ここでは住居址以外の柱穴について記す。

各住居址の間には柱穴または、凹みになっているところもあり、焼け土、炭などみられる箇所があった。また、濠から北は住居面と同じレベルで、検出されたものが多いが、南側は検出面に上下がある。傾向とすれば大きな柱穴程、上層で見つかっている。従って、これは平安時代頃のものと推定される。

これらの柱穴は、組み合わせ可能のものが見られるが、小面積のため建物の復元は困難である。

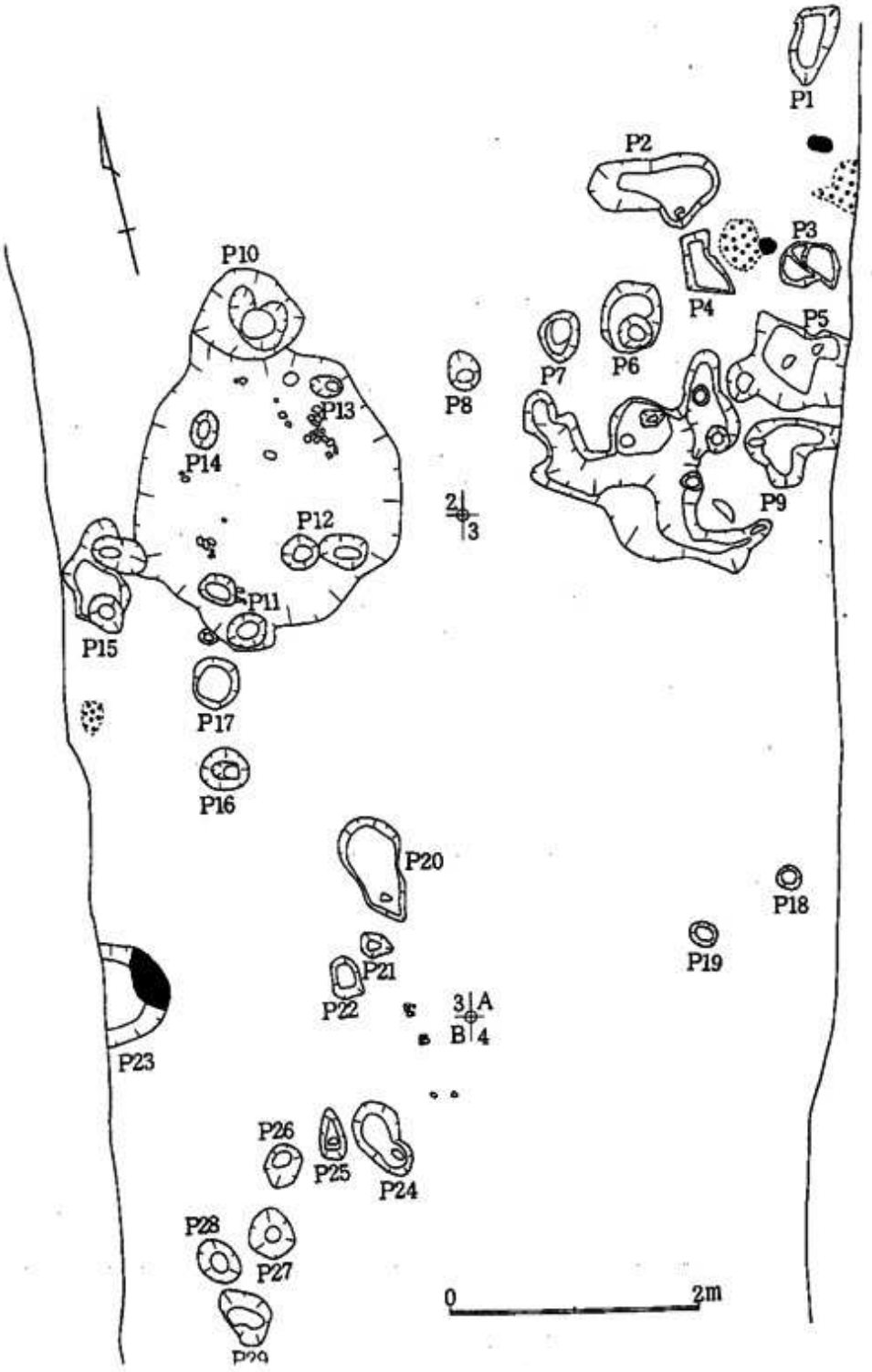


図26　柱穴遺構実測図(1)

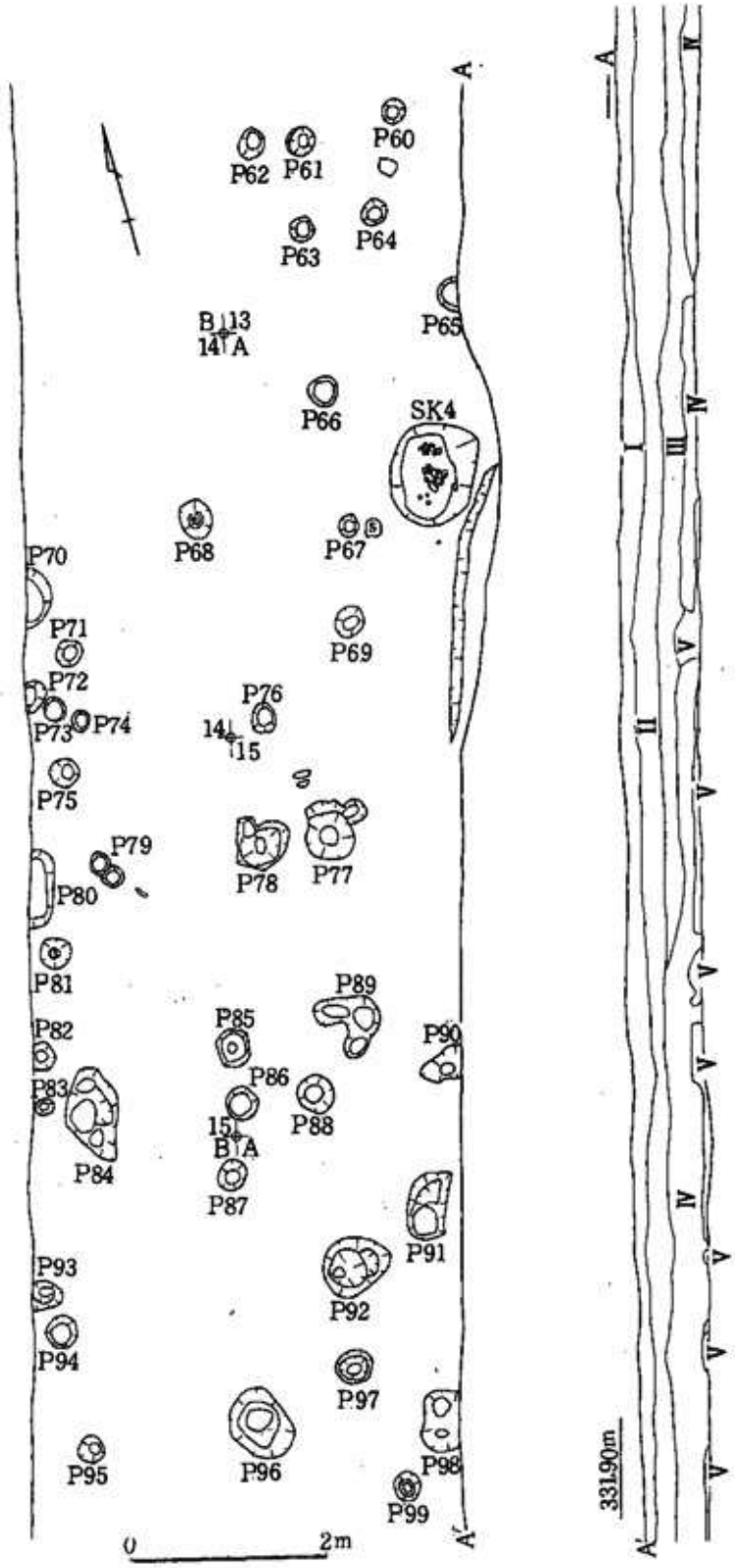


図27　柱穴遺構実測図(2)

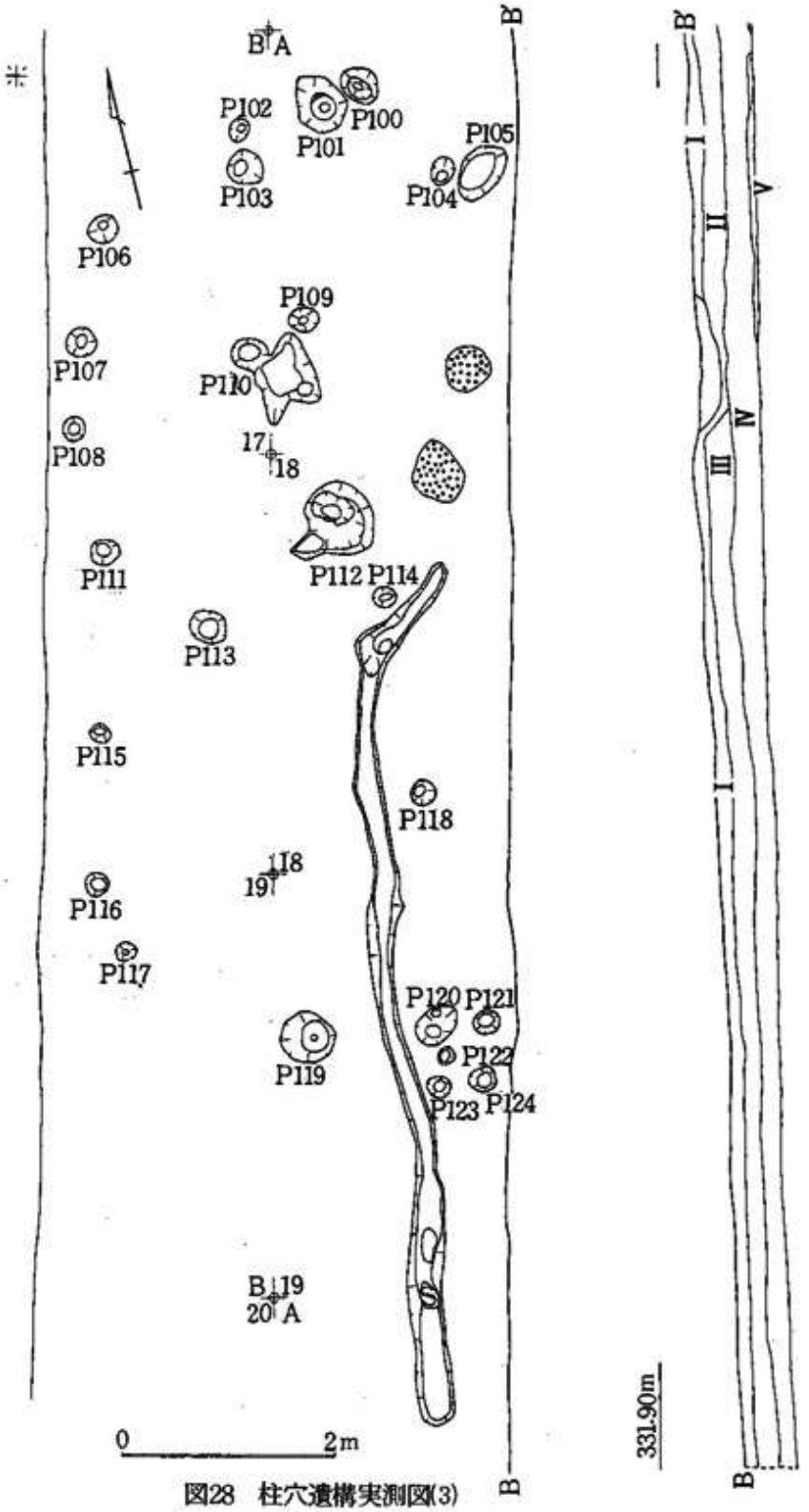
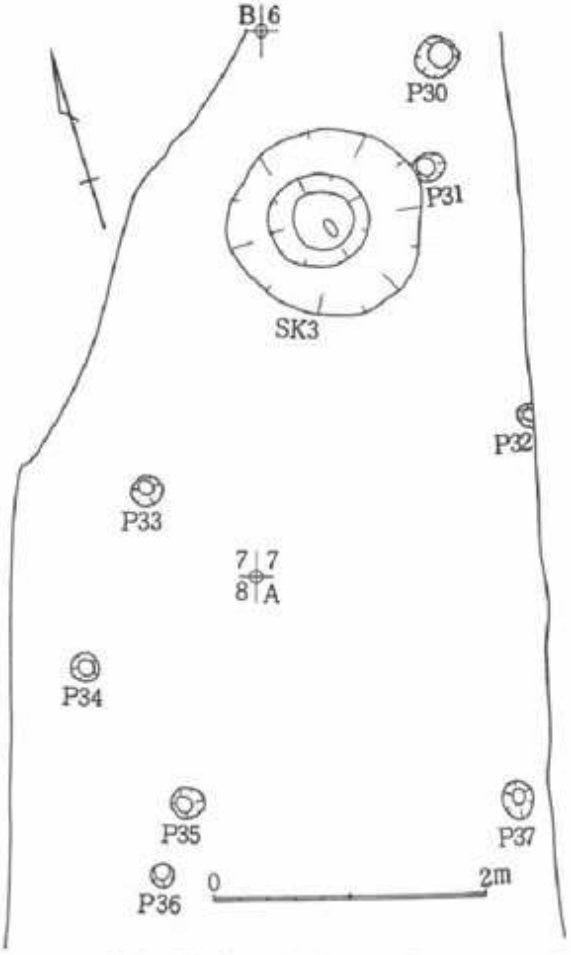


図28　柱穴遺構実測図(3)



↑56　ＡＢ15からＡＢ20を見る

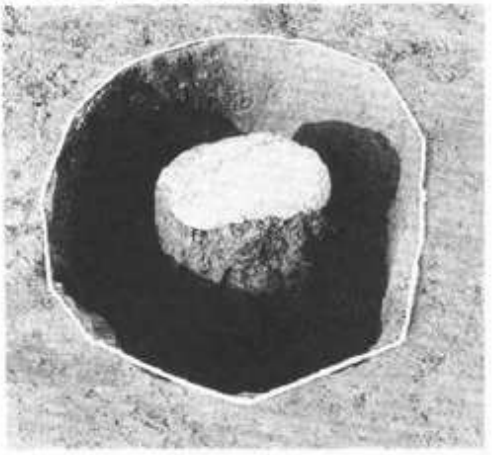


図29　柱穴遺構実測図(4)　　↓57　西から見たＡＢ2・3付近　　↑58　柱穴96

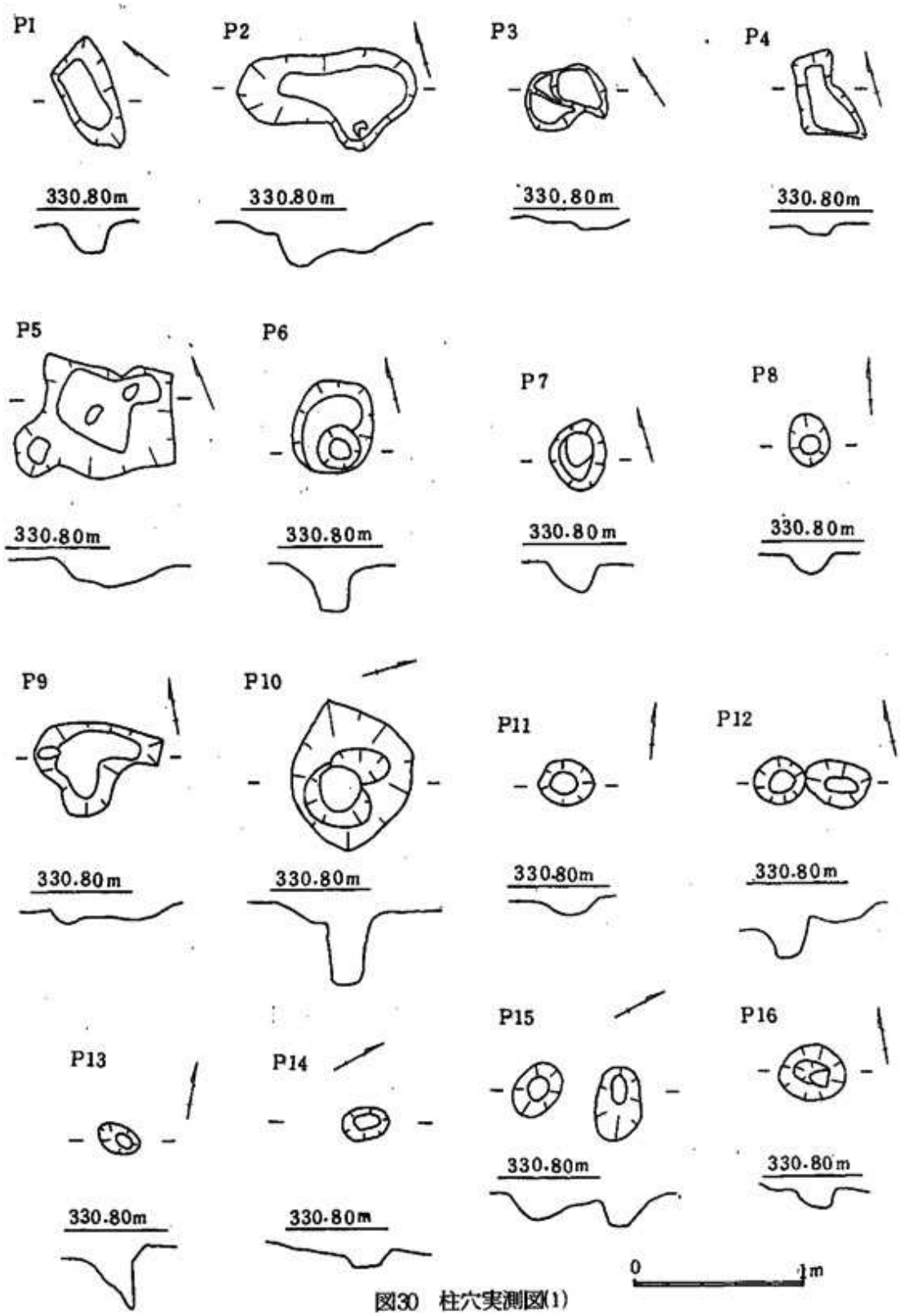

P1
P2
P3
P4
330.80m
330.80m
330.80m
330.80m
P5
P6
P7
P8
330.80m
330.80m
330.80m
330.80m
P9
P10
P11
P12
330.80m
330.80m
330.80m
330.80m
P13
P14
P15
P16
330.80m
330.80m
330.80m
330.80m
0
1m

図30　柱穴実測図(1)

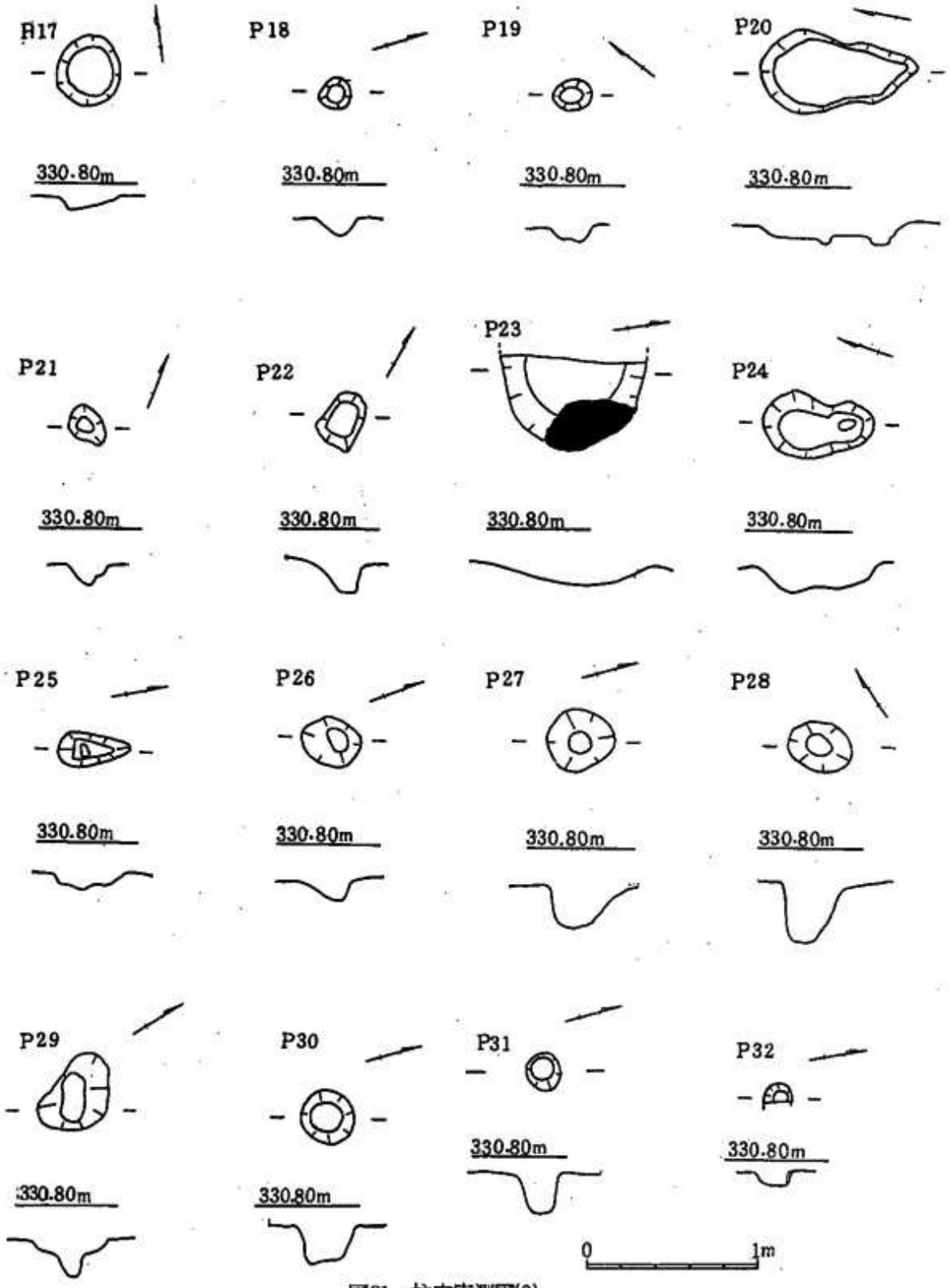

P17
P18
P19
P20
P21
P22
P23
P24
P25
P26
P27
P28
P29
P30
P31
P32
330.80m
0
1m

図31　柱穴実測図(2)

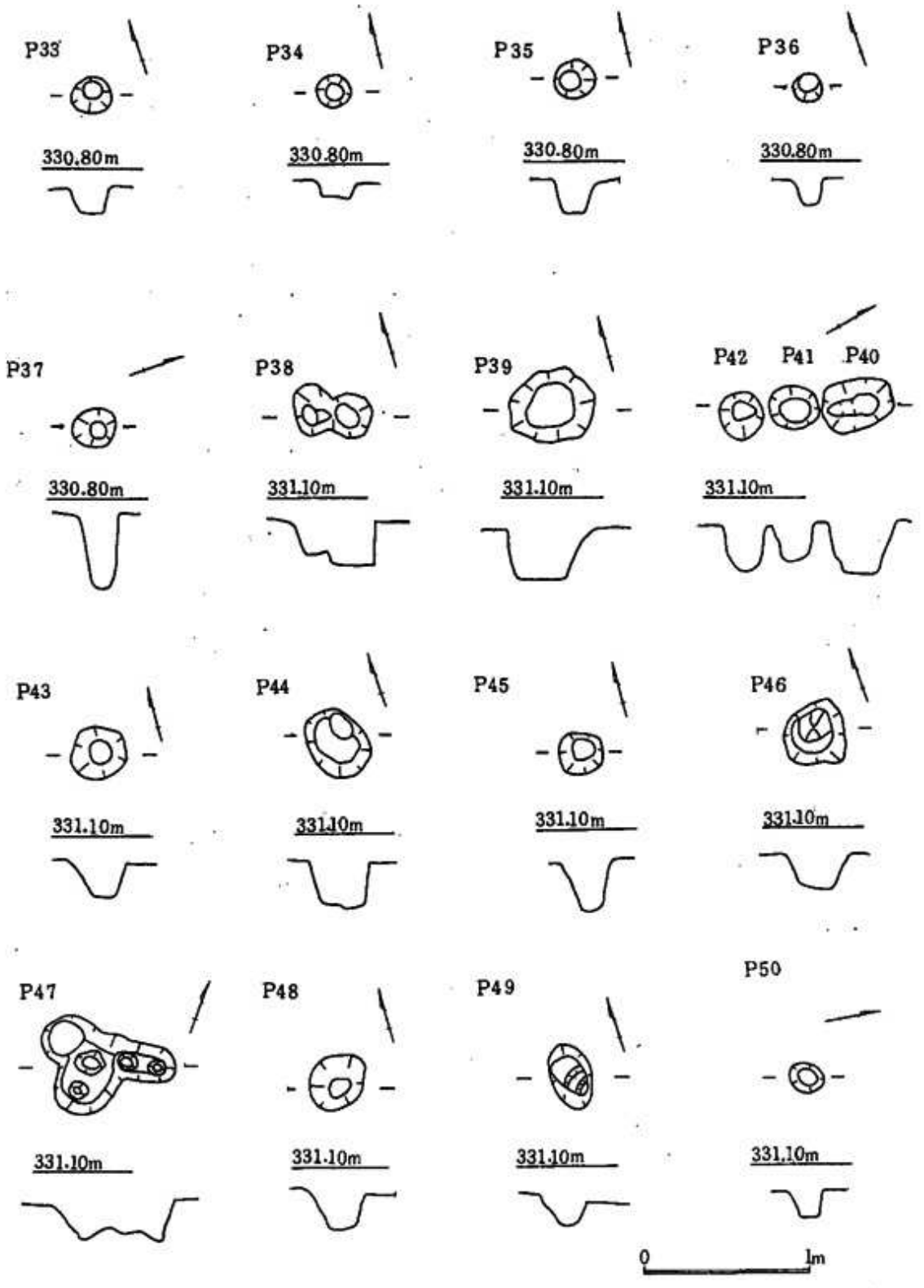

P33
330.80m
P34
330.80m
P35
330.80m
P36
330.80m
P37
330.80m
P38
331.10m
P39
331.10m
P42
P41
P40
331.10m
P43
331.10m
P44
331.10m
P45
331.10m
P46
331.10m
P47
331.10m
P48
331.10m
P49
331.10m
P50
331.10m
0
1m

図32　柱穴実測図(3)

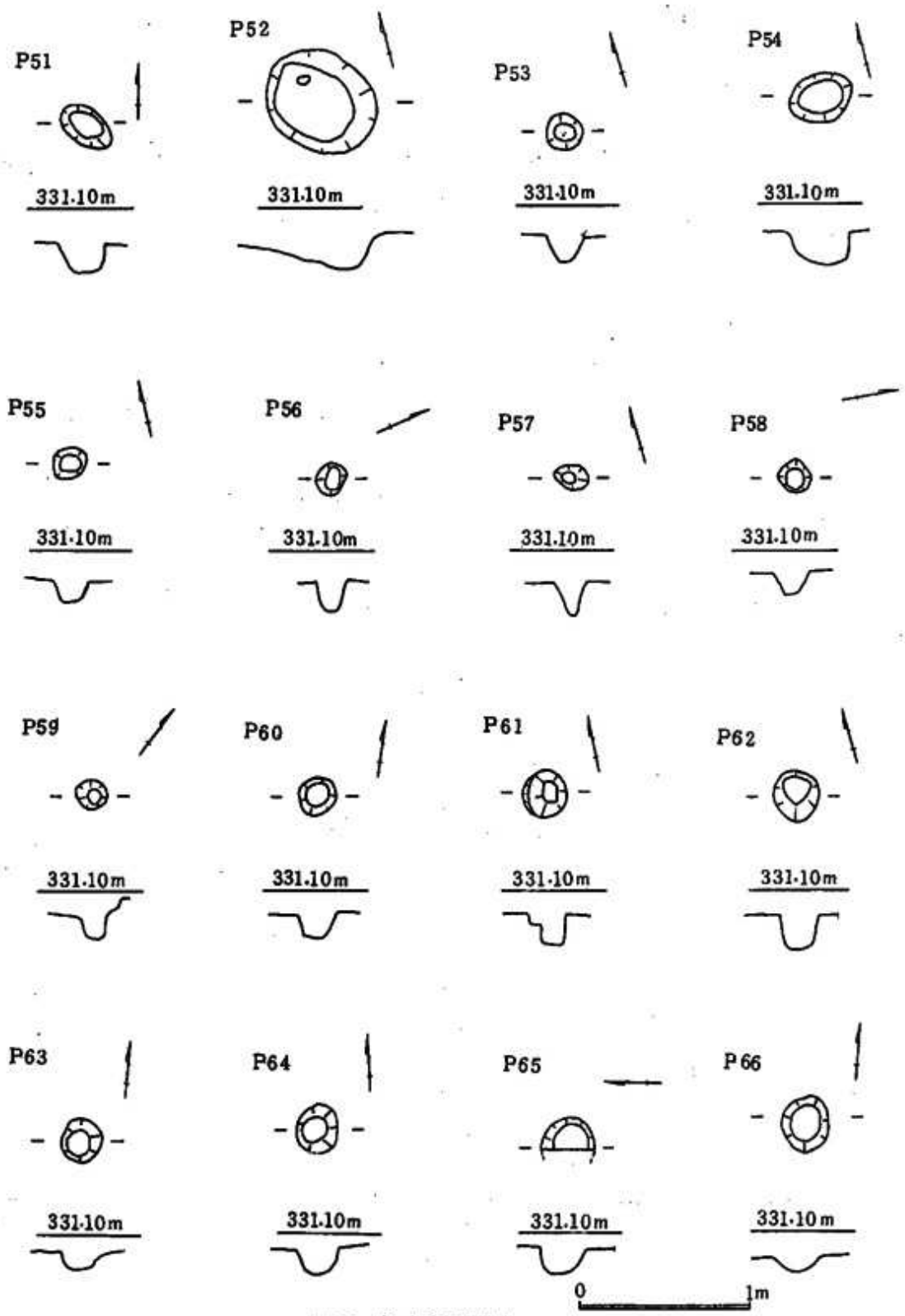

P51
P52
P53
P54
P55
P56
P57
P58
P59
P60
P61
P62
P63
P64
P65
P66
331.10m
0
1m

図33　柱穴実測図(4)

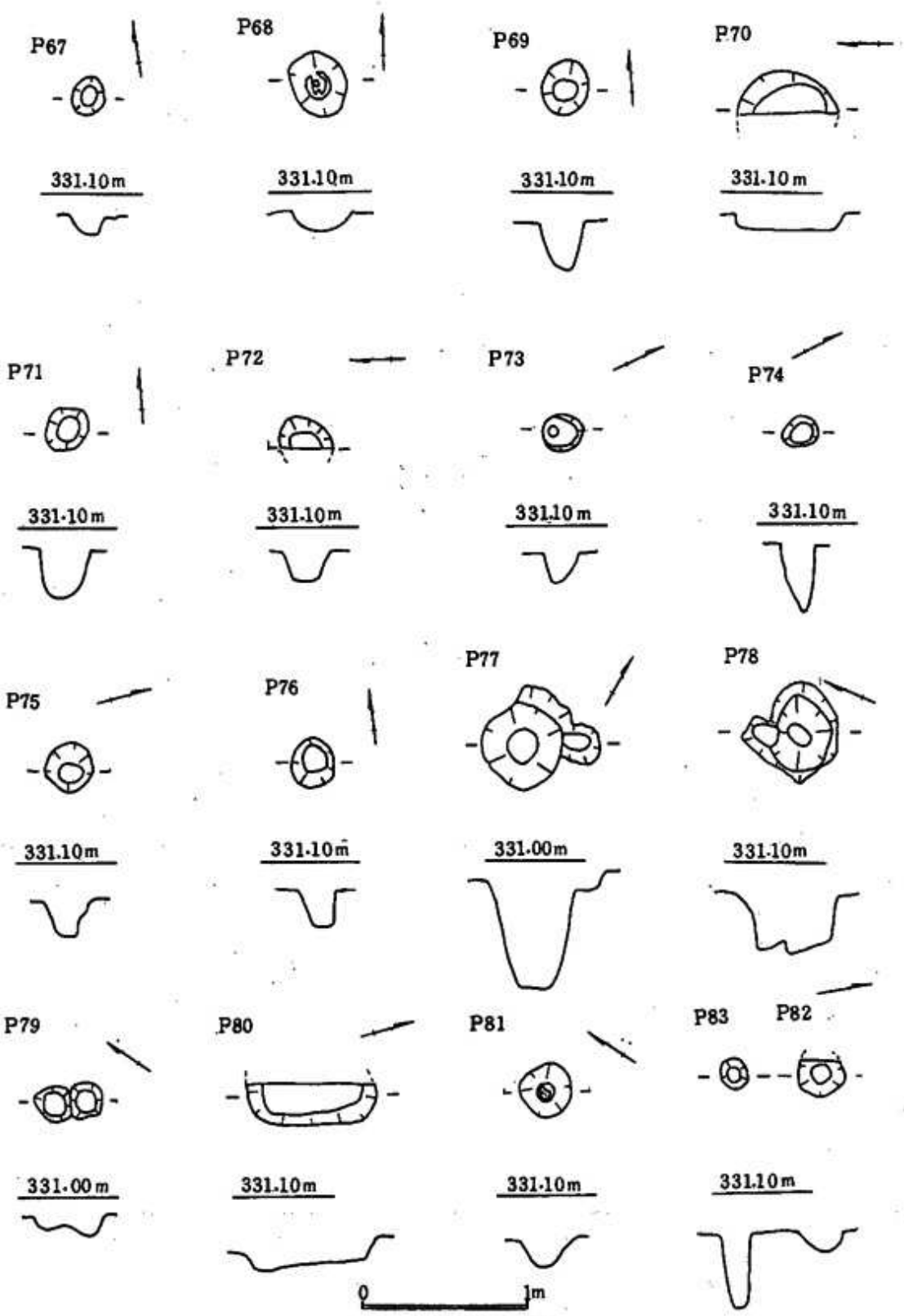

P67
331.10m
P68
331.10m
P69
331.10m
P70
331.10m
P71
331.10m
P72
331.10m
P73
331.10m
P74
331.10m
P75
331.10m
P76
331.10m
P77
331.00m
P78
331.10m
P79
331.00m
P80
331.10m
P81
331.10m
P83
P82
331.10m
0
1m

図34　柱穴実測図(5)

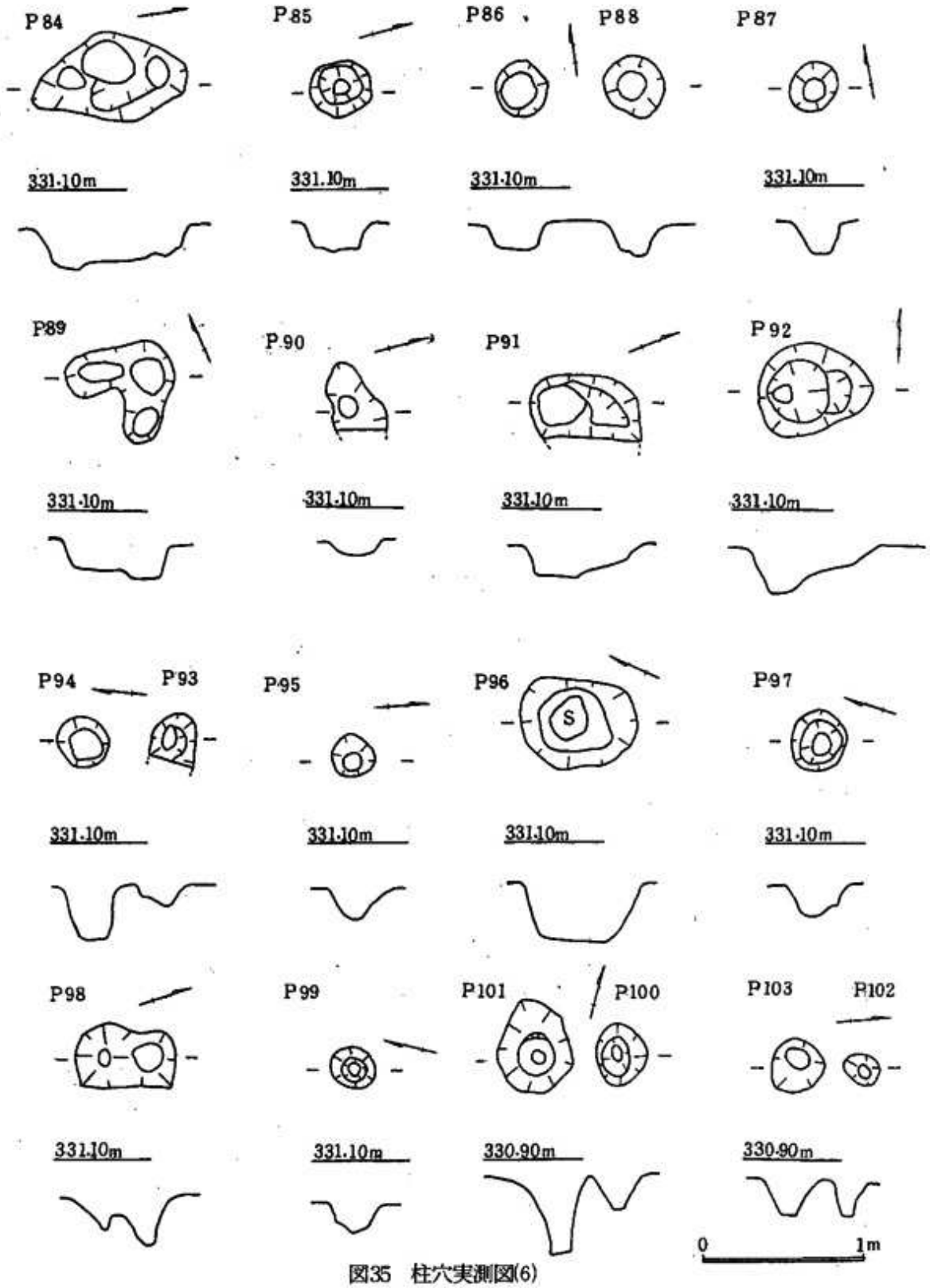

P84
P85
P86
P88
P87
331.10m
331.10m
331.10m
331.10m
P89
P90
P91
P92
331.10m
331.10m
331.10m
331.10m
P94
P93
P95
P96
S
P97
331.10m
331.10m
331.10m
331.10m
P98
P99
P101
P100
P103
P102
331.10m
331.10m
330.90m
330.90m
0
1m

図35　柱穴実測図(6)

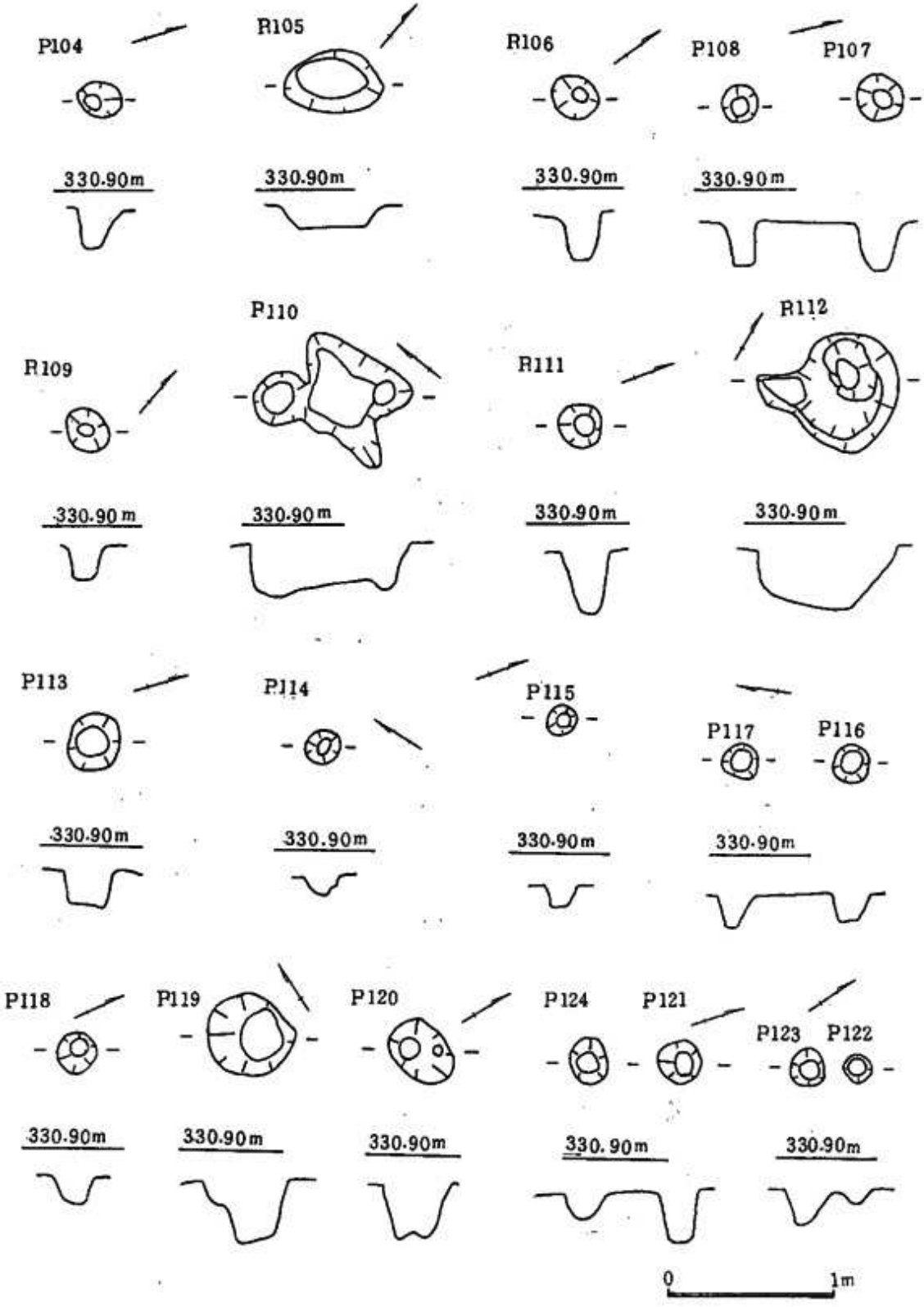
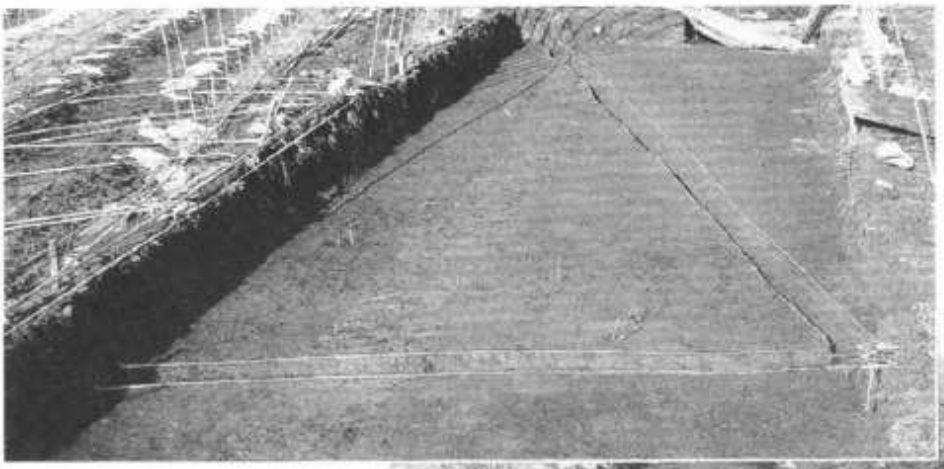
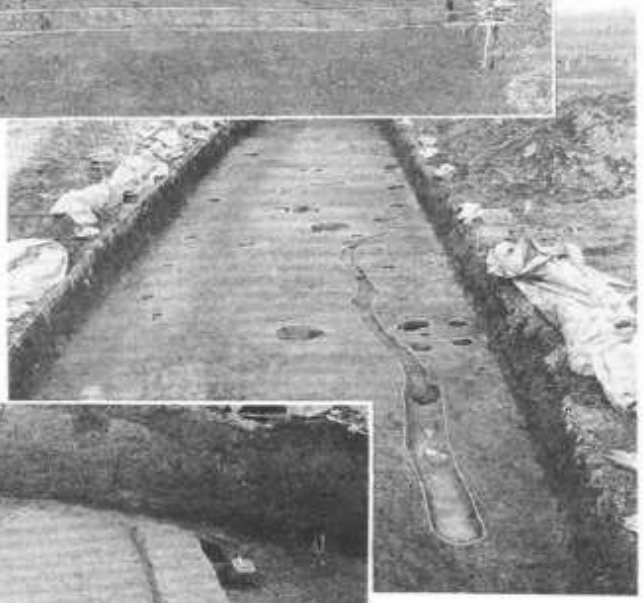

P104
P105
P106
P108
P107
330.90m
330.90m
330.90m
330.90m
P109
P110
P111
P112
330.90m
330.90m
330.90m
330.90m
P113
P114
P115
P117
P116
330.90m
330.90m
330.90m
330.90m
P118
P119
P120
P124
P121
P123
P122
330.90m
330.90m
330.90m
330.90m
330.90m
0
1m

図36　柱穴実測図(7)

(5) 溝　この溝状遺構にも時代差があって、柱穴の検出前のもの（写真59）同時期と思われるもの（写真60・61）などがある。前者は畑（耕作地）の境界をなしていたと思われるもの、後者は古代以前の建物などに伴うものと推定される。

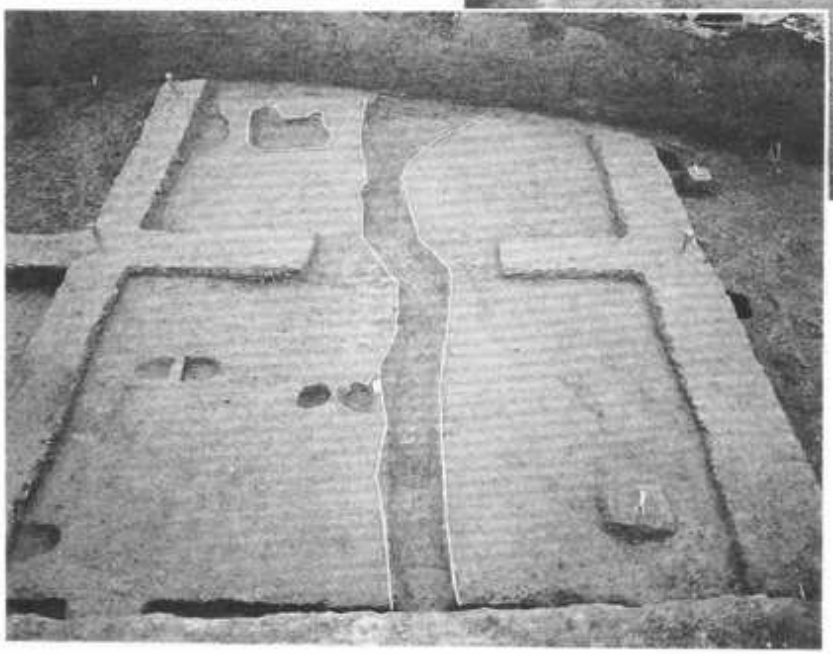




↑59　南から見たＡＢ15～11の溝（4号住上層）

→ 60　南から見たＡ19付近の溝

↓61　西から見たＡＢ3の溝（2号住と環濠の上層）



第2節　遺　物

1．土　器

現在、弥生時代中期後半に位置づけられている栗林式土器は、昭和6年（1931）神田五六氏が、この地の瓦原料粘土採取場から採集された土器を学会に発表され、中央で注目されたことに始まる。

昭和11年、藤森栄一氏によって長野県の古式弥生土器として、栗林式土器として位置づけられた。

大戦後の昭和23年（1948）秋、下高井教育会の主催により、奈良博物館小野勝年氏、京都大学考古学教室坪井清足、横山浩一氏が担当し、初めて学術的な発掘がなされて住居址2、集石址などとともに多量の土器が検出された。

その後、25年（1950）小野氏の指導で、高丘小・中学校が、私設道路の建設に先立って発掘調査を行った。

35年（1960）には県下の弥生遺跡としては初めて、県史跡に指定された。

その後、40年（1965)には開田工事により、発掘調査がおこなわれ、住居址と小竪穴1基づづを検出している。

54年（1979）には、畑地潅漑施設の配水管の敷設に先立ち、遺跡周辺を含めて分布調査が行われた。その後、住宅建設により、4回の発掘調査が市教委によって行われている。

62年（1987）先に行った分布調査に基づき、潅漑施設が施工されることになり、その配管溝の発掘調査を行った。

さらに、平成3年（1991)に至り、関越自動車道上信越線、立ヶ花インターから分岐する中野～志賀道路が、栗林遺跡の南端から東側を横断することになり、長野県埋蔵文化財センターで、発掘調査を行い、次年度も続行することになっている。

以上が栗林遺跡の調査の概略である。(中野市教委「栗林Ⅶ」1988参照)

このような学会から注目される重要遺跡であり、栗林式の標式遺跡でありながら、良好な完形土器に恵まれることが少なかった。

この原因についてはいろいろな条件が重なった結果と見られる。

その中には千曲川による洪水によって、遺跡が埋没しており、この水害によって破損消滅したものも多かったと考えられる。

そして、氾濫によって運ばれた土は肥沃のため、古代から耕作地として利用されてきたことも原因の一つに数えられる。(75頁に続く)

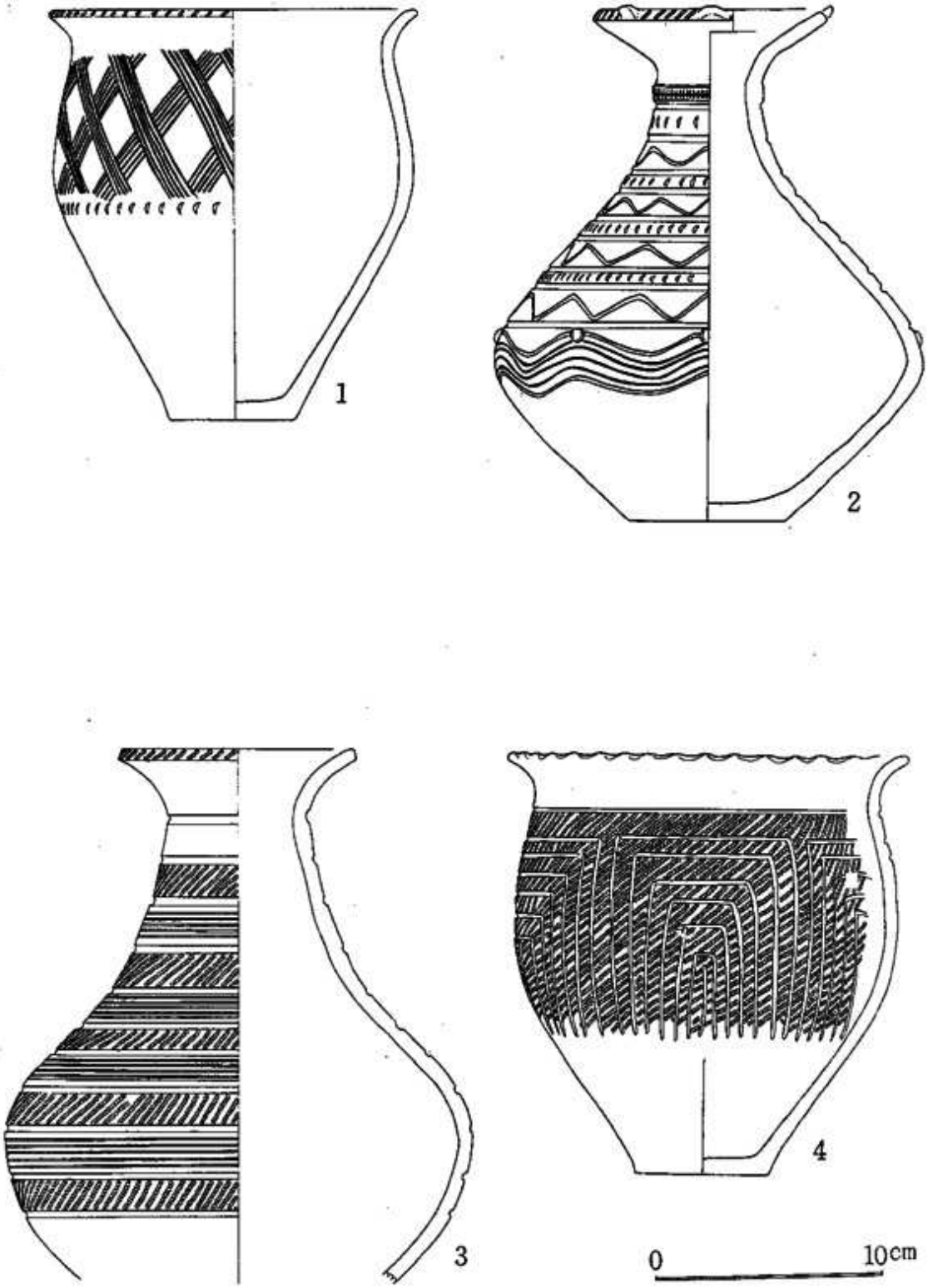


図37　土器実測図(1)

↓62　濠出土 5

↓63　同 6

（数字は図版の土器番号）

↑64　濠出土 7

→
67　濠出土 2

↑65　1号住出土 1

↓66　濠出土 3

↑68　濠出土 4

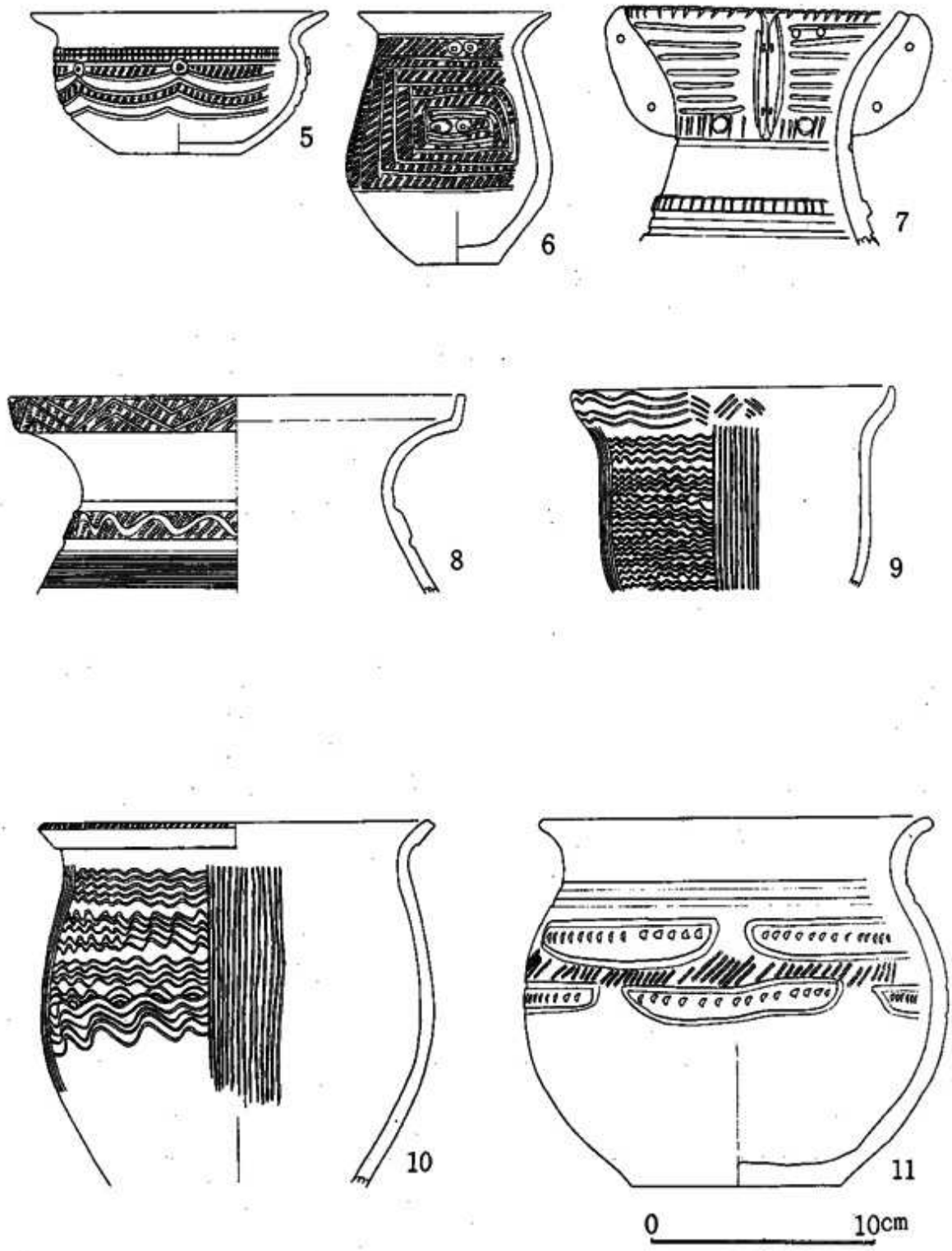
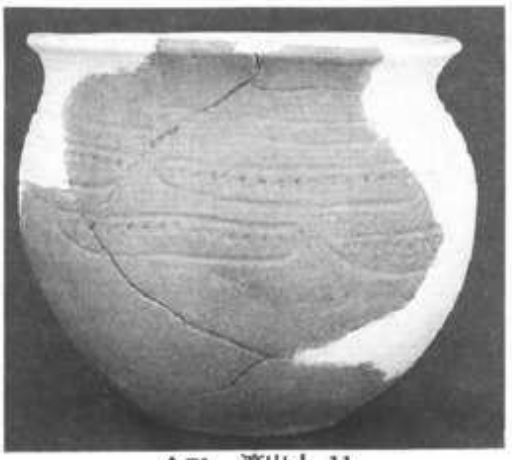


図38　土器実測図(2)

↑69　1号住出土 12

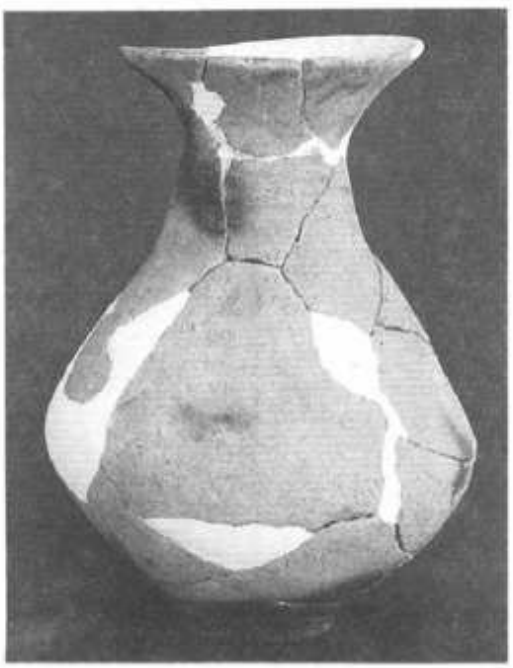
← 70　A2出土



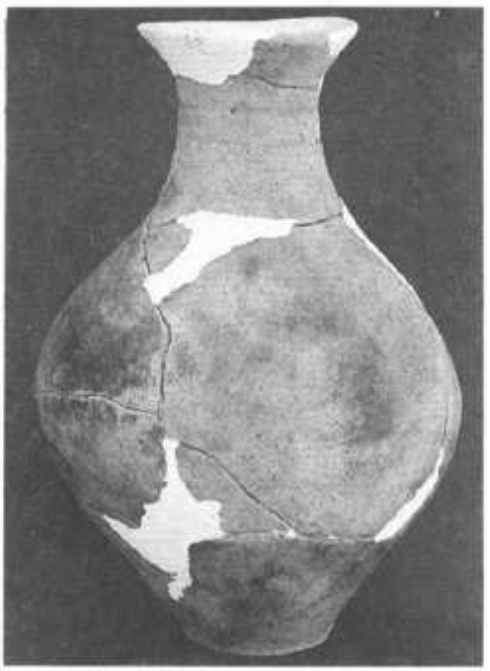
↑71　濠出土 11

↑72　濠出土 17

↑73　濠出土 14・30・34・B4グリット・濠出土 33



↑74　濠出土 18



↑75　濠出土 19

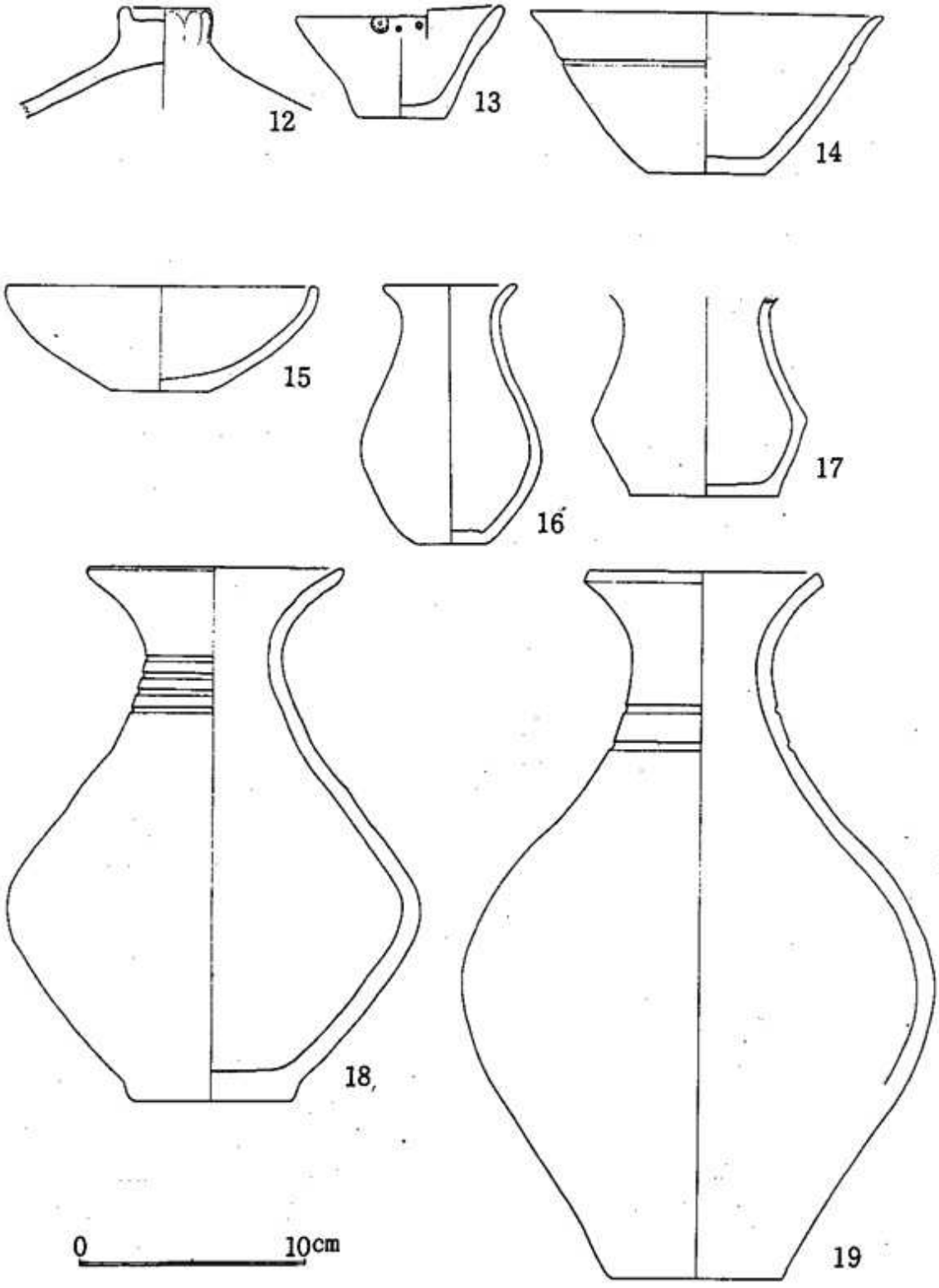


図39　土器実測図(3)

↑77　濠出土16

↑76　濠出土13

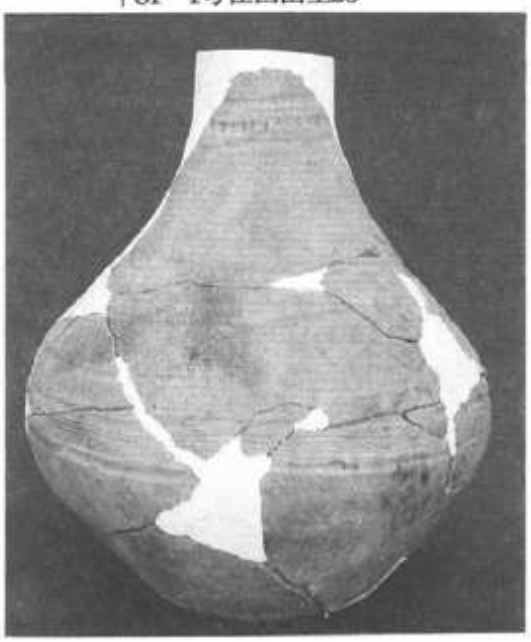
↑80　濠出土40

↑78　濠出土20

↑79　1号住出土36

↑81　1号住西出土26

↑82　濠出土25



↑83　濠出土44

↑84　1号住出土

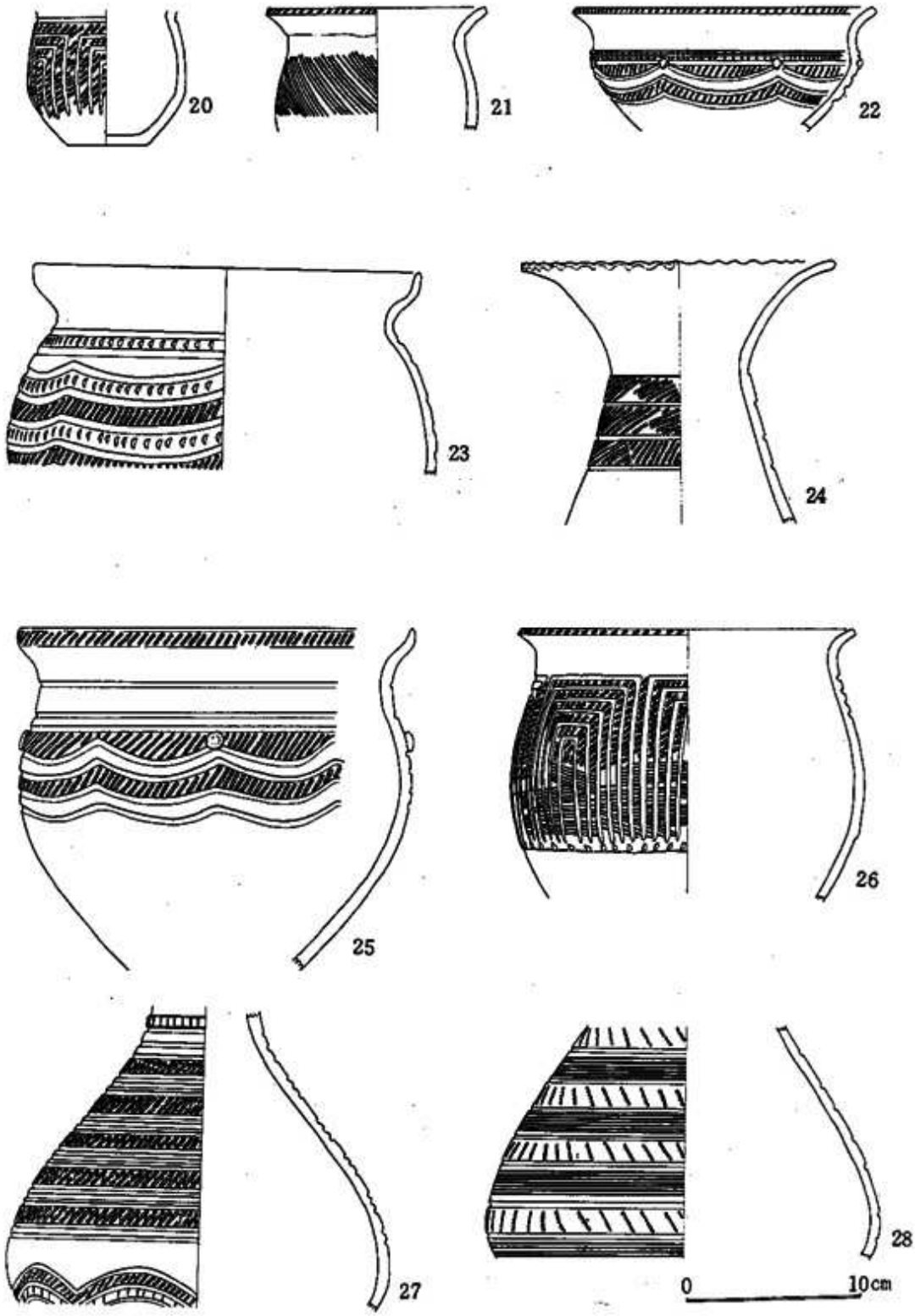


図40　土器実測図(4)

↓85　A4出土　　↓86　濠出土9　　↓87　濠出土42

↓88　濠出土8

↓92　濠出土41　　↑89　濠出土10　　↑90　濠出土10と同体

← 91　濠出土

93　濠出土27

↑94　濠出土2　8　　↑95　濠出土38　　↑96　B13出土24

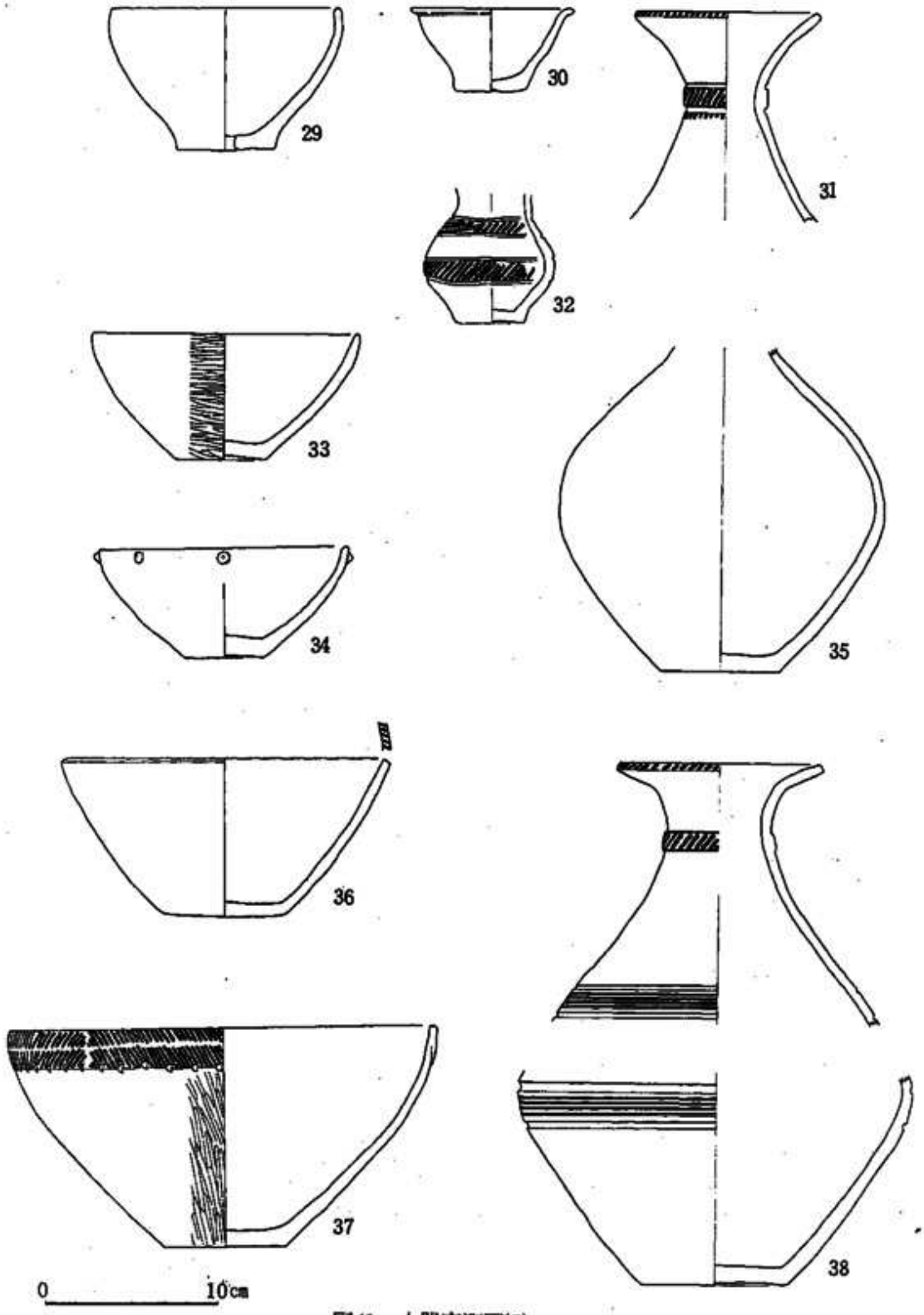


図41　土器実測図(5)

↑97　B1出土15

↑98　2号住出土

↑99　濠出土32

↑100　濠出土甑29

↑101　濠出土31

↑102　A14SK4出土

↑103　A14出土43

↑104　濠出土38

↑105　1号住出土36

↑106　1号住出土

↑107　濠出土37

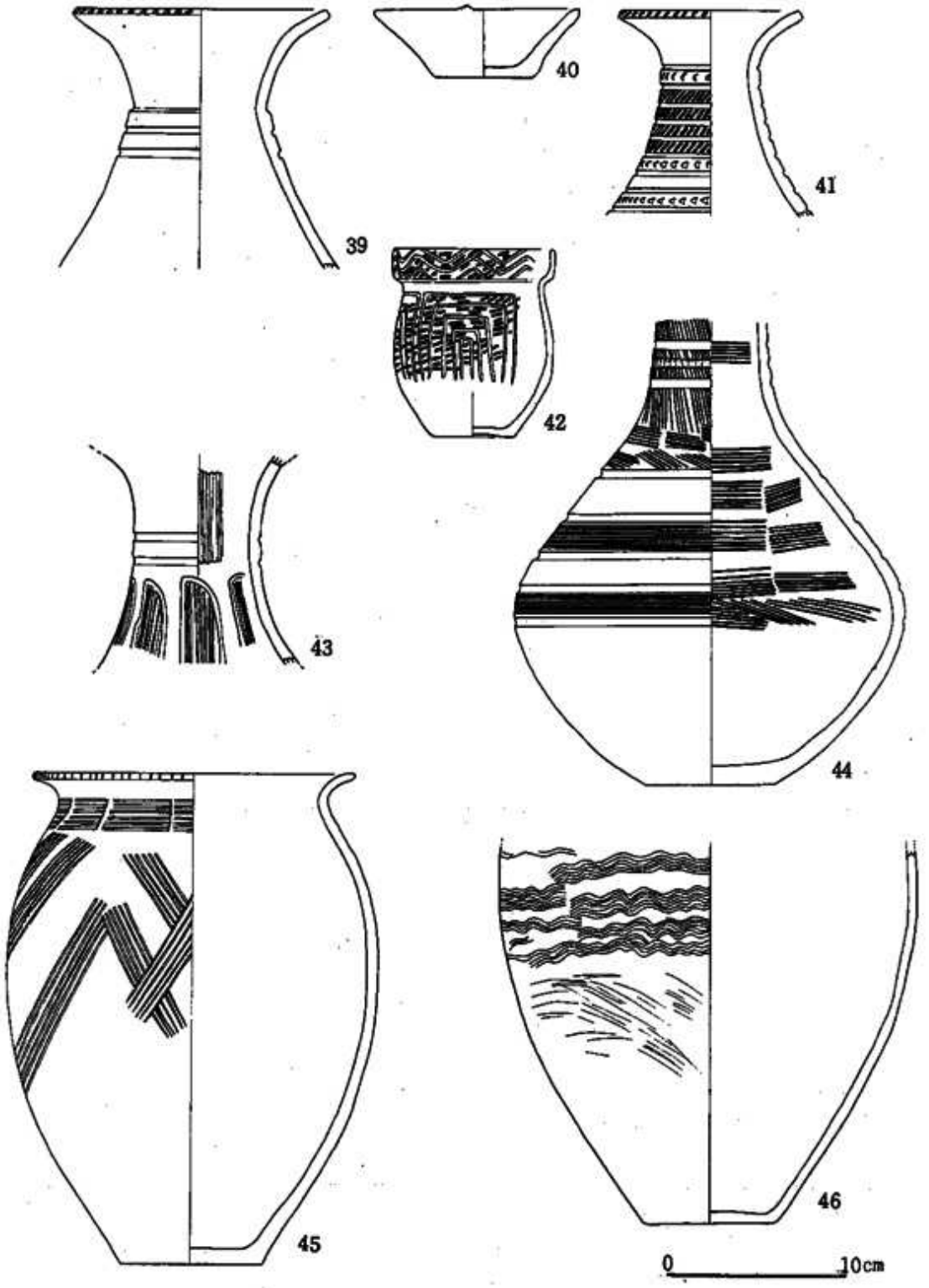


図42　土器実測図(6)

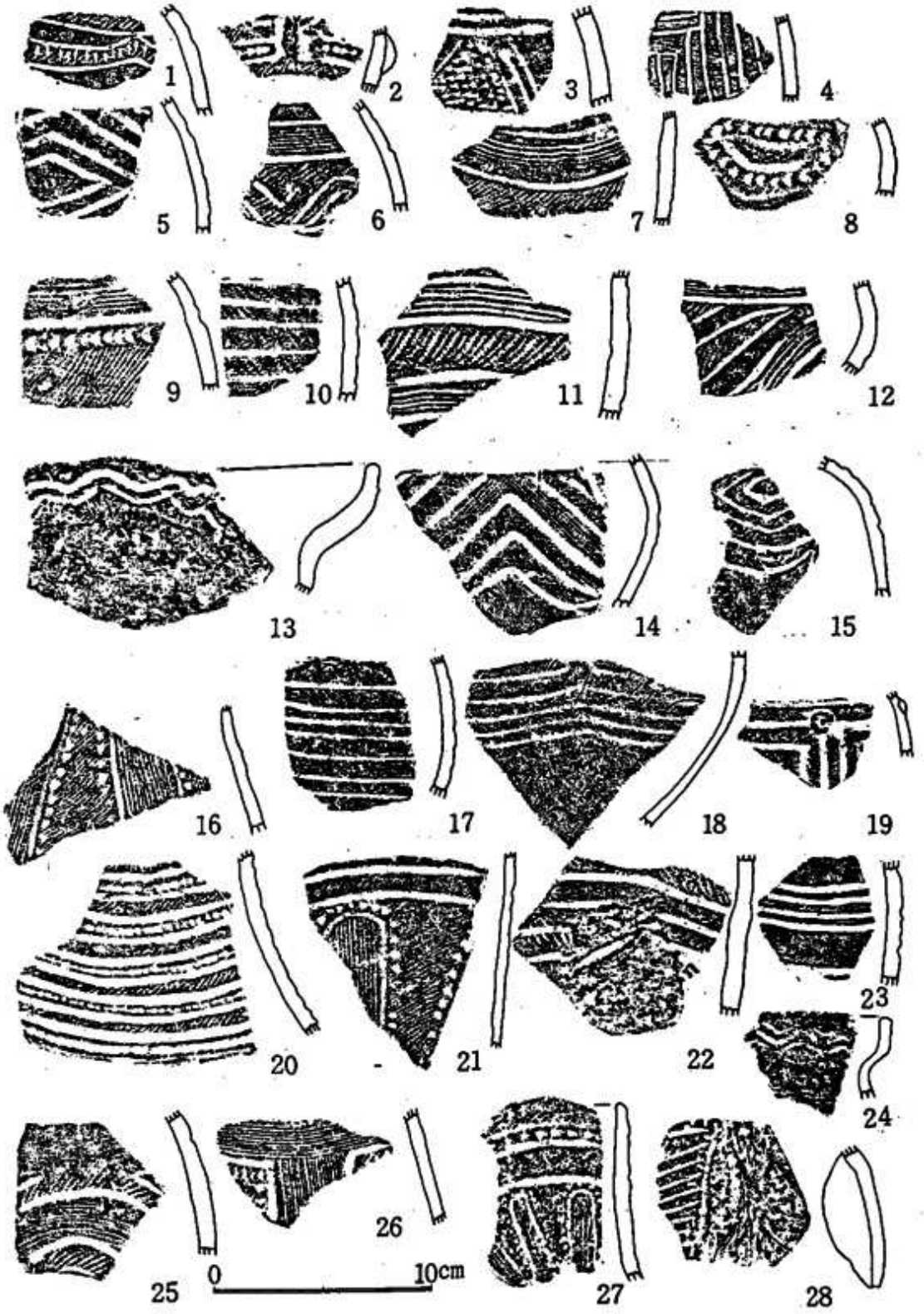

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10cm

図43　土器拓影図(1)

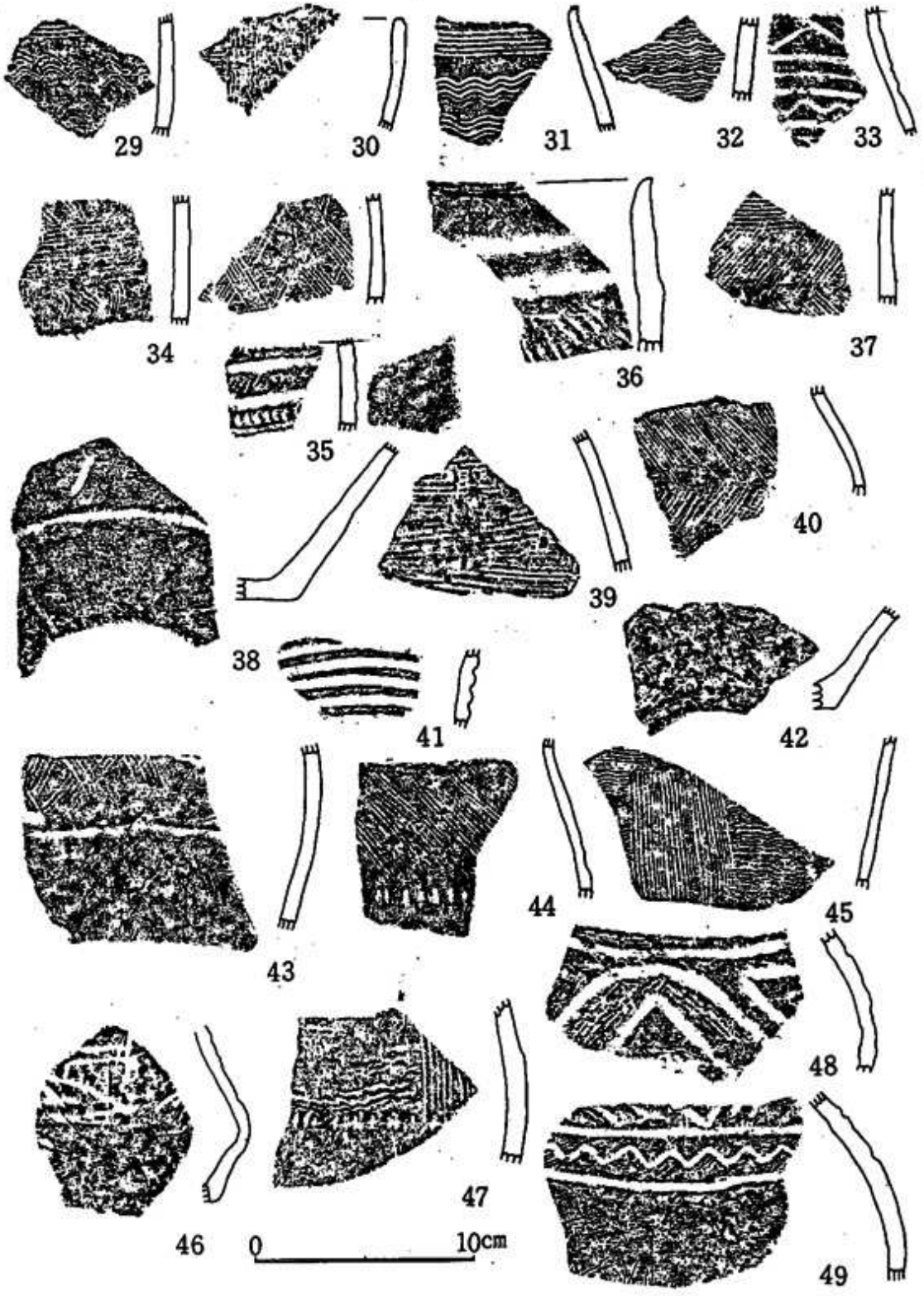


図44　土器拓影図(2)

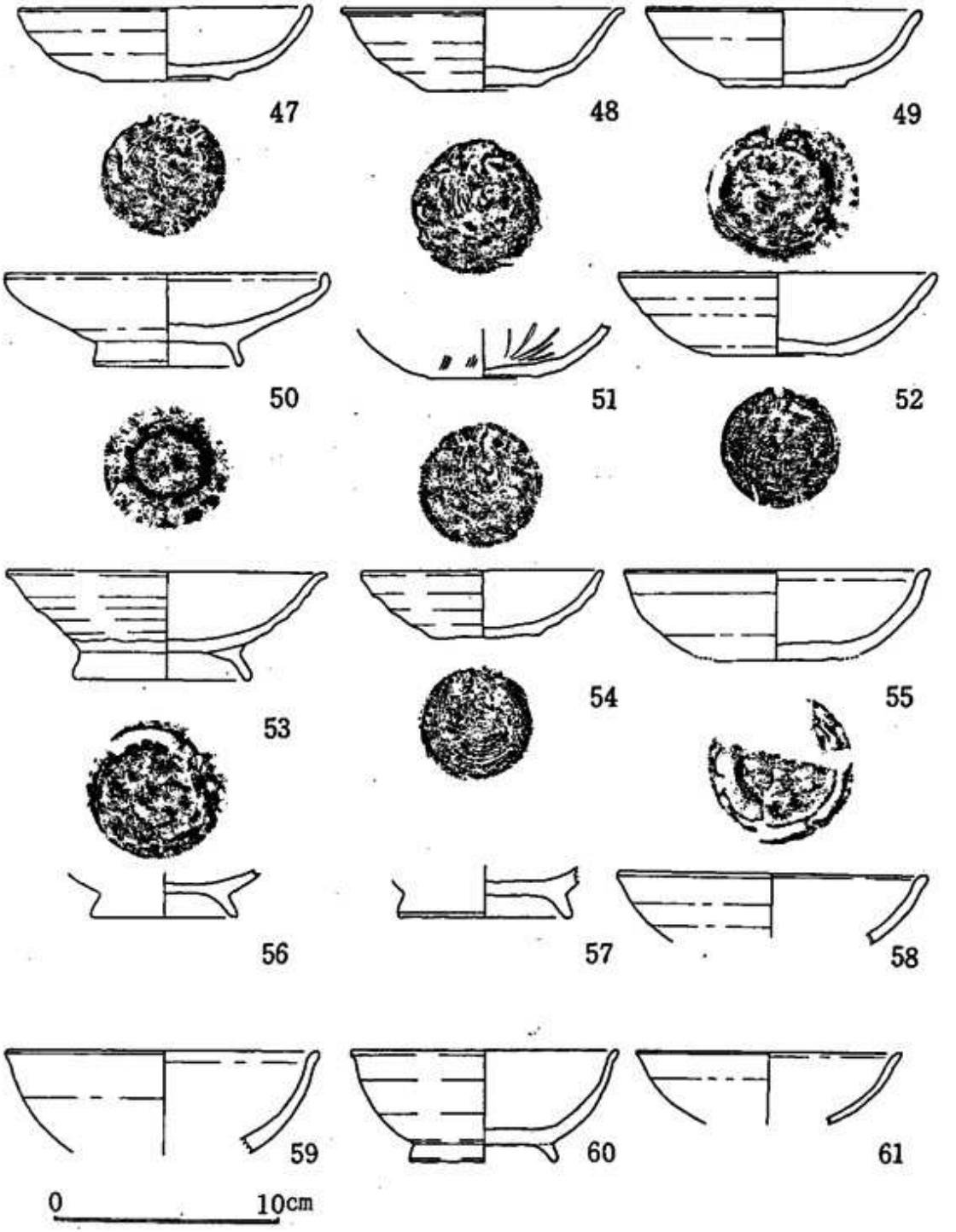


図45　土師式土器実測図(1)

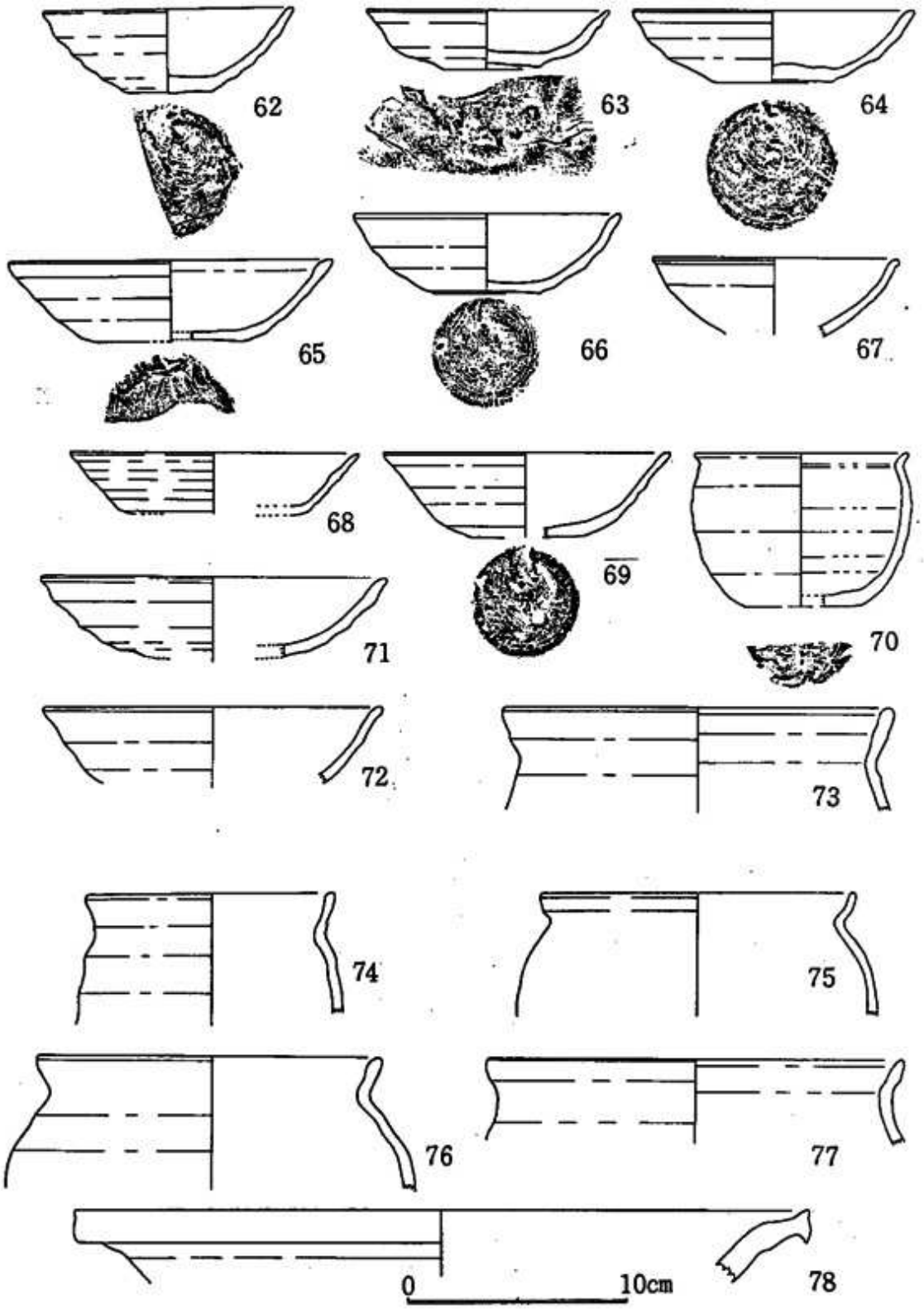


図46　土師式土器実測図(2)

このような状況下にあって、今回の調査は濠という窪地に廃棄された土器が多かったので、小面積の発掘にしては、器形の判明する土器が多量に埋まっていた。

また1・3・4号住居址にはセットとなる土器があり、年代を知る資料となった。このように遺構の前後関係の把握と、そこにある土器の位置関係によって、正しい土器編年が可能であり、当該期の栗林遺跡の文化内容を知る、手掛かりとなるであろう。

1号住出土土器の主なものは、蓋形土器（図38－12)、赤彩の鉢形土器（図38－15）口端部のみ縄文のみられる鉢形土器（図40－36）、地文に縄文を施しコの字重ね文の下に刺突文の見られる土器（図39－26)、櫛描斜格子文のみられる甕形土器（写真34)、甑形土器（図40－29）などで、栗林2式の範疇に属する土器と考えられる。

2号住は遺構の項に述べたように、濠を埋めて構築しており、これからみても2式の時期に該当しよう。ここの遺物で呈示したのは、小形鉢形土器（図40－30）と土器片を再利用した紡錘車（写真98）などである。

4号住の土器は検出数が少なく、形態の分かるものは櫛描斜格子文の甕形土器（図41－45)でこれも2式に該当しよう。

次に濠出土の土器について検討すると、2号住のごとく濠の埋まった後に作られた住居址もあり、埋没・廃絶年代の検討も土器の出土層の上下関係によって知ることができる。

遺構の項で述べたように、この濠の中に埋まっていた土器を密度の濃い面ごとに6面に分けて取り上げた。このようにした結果、第1面は土器の破片が小さく、接合できる資料が無く2面以下から5面まで接合・復元できる土器が多かった。

そして、従来からの定説に従えば、3面までの土器は、文様の簡略化と頸部への集約を栗林2式の指標とすれば、この3面の土器が画期となろう。

この3面からは、（写真27・図20）口端部に縄文が押捺され、太い線の櫛描波状文　簾状文の甕（図37－10)、口縁部に1対の突起があり、吊り下げ穴が2孔で1対見られる小型鉢（図38－13頸部に篦描沈線が4条横走する壷（図38－18)、頸部に篦描沈線が2条横走する壷などである。甕（図37－9・10)やや太い櫛描沈線で、縦に区画し、簾状文間を波状文で埋めている。10の土器は口縁も折り返し状になっており、後の箱清水式に見られる甕と共通している。

これに対し4面以下の土器は、口端部に縄文を押捺し、突起が5ヶ所あり、頸部の隆帯上に刻目がみられ、頸部から胴部にかけて篦描波状文、D字刺突文が上下交互にあり、下に櫛描波状文とボタン状貼付が8ヶ所あり、下半分に縦に張り合わせ状の割れ目の見られる壷（図36－2)口端部に縄文押捺され、頸部から下に箆描沈線があり、縄文と櫛描横線とが、交互に組合わされた土器（図36－3)

小形甕で胴上半部に縄文を地文として、太い沈線の回の字形が囲みが、3分画しているが、1分画は、他の2画に比べて小さくこの区画の中にボタン状貼付が2つ1組になって上下にある(図

37−6）甕は5面から検出された。

同じ面から壷の口縁部が出土し、これは口端部に刻目があり、吊り下げ穴が2孔対にあり、耳状の突起が4つあってその間に、沈線が7条横走し、その下に刻みの隆帯があり、下に沈線が1条と頸部にも同じ隆帯があり、下に沈線がみられるが、以下破損のため不明である。（図37−7）

広口壷で、口縁部縄文地文後、太い沈線で山形状に施文し、頸部の太い沈線間に縄文充填し、波状の篦描沈線があり、下に櫛描沈線が横走しているが、以下破損のため不明である。（図37−8）壷の胴部で、太い篦描沈線の間に、櫛歯の刺突文が当間隔にも巡るものと、櫛描の横走文とが、交互に施文されている。（図39−27）

壷の頸部から、胴部の残存で、頸部に刻みのある隆帯、沈線がめぐり、以下太い沈線2条縄文地文上に篦の刺突文がめぐって、5段づつ見られる。胴下半には沈線によって九つに弧状に分割され、中に縄文と刺突文が見られる。（図39−28）

壷の口頸部で口端部に縄文が押捺され、頸部の隆帯には爪形文があり、太い沈線間に縄文が5帯あり、下に爪形文、無文帯、爪形文帯があるが、以下破損のため不明である。（図41−41）口縁部が失われた壷で、頸部に浅い櫛歯状の成型痕が見られ、太い沈線、連続刺突文があり胴上半部には、太い沈線間に無文帯、櫛描横走文が交互にみられ、胴下半は無文である。（図41−44）

以下が濠下層出土の栗林1式からその前の段階に所属する土器で、6・7の土器は阿島式土器（下伊那郡）から松節遺跡（長野市）21号木棺出土の土器に連なる様式をもち、7は須和田式に系譜を求められる土器である。

また、濠の底部より赤彩の鉢形土器が出土しており、通説のとおり、栗林式土器成立の当初から、高坏・壷・鉢などの赤彩土器が伴っていたことが確認された。

栗林式には、壷・甕・浅鉢・高坏・甑・蓋などがあり、櫛描文が太い沈線、列点、縄文などの文様に同じ土器にみられるのは、畿内第三様式と南信の北原式の影響を受けていると考えられている。

2．石　器

今回の調査によって出土した石器のうち器種が明確であり且つ、図化可能なものは、石鏃13点、石斧2点、敲打石2点、凹石1点、磨石1点、研磨石1点、石皿5点、石包丁1点、石剣1点、玉1点の以上である。出土地点は、ほとんどが1～2号住居および環濠からであり一部4号住居に含まれる状況である。石質はほとんどが安山岩製であった。

各遺物の特徴ならびに特記事項は、第2表に示すとおりである。

番　号	器　種	形態上 手法上の特徴	石　質	出土地点	摘　　要
－1	石　鏃	凹基無茎鏃	黒曜石	A － 5	刃部突端欠損
－2	〃	凹基有茎鏃	〃	A － 1	完形
－3	〃	〃	〃	表　採	刃部突端と茎部欠損、裏面自然面を残す
－4	〃	〃	頁　岩	B － 7 (土坑内)	茎部欠損
－5	〃	平基有茎鏃	安山岩	B － 1	刃部突端欠損、調整粗雑(裏面未調整)
－6	〃	凹基有茎鏃	〃	B － 2	茎部先端欠損
－7	〃	平基有茎鏃	〃	〃	完形、調整粗雑
－8	〃	凹基有茎鏃	〃	A － 4 (2号住)	茎部欠損、風化が著しい
－9	〃	〃	〃	B － 6	刃部先端及び茎部欠損、小葉形風
－10	〃	凸基有茎鏃	〃	B － 2	刃部突端欠損
－11	〃	凸基無茎鏃	〃	A － 1	〃　　、未完成品を思わせる粗悪鏃
－12	〃	〃　、?	頁　岩	B － 2	未完成品
－1	石　斧	打製	安山石	B － 1	基部のみ残存
－2	石　鏃	不明	〃	A － 5	未完成品、大形
－3	石　斧	磨製	河原石	B － 1	小形、刃部の研磨は両面
－4	石　剣		粘板岩	A － 2	基部から刃部にかけて一部残存、両方より穿穴
－5	玉		滑　石	A － 6 (濠内)	未完成品、両方より穿穴、分割のためと思われる線溝が幾条かある
－6	敲打石	偏平	河原石	B－4～5	研石？
－7	研磨石	〃	〃	B － 4	凹面は片方のみ、表面風化
－8	敲打石		〃	2 号 住	石錘未完成品？
－9	石包丁		安山岩	A － 6 (濠内)	両方より穿穴、貫通しない穴1つあり、3/5
－1	凹　石		〃	A － 6	－2とセット出土
－2	磨　石		〃	A － 6	－1とセット出土
－3	石　皿	盤状	〃	B － 3	
－4	〃	〃	〃	A － 12 (4号住)	破片
－5	〃	〃	〃	B － 13 (4号住)	
－6	〃	〃	〃	A － 12 (4号住)	
－7	〃	〃	〃	A － 2	

表2　石器観察表

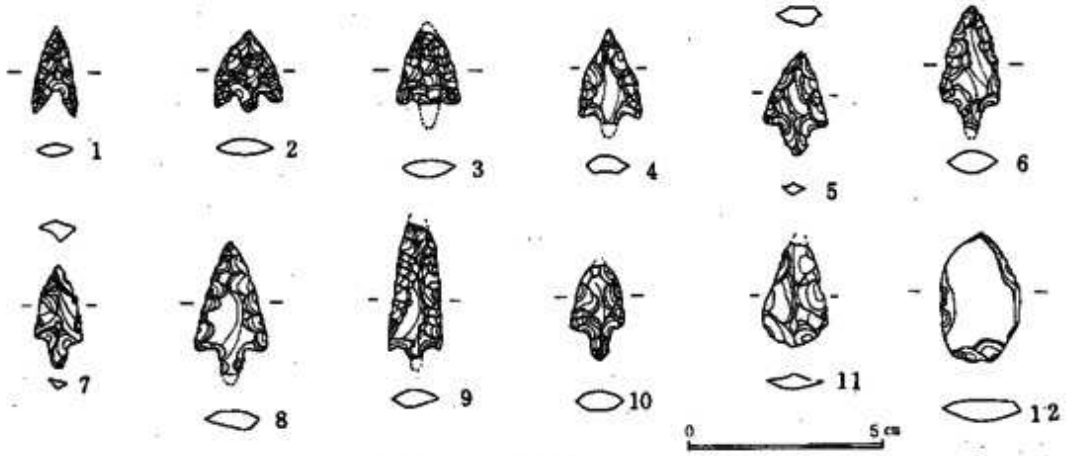


図47　石鏃実測図

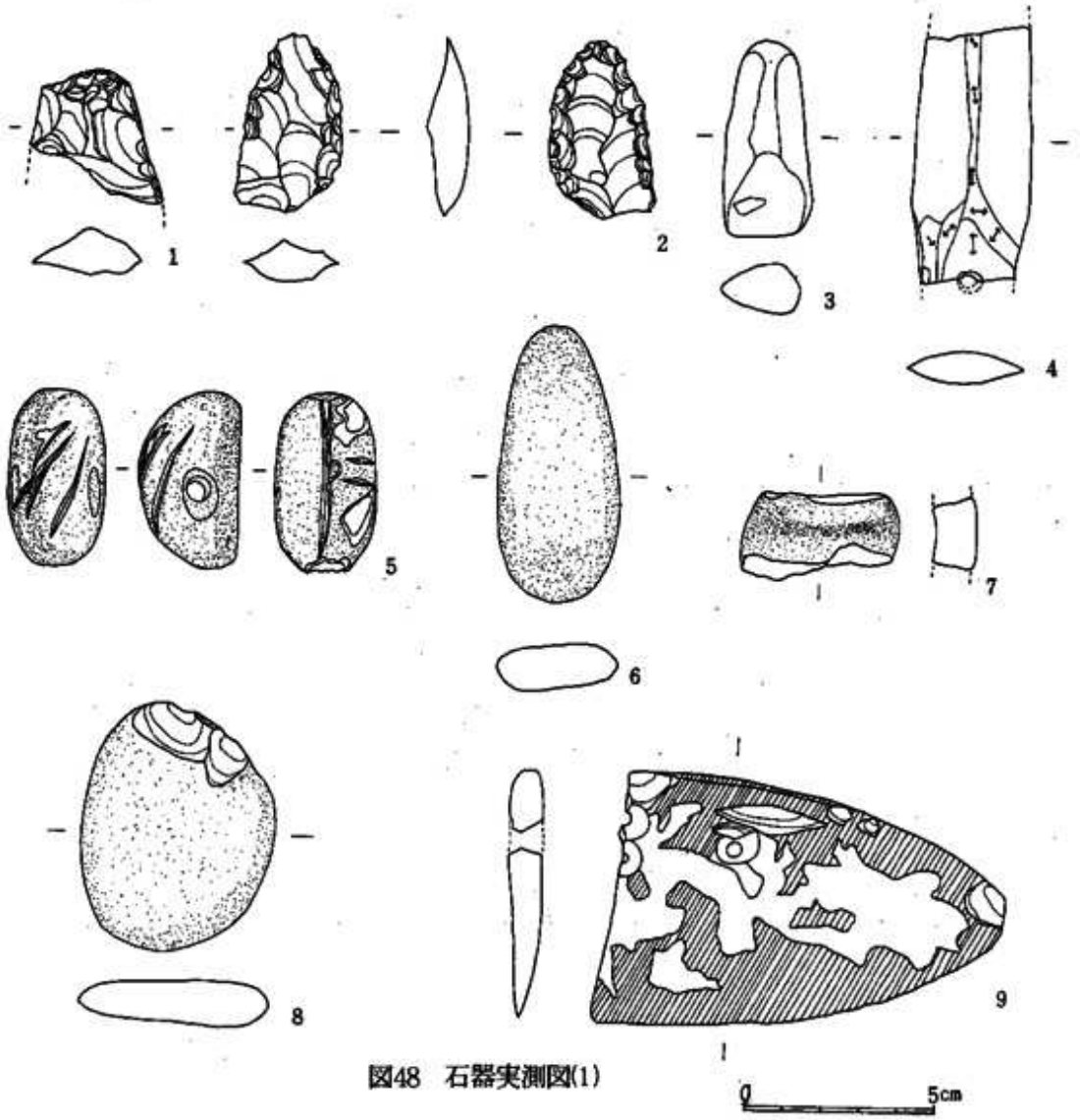


図48　石器実測図(1)

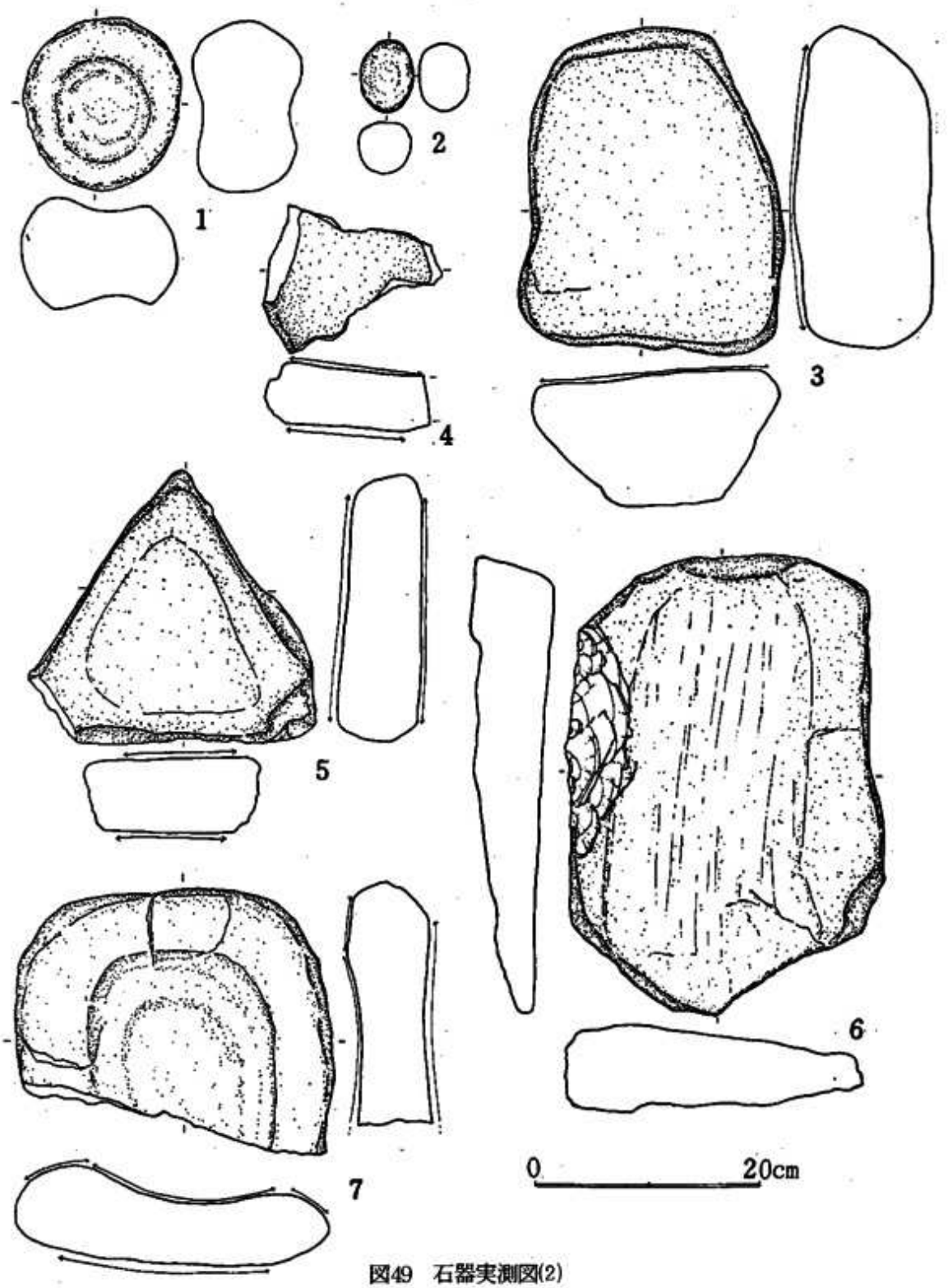


図49　石器実測図(2)

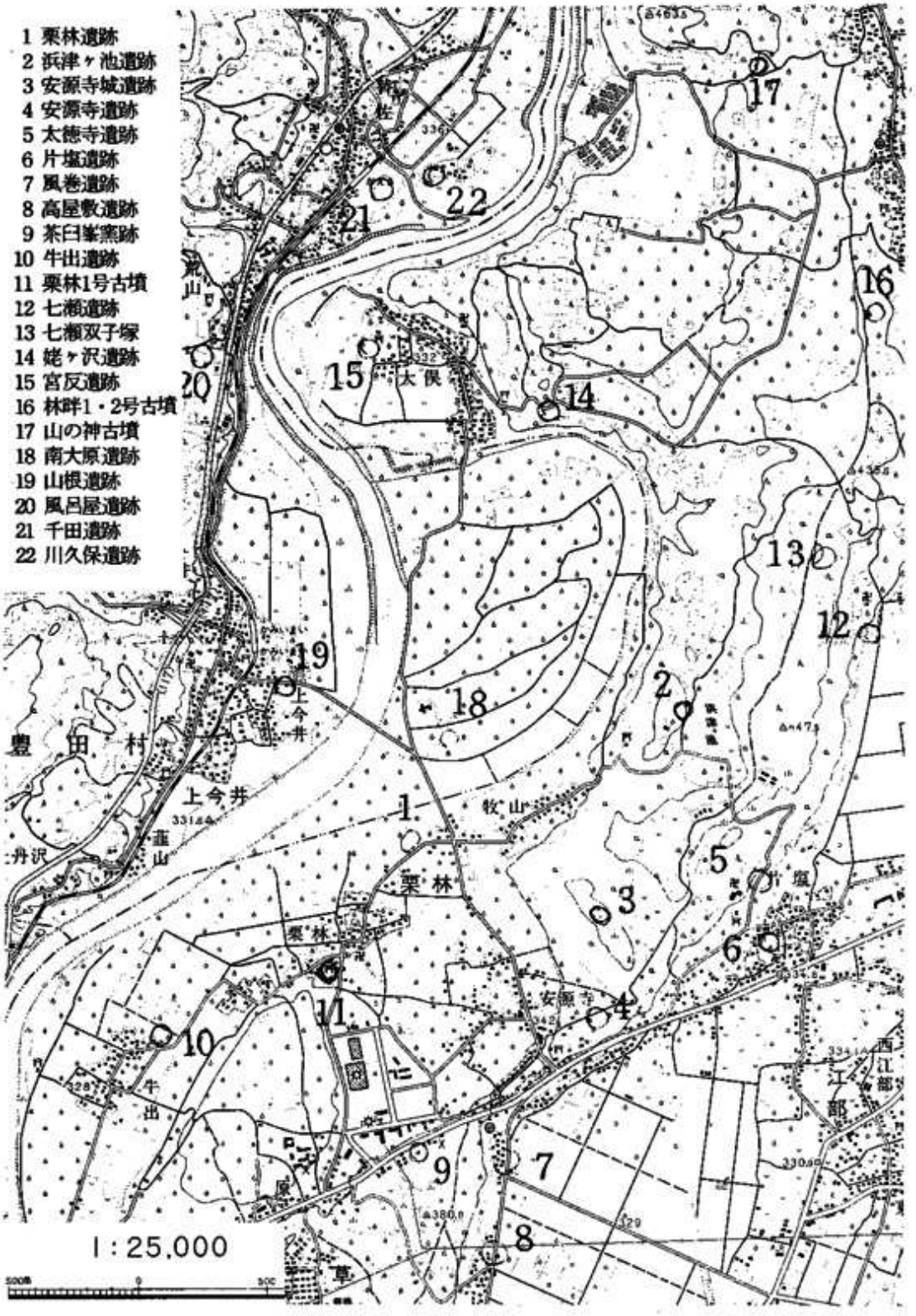

1 栗林遺跡
2 浜津ヶ池遺跡
3 安源寺城遺跡
4 安源寺遺跡
5 太徳寺遺跡
6 片塩遺跡
7 風巻遺跡
8 高屋敷遺跡
9 茶臼峯窯跡
10 牛出遺跡
11 栗林1号古墳
12 七瀬遺跡
13 七瀬双子塚
14 姥ヶ沢遺跡
15 宮反遺跡
16 林畔1・2号古墳
17 山の神古墳
18 南大原遺跡
19 山根遺跡
20 風呂屋遺跡
21 千田遺跡
22 川久保遺跡
豊田村
上今井
栗林
牧山
安源寺
牛出
1:25,000

図50　周辺の遺跡

第Ⅳ章　ま　と　め

今回の調査地点は今まで、栗林遺跡の中心地と考えられてきた地点より、西にかたよっていた。このため発掘の成果について、期待できないと危惧していたが、結果は予想以上の収穫を得ることができた。

遺跡の外角地帯の位置のため、栗林遺跡ではじめて濠が検出されたことで、確認された範囲は僅かで、全容を知ることはできないが、自然堤防上の地形と千曲川とそれに注ぐ小河川をつないで自然堤防を切断して構築されているものと推測される。その意味では、環濠との表現は適当ではないかもしれない。しかし弥生時代になって1世紀以上経過して出現したといわれる。防御施設としての環濠は長野県では寺所遺跡（飯田市）など弥生中期はじめの遺跡からみられ、濠の底にみられた土器から、栗林遺跡が弥生中期に成立し、人々がこの地に定住して間もない時期にこの濠が掘られたと考えられる。

このことは栗林遺跡が弥生中期に成立する当初から、稲作を行い富を蓄積し、耕作地を守ることが必要だったことになり、ムラの成立に関わる問題でもある。

今後の調査によって、この環濠が2重か、3重か、出入り口の有無などの問題を解決して行かなければならない。

この濠と今回の4号住の焼失住居とは時期差があり、また第1次調査の住居址も焼けており、ここの遺跡の住居址には焼失しているものが多いことは、独断的ではあるが、その原因の一つに争いがあったと推測できる。

今回出土の磨製石剣のごとく、戦闘用とみられるものや、前から知られている打製の有柄石鏃の多量出土など、富を巡る争いの時代の裏付けである。

廃絶の年代は、2号住がこの濠の埋没後に作られていることから、栗林1式の期限内に収まるものと推測され、2式の段階は濠が移動したか、軍事的緊張の時代ではなかったことによる。

土器については、従来、栗林1式の土器が破片資料が多かったことに比べて、今回は器形の判明する資料が多かった。このことから中期の松節段階から栗林1式をつなぐ土器が濠底から検出され、1式の成立に示唆を与えている。

しかし、先学の業績を大きく越える内容はないが、今後さらに濠出土土器の分析を通じてこの遺跡の成立などの問題に取り組みたいと思っている。

栗林Ⅸ
緊急発掘調査報告書

平成4年3月10日印刷
平成4年3月20日発行
発行　中野市教育委員会
長野県中野市三好町1－3－19
印刷　カナイ美術印刷